講談文庫

赤穂義士銘々傳

特 71
667

301250-001-7

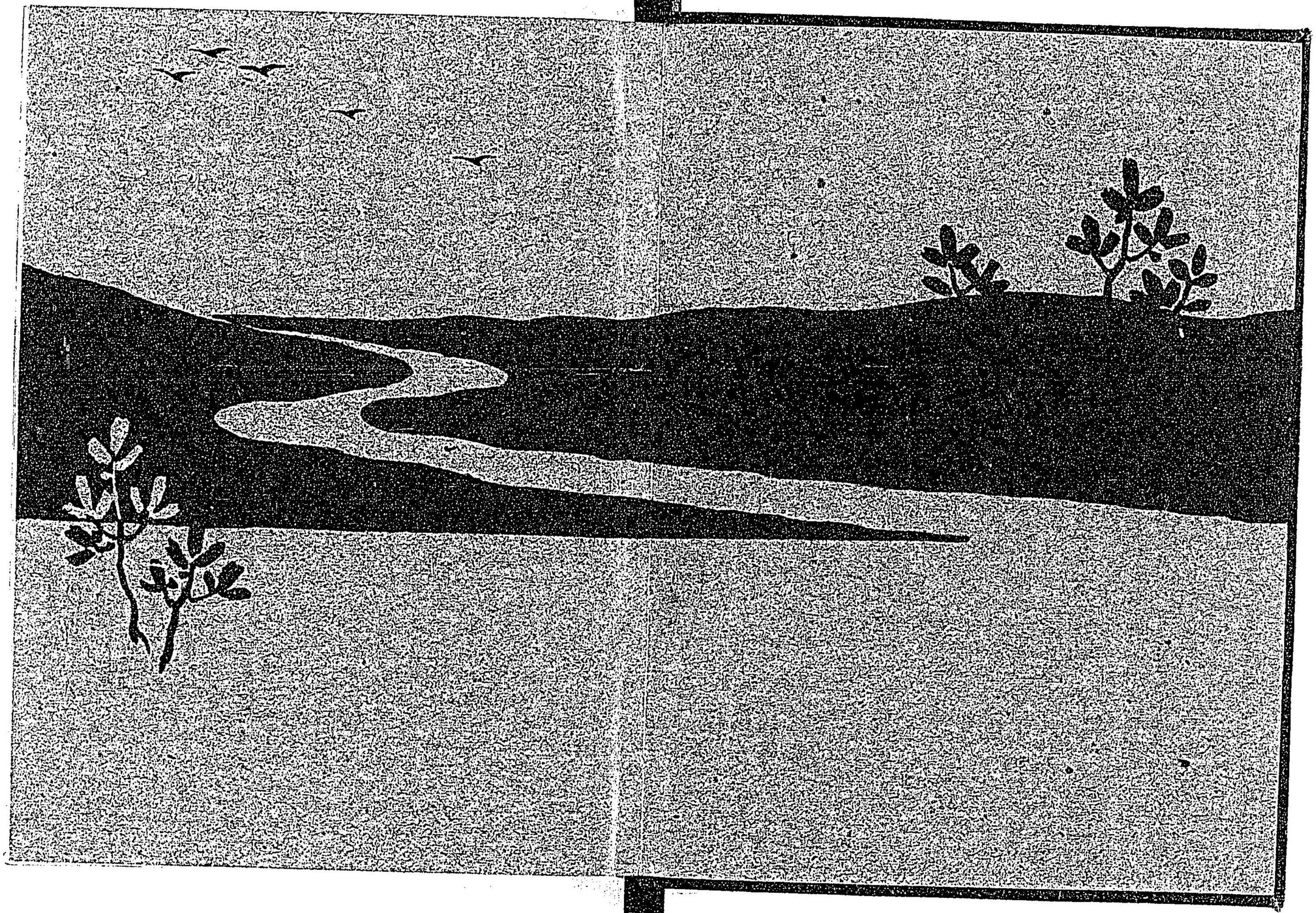
特71－667

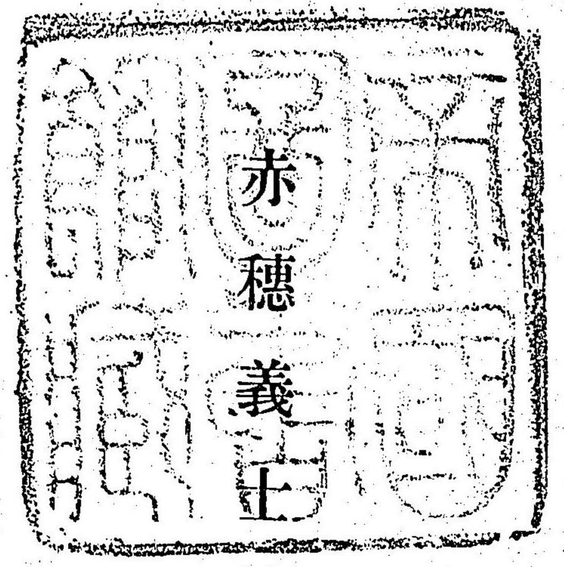
赤穂義士銘々伝

講談倶楽部／編

M44.7

DBS－0001





銘々傳

明治
44. 7. 12
内交

特71
667

序

古來、我國忠臣雲の如く、義士亦た林の如しと雖も、試みに、義士は誰ぞ、と問はゞ、十中の八九は必ずや指を赤穗四十七義士に屈せざるはなかるべし矣。これ何の故ぞ。思ふに事を擧ぐるの時世が漸く墮落せんとする際にて、士風地を拂へるの時なりしが故も、亦た深大なる源因となりて、世を聳動せしめたるなるべし。

世を聳動せしむること甚大なれば、人心に印せらるゝことも亦た深く、而して廣きもの也。我が四十七士が、隱忍一年。或ひは酒に隱れ或ひは下賤の者に身を扮し、網を張れるが如き嚴重なる仇の用心を潛り、苦辛慘澹するものなる時、世未だ其の苦心を知らざるなり世人の

知らざる時に於て準備漸く成る。一朝風發電擊、仇を逃ぐるに暇あらしめず、功遂に成る。義士の滿足、世人の驚讃、豈夫れ筆舌の能く及ぶ所ならんや。然も死に就くや悠然、又た一絲の紊れたるものあるが如き狀なくして、各人辭世を咏じて冥す。世に義士多しと雖も、其の能く始終渝らず、他の突發的なると、大いに其の類を異にするものあり、これ泉岳寺畔永久に香華の絶ゆるなき源因の大なるものなるべし。

此の如き絶大なる事業を成さんと欲せば、世事に比較的疎遠なる武士のみに依りて、極めて秘密の中に、諸種の準備を爲すが如きは、到底望むべくして得べからざることに屬す。然り、何人か、身を挺して事に當らんとする義人あり、機密に參して大いに盡したるものあるは疑ふべからざることなり。果然、大阪の町人、天野屋利兵衛は、身に町役を帶びながら、平素淺野家に出入し、大石内藏之助に心服するものあり、卽ち機密に參して、一諸金鐵の如く、千早く討入に必要なる諸器具を調製し、巧に人目を避けて之れを江戸に廻送す。其の辛勞や實に感服すべきものあり。

平素武器、殊に長槍鎖鎌等を製造するは、幕府の嚴禁する所、而して、利兵衛、今之れを犯す。圖らずも事洩れて大阪城代の爲め捕はる。されども利兵衛は義人なり、天野屋利兵衛は、男なりき。妻子皆捕はれ、拷問日毎に絶ゆることなきを見るも、男子の然諾は情の爲めに輕輕しく動くべくもあらず、毅然として敢て撓まず、大石等事を擧げて目的を達せりと聞き、茲に始めて莞爾として仔細を白狀す、其

の堅忍遂に及ぶべからざるなり。官亦其の精神を感じ、敢て嚴刑を避け、京都に悠々餘生を樂ましめぬ。

我が赤穗義士は、裏面に於て實に此の如き內助者を有しぬ、然り世に偉大なる內助者を有しぬ。吾人は義士の傳を講ずるごとに、此の偉大なる利兵衞を追想するを禁じ得ざるものなり。敢て所感を記して以て序に代ふるもの也

明治四十四辛亥年初夏

著者識

講談文庫發行の趣意

凡そ世に最も恐るべきもの、世道人心の萎靡、衰弱するより甚だしきは莫し矣然もこれ等世道人心の萎靡衰弱を未然に防ぐには、達識なる當局者ありて、常に巧に人心を導き、一路向上、能く其の嚮ふところに向はしむ。斯くて萎靡や、衰弱や何れの里に其の風を見んと欲するも、能はざる也。

武備張り、文華燦然として洽く、一等國の文明を飾れるもの、洵に他列國に恥づるところなく、國運の隆盛眞に東洋の雄鎭たり。然も此の燦然たる文明を形成するには、唯だ所謂上流者のみによりて、形成せらるゝものにあらず。寧ろ小數なる上流者は、當面の人にあらずして、中流、及び下層社會のものが、より多く今日の文明を形成したるものたることは、少しく社會研究を爲したる者の直に會得するところなるべし。

下層生活を爲すものは、多くは世の落伍者にして、目に一丁字なきものこれあり、殆んど其の八九分を占む。これ等目に一丁字なく、時に常識の有無をさへ疑はしむるものが、何如にして文明の素因とはなりたるか、これ頗る首肯し難きものあるが如しと雖も、掌を胸にして、靜に冥想すれば、其の源因の頗る單簡にして、要領を得たるを發見し得べき也。

彼等が休日、又は雨天の際に、先づ第一に襲ふは、講談場たるを失はず。講談師來るの遲ければ、木枕を執て横臥悠々時間の來るを待つ。呆氣なるものなり而して講談師の語る所は仁義禮智、或ひは忠孝の勸善懲惡の類ならざれば武勇絶倫氣一世を掩ふの英雄豪傑の傳記を講じ、知らず識らずの間に忠君愛國の情を旺盛ならしめ、仁義に厚く、武勇を練り、元より孝は百行の基と、目に一丁字こそ無けれ、愉快に説き立つる講談師の話の面白く、深く耳に入りて、家に歸つては兒孫にこれを説き聞かす、斯の如くして講談は非常なる通俗國民教育の一助となり、廣く深く國民の腦裡に印せらるゝと共に、其の教化の極めて偉大なるものあり。

吾人は必ずしも、これ等人心を指導するもの小説、講談のみに限るとは云はずされど此の講談が潛勢の偉大なるものありて、二十七八年戰役を始めとし、三十七八年役に外人を喫驚せしめたるものあるは、必ずや疑ふ所にあらざる也

これ我日本人は、我日本人の忠勇義膽によりてのみ憤勵せらるゝの慨あるが爲めならずとせんや。

されば、講談中の義勇を勸め、忠君愛國を説き、孝悌を説くが如きものをのみ撰み、これを梓に上せて廣く世に公にせんとす。目下の人心敢て萎靡したりと云ふにはあらねど、如何なる時代と雖も、常に今の世は墮落せんとしつゝありとの語を聞かざるなし。著者大いにこれを憂ひ、極めて通俗的に、然も世道人心を導くに、最も簡易なる方法を取る事と爲たり。其の撰むところのも

の著者獨特のものにして、一讀孺夫をして起たしむるものあり。然も亦た時に靈妙なる人情の大紛糾を說くことなきにあらずと雖も、幹は枝葉なり。本文庫發行の趣意は、何處までも前述の趣意なり。

聊か趣意を述べて以て著者の意を明かにすと云爾

明治四十四辛亥年初夏

著者識

赤穗義士銘々傳目次

目

第一席　吉例の勅使下向せらる
淺野内匠頭掘待役となり茲に禍を兆す……一

第二席　岡部美濃守、吉良上野介に辱しめらる
一旦の恥を怀へて遂に恨を返す……九

第三席　上野介の奸惡毒言を吐いて賄賂を求む
指揮正しからず内匠頭屢々恥辱を受く……一七

第四席　急速の畳換に一家中大いに苦心す
加藤遠江守友を思ふて内匠頭を諫む……二七

第五席　内匠頭深く臣下を愛し臣亦君を慕ふ
皚々たる酒宴後に思へば別離の宴……三八

第六席
上野介益す内匠頭を侮辱す
内匠頭遂に堪えず松の廊下に於て双傷す……四六

第七席
老中等内匠頭に同情して助けんとし
内匠頭武士道を守つて亂心の説を卻く……五五

第八席
内匠頭田村邸に切腹を遂ぐ
家臣邸を拂つて泉岳寺に弔る……六五

第九席
江戸邸の武士家を拂つて他に移る
大變の早馬飛ぶが如くに赤穂に向ふ……七三

第十席
籠城か切腹か評議容易に纒らず
嘆願の使者先づ江戸に向う……八一

第十一席
使者内藏助の命を守らずして失敗し
赤穂城内評議漸く盛なり……九〇

第十二席
第一の評議、忠勇の士籠城を説く
家老大野九郎兵衛血判を拒む……九八

第十三席
奥野將監大いに大野を攻む
不義の士の心中唯だ我が生命あるのみ……一〇七

第十四席
籠城か殉死か評議益す紛糾す
華岳寺墓前果して義士の血を染むるか否か……一二四

第十五席
僅に淘汰し來る六十餘名の義士
血判誓詞君の仇を復するを約す……一三

第十六席
内藏之助の深謀お金配當を爲す
領内大石の德を慕ふて歡聲に滿つ……一三

第十七席
古今の忠臣城を渡して出づ
住馴し城を顧みて怨み幾何ぞ……一四三

第十八席　村松喜兵衛赤穂に向ふ　三太夫父を氣遣ふて跡を跟ふ……一五二

第十九席　忠臣中途に斃れて遺子を托す　右衛門七奮勵父を辱しめず……一五七

第二十席　烈婦一身を捨て我子を激勵す　唯七感憤益す義勇に勵む……一六四

第廿一席　源藏養家に來つて未だ幾何ならず　忠臣君寵を受くる長短を論ぜず……一七二

第廿二席　忠臣酒に溺るゝが如くして然らず　源藏涙を振つて別れの德利を殘す……一八二

第廿三席　義烈群を拔く源吾兩國橋に煤竹を賣る　功成りて引揚の際、其角別れを惜む……二〇〇

第廿四席　菅谷半之丞苦心して効なく　内匠頭半之丞の忠を思ふて密に放つ……二一四

第廿五席　お家の大變を聞いて半之丞赤穂に趨す　内藏之助特に忠を賞して歸參を許す……二二八

第廿六席　俵星玄蕃酒癖の爲めに國を出づ　富森の苦心遂に玄蕃を敵に渡さず……二三七

第廿七席　忠孝共に重く義士血涙を流す　身命を捨て茅野三平君に殉ず……二四五

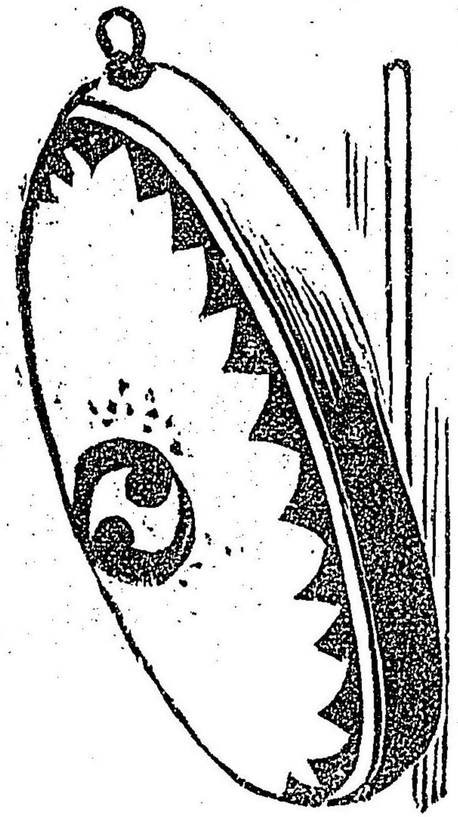
第廿八席　原惣右衛門の智謀は衆人の仰ぐ處　然も母は一命を捨て忠義を勵す……二七三

第廿九席　忠魂義膽古今稀にある人　一生に仇を討つ三度の堀部安兵衛……二八一

赤穂義士銘々傳（終）

第三十席

苦辛を嘗め盡して遂に仇の邸に討入る
仇を討つて思ひは霽るゝ雪の曙 ……二八七



赤穂義士銘々傳

講談倶楽部著

○第一席

吉例の勅使下向せらる
内匠頭接待役となり禍を芽す

お好みに依つて赤穂義士銘々傳を開講いたします……エ、徳川五代將軍綱吉公の御治世元祿十四年三月吉例に因て勅使の御下向になりますに就ては例年御馳走役たゞ御老中より御人撰によつて仰渡されることに定つて居りますが此度は播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、豫州吉田の城主伊達左京亮宗春の兩人で御座います依て御老中土屋相模守より殿中へ御召出しに相成り、相摸「知つての通り最早程なく勅使柳原大納言保貞卿、高野中納言保春卿、

清閑寺中納言照真卿御下向あらせらるゝが御馳走役は内匠、左京の兩人に仰付られる御上意であるぞ　内匠、左京「ハ、ア有難き仕合せ謹んで御受け申上るで御座いませう　相摸「就ては之は相摸より一應心付申すのであるが一年一度の御珍客のみならず御大禮の第一なる勅使を御饗應申すのであれば萬事愼んで疎相のないやうに致すのが宜らう、落度があつては將軍家の名折れ幕府の瑕瑾にも相成ること故充分敬意を表さなくてはならぬ去り乍ら餘り華美に流れては關東は奢りに耽るとの聞えも惡い、此邊は注意迄に咄して置く……

夫れから御格式の事之れは高家筆頭吉良上野介義央が肝煎となつて詳細心得居る故其邊は宜しく打合せを致して宜らう　内匠、左京「何から何までの御心付を蒙り忝なく存じ奉ります身不肖には候得共必ず疎忽の無い樣　相勤めるで御座いませう」と御受けを申上げた故　相摸守も大層御滿足で　相摸「屹度兩人に申付けたるぞ　内匠、左京「ハ、ア有難き仕合せに存じます」と云つて退出

仕りましたが引違へて田村右京太夫をお召に相成りました　相摸「右京餘の儀ではない三月は勅使御下向の吉例就ては伊達左京亮にも御馳走役仰付られに相成り左京に於も有難き旨御受けいたされたが何を申すも若年の事とて心元なき次第にも存ぜらるゝに據り其方萬事後見いたし疎相のないやう心付けては呉れまいか　右京「之れは又御念の入つた御言葉右京力の及ぶ限り必ず共に萬事補佐いたすで御座いませう」とお受けの御挨拶も濟んで之れから右京太夫は直ちに伊達の屋敷へ參り此度御大役仰せ渡されたる祝賀びを述べ之れから先きの打合せ抔いたしましたが　右京「先づ第一に堂上の格式不案内では致し方もなき事故早速上野介方へ罷越し萬事相談指南に預りたき旨をお頼みに相成つては如何で御座る　左京「御尤も千萬早速罷り越して相頼むで御座いませう　右京「夫れに就て少々御内談がある實は外でもないが之れ迄勅使御下向の砌り接待の御役目仰せ付られた者は孰れも吉良殿に意地惡き目に逢ひ

迷惑仕つた者もある夫れと云ふのは畢竟那の慾張り根生故進物でも少なければ詳しく敎へて遣らぬと云ふ卑劣な振舞、眞の武士の爲す可き事では無いが兎も角も御進物は糸目をつけず充分に致さるゝが宜しう御座らう　左京「夫れは良い處へ御心付け下すつた隆なから左樣な事も存じて居つたけれど如何取斗らつて宜しきものやらトント思案に餘つて居つた處……」と之れから家來に命じて充分手厚き進物を拵らへさせました其内に右京太夫も御歸館になつた故左京亮は早速吉良の邸へ訪ねますと折よく在宿であつたから早速對面いたされた　左京「扨上野殿此度は不肖ながら勅使饗應の役目仰付られたるが御格式の事少しも辨へ申さず宜しく御引廻しの程を願ひたく推參いたしたる次第何卒御腹藏なく御指南下さらば有難き仕合せに存じます」と詞を卑くして御頼みになる、上野介も斯ふ丁重に頼むからには大方進物も充分だらうと慾の深い事には氣を廻すのも早い　上野「之れは〳〵御丁寧なる御挨拶手前承知いた

し居る事は何に寄らず御相談申上ますれば必ず御心易く思召すやうに左京「夫れは千萬辱なき次第何分お頼み申す」と禮を述べて歸館いたす、跡で用人共は上野介の前へ左京亮からの進物を持ち運びまして　△「之れは伊達家よりの御土産大分菓子折にしては重いやうで御座います中身は定めし夥多しい小判詰で御座いませう」と云つて幾品か其處へ並べますと上野介は二コ〳〵顔で　上野「夫れでこそ福德の三年目伊達家に田村の後見なら斯んな疎末な土産も寄越すまいと思つて居たが扨ナカ〳〵念の屆いたものだ」と獨り恐悦に入つて居る、彼是いたして居る内に田村右京太夫も訪れて參り之れ又充分の進物で只管左京亮役儀に就きての御依頼故　上野「イヤ〳〵決して御心配下さるな某が御受合ひ申した以上は必ず隆になり日向になり御心添え申し疎忽のない樣取斗らひ申すで御座いませう　右京「其御言葉を承つて大に安堵いたします何を申すも左京亮は未だ若年者殊に家來と申しても孰れも田舍

侍不調法勝の段萬々御詫し下さるやうに」と懇々頼むと云ふものは切望無事に役目を仕課せたい一心……上野介も思ふ壺に嵌つたものだから大喜び、其内に右京太夫も暇を告げて立歸つたが、上野「流石伊達と云ひ田村と云ひ同じ大名でも仙臺陸奥守の血筋は太したものだ」と褒めそやす、淺野家に於きましても内匠頭は土屋相模守の御内意によつて吉良の邸へ訪れやうと思つたが兼て殿中に於て上野介の強慾なる事は承知して居ります故先きへ進物を贈つて置き夫れから頼みに往つたものか、夫れともや後で遣つたもの何の途丁寧な土産物でなければ満足は仕まいと云ふ御考へであつたソコで側用人を呼んで御相談になると大野郡右衛門といふ鄙吝な量見の人の氣を見るなど云ふ事の出来ない人物、郡「夫れは決して御進物には及びますまい吉良家は歴々の御家筋殊に高家筆頭であつて見れば勅使下向の節饗應の格式を教へる位の事は當然の事御進物抔は御無用になすつた方が宜しう御座いませう」と第一

に口を開きましたケレども内匠頭は内々不安心だものですから内匠「夫れでは余り愛想のない次第下々の者でも物を頼みに參るとすれば手土産と云つて僅か斗りの志でも持つて參るではないか況して一國の諸侯とあつては猶々美々しき進物を持つて參らなければ名義にも關はる事であらうと思ふが……郡「イヤ〳〵夫れは下々で申す端たない口術苟くも天下の諸侯となり上ッ方の御賴みに賄賂めいた遣ひ物など潔白なる武士の心に恥るところ、萬一お遣しにならなくてならぬ事なら首尾よく儀式の畢へた上に相當の禮をいたしたら如何なもので御座いませう却つて角立ず其の方が宜しくは御座いますまいか」と今度は多少理屈もありますので内匠頭も内匠「成程爾う云はれて見れば尤だ賄賂を遣つたと見られては深く恥入る次第だ」と斯う思ひました故「デは郡右其方の申す通り別段進物にも及ぶまい後で儀式も首尾よく濟んだ上相當なる禮をいたす事に仕やう」と仰せられ別段御土産の支度もなく内匠頭は上野介を訪れま

した處早速御對面になりましたので先づ寒暖の挨拶も畢り　内匠「扨此度は勅使饗應の大役を仰せ付けられたるも素より堂上格式の義も辨へず夫に就ては御老中の御心付けもあり旁是非御指南を仰ぎ度推參仕りました宜しく御引廻しの程を願ひます」と慇懃に頼む、上野介も大方夫れに就ては澤山の進物が來るだらうと思つて居るから上野「夫れは〳〵御丁寧なる御詞素より存じて居る事は御傳へ申すのが高家の役目御遠慮に及ばず何なりと御尋ね下さい某よりも從來の儀式一通りは御指南申上るで御座いませう　内匠「何卒何分とも宜しきやう御引廻しを願ひます」と之れで挨拶も濟みましたから内匠頭は歸館いたしました躰で上野介は近侍の者を呼び上野「コラ〳〵内匠殿は御歸りになつたが進物は何を持つて參つた×「ハイ別段御心付けは御座いません上野「何と申す土産物は無いのであるか×「左樣に御座います上野「コラ〳〵怪しからん事を申すな大方其方達が間で胡麻化したのだらう不屆者奴サツサと

出して見せろ×「イエ全く左樣な事では御座いません空ッ手で御出になりましたので……上野「不思議な事もあるものだ伊達、田村は那の通り丁重にいたすに當時内福の淺野家で斯んな事のあるべき筈がないが……デは今に使の者にでも持たして寄越すのだらうコラヨ淺野家から遣い物が參つたら早速取次ぎをいたせ屹度申し渡したぞ」と上野介は今に淺野家から立派な進物が來るだらうと首を長くして待つて居たが扨其日は遂に音沙汰も無い譯故夫れが爲め上野介は大に立腹いたしましたが抑之れが遺恨の基となり内匠頭を殿中に辱かしめ爲めに双傷に及ぶの件り席を重れて言上いたしませう

◎第二席

岡部美濃守　吉良上野介に辱しめらる

一旦の恥を怀えて遂に恨を返す

吉良上野介は已れ高家筆頭にて古禮典式に通じて居る故イザ大禮と云ふ時には諸侯と雖膝を屈し禮を厚うして參らなければ役目に當つて御用が勤まら

ぬと云ふ處から只管我意を振ひ殊に已れの慾心を滿足させる丈の進物でも贈らなければ夫れこそ式に違ふやうな意地の惡い敎へかたなするので孰れも之れには閉口するが左ればとて幾ら惡いらかと云つて聞かなければ知らぬ事故殘念なりとは思へど據どころなく手厚き土産物を持つて平身低頭して往く之に就て上野介を散々嗜めたい面白いお咄しが御座いますエヽ頃は元祿八年の事でありますが岡部美濃守が日光山御用を仰付られた節一度は典禮を心得ぬ爲め辭退をいたしましたが其の事ならば必ず心配いたすな吉良上野介に指南を仰ぎ其き差圖を受けたなら決して間違ひのあるやうなことは無いと云つて御老中方から特に御心添えがありましたから夫れでも御辭退申す譯には參りませんでトウ〳〵お受けを致し上野介に就て種々打合せを頼みました元來美濃守は清廉潔白なる武士氣質であるに因り、進物を先きへ出す抔と云ふ事は大嫌ひヽ夫れ故已れの精神に引きくらべて別段贈り物をいたしません夫れが上野

介には氣に入らない故大切な儀式の場に花んで態々手違ひを生ぜしむろやうな敎へ方をなし口汚なく言ひ罵りなどいたすが美濃守は眤と我慢をなし美濃「今此場合で上野奴を眞二ツにするのは雜作もないが夫れでは式場を騷がせ第一神靈に對し不敬に當り又臣下の者にも難義を懸け已れ一人忍ばざれば由々敷一大事を來すヽれば胸を擦つて置なくてはならぬ場合だと燃ろが如き憤怒を色にも顯はさず御役儀も惡なく終りました、ソコで江戸表へ御歸館に相成りし後家來を招んで有りし次第を悉く咄し美濃「斯ろ不禮なる者を生け置きては如何にも此美濃守が臆病に相聞へ先祖へ對しても恥しき次第……戰國の代であつたなら陣頭へ進んで善き敵と引組んで勝負をいたす可きものを思へば無念な事である去り乍ら公儀より仰出された儀式を私の爲めに過つては恐れ多い事と態と差抑へ胸を擦つて居つたが最早役目も相濟んだる上は決して容赦は出來ぬ尋常に名乘つて上野と勝負を決するに依り其場に臨み誰一人たり

とも助太刀などは無用であろぞ此儀屹度申渡したにより左樣相心得るが宜らう」家來の者も驚いた殿樣が自身上野と勝負をすると云ふんですから……グレども日頃剛氣なる御氣性で入らせらるれば御諫言申した處で御聞入れのあるべきやうもなく却つて御叱りを蒙る位の事でありますから故孰れも御止め申すものもないいゴで愈々上野介を我屋敷に呼び寄せんといたせと尋常に勝負を致す抔と申送つたところで參る筈もなし何うしたものかと種々御工夫遊ばし美濃「夫に就ては詐しておびき寄せるに越したことはない彼れは茶人であるに依つて茶事に事寄せ招待いたさう」と之から急に茶亭を拵らへ座敷開きをするに就て上野介を招きました上野は美濃守が斯くまで立腹いたして居るとは夢にも知らず座敷開きと聞ては何か丁重な御馳走でもあることだらうと喜こんで參つた美濃守は自身出迎へに及び新築の數寄屋へ御案内申した上御居間に於て充分身支度を遊ばし聽て茶席へ出られました素より茶會を催すとは一ツの

手段ですから茶の用意などある可き筈はなく二尺五寸の大刀を横たへ再び茶室へ參つて挨拶をいたしました上野介は不思議に思つた上野「今日は座敷披露だからと云つて招待を蒙つたのに开んな樣子は更らになく火の氣もない座敷へ通した上美濃守は仇討でも仕さうな風姿をして居るが緯によつたら何かの間違ひではあるまいか」と飽まで茶事に招かれた事と思つて晴の勝負を挑まるとは心付きません其の内に美濃守は居合腰に相成つてツリ〳〵と上野介に取詰めました故上野は驚くまいことか上野「之は美濃守には何事で御座るか今日茶會にて御招待に預り乍ら御見受け申せば左樣なる御用意もなく心得難き次第に存ずる」と云つたやうなものゝハヤ、ガヤ〳〵戰慄だした此時美濃守は大音を擧げ美濃「默れ上野……實は今日我屋敷へ呼寄せしは決して茶事にあらず其方と尋常に勝負を決せん爲であるぞ上野「之は仕たり貴殿と勝負をいたすべき理由は御座らぬが美濃「云ふな上野日光山御用の砌何を遺恨

に不禮過言いたしたるぞ其節討ち果すは安き事なれど何を申すも公儀へ對し恐れ多き故怒を忍んで無事に仕課せたが其無念さは如何ばかりであらう最早家來の者にも亡き跡の暇乞もいたし覺悟の上の勝負なるぞ、サア上野仔細を言へは斯くの如し去り乍ら欺し討などはいたさんぞイザ充分に支度した上勝負いたさん」と鋭き眼にカッと白眼み付けられ鯉口五寸斗り拔き掛けたから上野介は生きたる心地もなく脇差を取つて美濃守の面前へ投出し上野「之れは又存じも寄らぬ事を仰せらるゝものかな素より何の遺恨ある可き筈もなく唯御用多の爲め或は御意に叶はぬ趣意にも相成つたかは存じませぬが本心より御不禮申す怀の事は更に覺え申さぬ事何卒此段は平に御容赦を願ひ御憐愍を垂れ玉はん事偏に願ひ奉ります」と平身低頭して詫入る其ざまの惡いことゝ云つたら見られたもんではない美濃守も余り上野介の腑甲斐ないのに驚き切つて捨てん意氣組も折れ相手に足らぬ奴とは思召したが夫れにしても彼れの剛慢不遜

なる屢々迷惑いたすものもある山なれば充分嗜めて呉れんと思召し美濃「イヤ其儀は罷りならん心なき犬畜生であつたならイザ知らず亂物の靈長たる人として所以なく惡口雜言いたす可き筈がないサア立ち上つて勝負いたせ」と益々詰寄るに依り上野介は色青褪めて頭を擡べ摺付け上野「仰の如く某は長袖の身で御座れば犬畜生も同前の事、武道に老けし貴殿のお相手にはならぬ拔よく〳〵御推量下し置かれ一命御助け下されば誠に命の親重々御恩を忘却いたしませぬ人間がましく思召してこそ御怒りは御尤も千萬なれど犬の命を御助け下さると思へば左して御立腹にも相成りますまい何卒偏に助命の儀を願ひ奉ります」と涙を流して美濃守を伏し拜む、美濃守も余りの事に憫れ果て暫し樣子を見て居られたが見るも悪然の有樣で御座いますから思はず笑を催し美濃「左程の大腰拔とは思はざりしが犬同樣とあつては刀の穢れ故斬り捨るも無益の事……免し難き處なれど此度は免して取らせる去り乍ら

此の後美濃守と云はず誰に對しても高家筆頭だ位で無禮を働けば其時こそ容赦なく聞き次第擲り殺す故左様相心得られい 上野「命さへお助け下されば何とてお言葉に背きましやう此の後は屹度相愼みまする故何卒今日の儀は仙忘れ置れ下さいまし」と猶も三拜九拜して詫入る有樣は之れでも源家の末流を汲み高家筆頭たる吉良上野介かと思ふと如何にも氣の毒な次第であります、

美濃守も深く後來を戒めて唯此儘歸す譯には參りません故更に席を迭へて酒肴の用意を申付け立派なる料理を出して饗應いたしましたが義を重んじ恥を知る者であつたなら圖々しく酒など御馳走になつて居られる筈ではないのです

が慾には目の無き上野故強ひらるゝ酒は辭退せず夜に入るまでも充分御馳走に相成つて歸られたるには益々憫れる斗りで御座います美濃守も今日こそ亡き命と覺悟いたしたるに先方が刀を投出し涙を流して只管助命を乞うやうな次第で御座いますから無事に其場も治まり家來の面々も上野介の臆病なるを

聞き孰れも物笑ひとなりましたが先づ〳〵主君の御身の御安泰なりしは何より目出度き事と御歡申上げました……上野介は斯くまで美濃守に嗜められ恥面を掻されたから此後は屹度相愼むかと思へば更に开んな樣子もなく相變らず强慾をして非義非道の振舞多く進物の多少によつて心を左右すると云ふ卑劣なる行をいたします無殘や淺野内匠頭も終に彼れの不禮過言の辱しめを忍ぶ能はず元祿十四年三月十四日勅答の賀日殿中に於て刃傷に及ぶも又是非なき次第で御座います……

○第三席

上野介の奸惡毒言を吐て賄賂を求む

指揮正しからず内匠頭屢々恥辱を受く

進物賄賂によつて依估の沙汰あると云ふことは古も今も一般の通弊であるが兎角之れは密に行はれたがるもので御座います誰しも慾と云ふものがありまして金には目の眩みたがるもの……中にも上野介の如きは尤も甚しい利己

主義で自分の身に益の付くことならばチット位ひ恥を掻いても宜い……下げなくとも宜い頭でも進物澤山なら下げやうと云ふのですから實に始末に悪い之れでも侍かと思ふと氣の毒な譯……處へもつてきて淺野内匠頭は清廉なる誠の武士である故此度の勅使に就き上野介から教を仰ぐには夫れ相應なる土産物を持參しなければ良い顔をして差圖して呉れは仕ないと云ふ事は薄々御承知の事で御座いますから家來の者に一應御相談があつたゝケレども近侍の者始め孰れも侍氣質殊には江戸の風習にも慣れぬ者が多く從つて上野介の氣心など知つて知るものは一人もなかつたゝデある故御土産物など何となく賄賂がましく見えるのでお廢あそばせと云ふやうな譯遂に殿樣も其思召になり俗に云ふ空手で吉良邸を訪れましたが抑之れが大の失敗で其後内匠頭より屢々出向き古式典禮に就て指南を仰がんとしても扨ナカ〳〵教へて呉れゝばこそ上野「ナニ別段六ケ敷ことも何も御座らんので萬事某が承知して居れば當

日になつて一寸お咄し申しても濟むこと決して御懸念には及びません」内匠頭も正直だ實際アゝ云ふものだから大方當日になつてチョイト教へて呉れるんだらう夫れでは打捨て置けと云ふ譯で上野介の眞意を解する事が出來ない……何故と云へば上野介の心中ではイザ當日と云ふ段取りになつて赤恥を掻して遣らう人に物を敎はるに土産物もなければ進物もない己れは天下の諸侯だ位で人を馬鹿にして居るんだらうと眞綿に針を包まれるとは夢に知らず内匠頭は集儘に打過すと愈元祿十四年三月九日勅使柳原大納言照眞卿、高野中納言保春卿、清閑寺中納言廣眞卿等御下向と相成りました内匠頭は豫てより上野介が當日になれば夫れ〳〵お指圖すると云ふから兎もあれ家老用人番頭から以下徒士侍士足輕仲間等都合八百餘人を率き連れ傳奏屋敷へ入つて御侍受けの用意をいたして居る伊達左京亮に於ても同じく人數を引連れ用意萬端拔目なく整へられました殊に左京亮に於ては日々上野

介より禮式一切の教授を受けて居たのですから手順は確然定つて居る併し餘り兩家とも善盡し美盡したる事故小笠原佐渡守より兩人をお召し出しに相成り佐渡「外でも無いが豫て勅使御接待に就ては無禮の無いやう申達して置いたけれど見受ける處にでは餘り華美に流れは仕まいかと思ふ夫れに年々競つて我勝ちの美を盡すやうでは後々の役儀を勤める者が如何にも難義いたす次第成可く禮を亂さぬ以上は質素にいたされて宜らう」内匠、左京「仰の次第御尤千萬別段華麗を競ふ譯にも御座いませぬが出來る丈の事をいたし力の及ぶ限りの御持成をいたしたいと思ふ赤心より出ましたこと尤も此の上質朴にいたせと の仰なれば何事も其趣きにいたします」佐渡「左樣いたすが宜いナニしても御當家萬世に迨ぶまでの御馳走だから餘り立派な模範を出すも如何かと思はれる……」兩人の御馳走係りは謹んでお受けをいたし退出するソウコウ致して居る内に勅使も御到着に相成り役儀の事故内匠頭左京

亮は早速御目見えを願ひ御安着の御祝を申上げ首尾よく御目通りも濟ました高家衆には吉良上野介を始めとして大友近江守、大澤左京太夫、品川豐前守等お詰めになつて居られましたが腹黑き上野介は何か内匠頭の落目でもあつたら取つて押へ衆人の仲で恥面を懸して遣らうトウ〳〵今日になるまで世話になるからと折の一ツも持つて來やうと云ふ丁度見がないが犬の糞で仇を取て遣れと實に卑劣極まる精神をもつてソロ〳〵次の間へ起て參りましたもナニシテモ人の落度を見付けやうと云ふので御座いますからジロ〳〵方々眺めて居ると不圖一ツ目に留つた斯な時の目に觸れたのは宜い災難で上野「コラヨ此墨繪の屏風は勅使の御馳走に出したものと見受るが夫れに相違なからうな」側に控えて居られた番士は×「左樣に御座います淺野内匠頭より御差出しに相成りました上野「ホヽ内匠頭より差出されたのかナカ〳〵狩野家の墨跡で美事なものだが……アハヽ流石田舍大名は禮式も知らず呆れたものだ

御大禮に墨繪の屏風と云ふのは考へても解りさうなものであらうに……コレ〳〵御番衆早々に此屏風を引煥へられい勅使の御目に留つたなら却つて無禮にあらうぞ」番士も引換ろと云はれたつて矢鱈に引換へられるものではない之れには當惑して居ると遙か彼方に扣えられたる内匠頭は今上野介が墨繪の屏風を引換へよ御禮式に外れると云はれたので席を進めて上野介の側へ參り内匠「上野殿古式にもなき墨繪の屏風など仰せられるが之れは全く大禮を疎かにしていたしたる次第には御座いませぬ尤も金屏風も夥多持參いたして居りますれば早速引換へるで御座らう」内匠頭も田舍大名と云はれたんで癪に障つたから少し骨のある答辨をした之れが上野介には氣に入らない生意氣な事を申すなと言はん斗りの冷笑ひ上野「何から何まで御發明になる内匠頭なれど古禮典式は高家に相たづねざれば御解り召さるまい然らば如何なる御所存にて略式の墨繪屏風を差出されたか其所以を伺はん」内匠「如何さま御尋

れは御尤もの次第なれど御老中方より萬事美を盡すなとの御指圖もあれば態と差控えたる儀に御座る」上野「フムして又何方の御指圖にや」内匠「小笠原佐渡守より勅使御待受けの前日御差圖に御座いました」上野「成程爾ういふ御指圖なら夫れになさつたが宜しう御座らう、ケレども天下の政治は老中方の思召だが堂上方の儀式に就ては高家の外には指圖いたすべきものはない筈だ去り乍ら佐渡守の御指圖なら別に上野爭ふべき處なし其儘になされい」と頗る不興の體にて立去られた内匠頭も餘りと云へば無禮の致し方と御立腹になつたが此場は事を荒立てゝはならぬと昵と御勘忍遊ばされ先づ事無く相濟みました斯くの如く上野介は便宜の相談いたす處では無く何か内匠頭に落度のあれば宜いと斗り思つて居ります故相談すれば必ず間違つた挨拶する既に勅使御登城の節も上野介へ裝束の儀を御尋ねになりますと上野「夫れは別段平生に異つたことは無い半上下にて宜しう御座らう」内匠「左樣に御座れば半上下の支

度ないたすで御度いませう」と謂つて翌日は其積りに近侍の者へ仰渡された併し御大切なる儀式に半上下と云つては如何にも可怪な譯だ 内匠「殊によつたら某の聞違ひではあるまいか確かに半上下と云はれたと思つたがイヤ孰れにしても長上下の準備いたして參れば宜しい」と流石御心付きになりましたに依り翌日に相成ると長上下の一組は用意遊ばされて御登城になつたが同役の伊達左京亮は長上下にて控えて居られた故ソッと相尋ねると左京「昨日上野殿より長上下の御差圖故着用いたしたる次第に御座るが……内匠「左樣に御座るか某には半上下と承つたが然らば早速着掛へいたすで御座らう」「此時は良い鹽梅に着換の御心付きがあつた故別段儀式に欠ける事もなく滯なく相濟みました去れども上野の意地悪い取扱に對しては心中大に御立腹遊ばし武士の面を汚されては何面目あつて人に顏を合されんと大に殘念に思召して居られます……デ十二日は勅使方には上野へ御參詣になり御歸

館の節御馳走役の宿坊へ御立寄に相成り御休息之れあるとの趣き夫れ故十一日より淺野、伊達の兩家宿坊御掃除の儀を仰出されました……掃除と云つても疊の上を掃いて置いても掃除だし門や塀などの破れを繕つても掃除のうちだ夫れ故典禮を知らざれば孰れにいたして宜いか知れない内匠頭にも其度毎に上野介より恥辱を與へられ夫れのみならず取違つた事を云はれるので大に當惑いたして居りますが聞かなければ之れまでの慣例が解らない據どころなく問合せると上野「イヤ〳〵別段御念入りにも及ぶまい表の見苦しい處を宜く掃除して門や塀の破れて居るところでも脩繕いたす位で宜しからう」内匠「夫れでは御疊換などはいたしませんでも……」上野「其儀には及ぶまい」と云ふので之れから門や塀の破れ「然らば御差圖通りいたすで御座いませう」と云ふので之れから門や塀の破れたところや壁の落ちたところ抔見苦しからぬ樣充分手入れをいたし煤など拂つて夜に入り掃除も畢りましたから掛りの役人も引揚げました彼方は同役の伊達

左京亮も同じく宿坊の大掃除御自身出張いたされて御差圖最中で御座いますが然るに淺野家では最早掃除も濟んで役人は引揚げると云ふから左京亮も不思議に思召した左京「幾ら手廻しが早いと云つて引揚げには チト早さうだ殊によつて上野殿より御差圖違ひでもありは仕まいか」とソコは同役の親密で使を遣つて内匠頭に掃除の次第をたづねさせますと淺野家よりの挨拶に門塀壁などの破れを修繕して煤を拂つた斗りたと云ふから左京「扨は察するに違はず御疊換の御差圖がないと見える之れから申し遣はしても間に合うや否やは知れぬけれど知つて言はぬとあつては同役の親密を欠くと申すもの」と御考へ遊ばしたので早速上野介差圖の次第を詳しく御認めになり使を立てゝ宿坊掃除に付き御注意申上る内匠頭は伊達家よりの急使に接し取る手遲しと封押切り御讀下しになると疊換へいたせとの御差圖があつたと云ふ事を御承知になり夜も深更に及ぶころより俄かに宿坊御疊換への仰せ出され家中の面々

必死となつて二百八十疊の表替へをいたすと云ふ淺野家疊換難題の一席休息いたして辨じます

○第四席

エ、引續いて辨じます淺野家に於きましては宿坊掃除の義仰出されましたが上野介よりして別段太した掃除でなくとも門だとか塀だとか目立つ處だけ修繕いたして置けば宜しいと云ふことで御座います故疊換の事までは氣も注かず一同屋敷へ引き揚げた處へ伊達左京亮から急使をもつて當宿坊にては疊換へいたす旨の御差圖をもつて表替へをいたして居るが御注意までに申上ると云ふ文意で御座います故内匠頭は大に驚き内匠「怪しからん事を申す上野奴だ既に着服の義と云ひ此度の事と申し此内匠に手違ひなのみ生ぜしめんと心懸けて居る己れ惡い奴め」と心中頗る御立腹遊ばされたがナニシロ火急

急速の疊換に一家中大に苦心す

加藤遠江守友を思ふて内匠頭を諫む

の場合と云ひ殊には前申し上げた通り二百八十疊も表替へいたすので御座いますゆへ故左樣チヨツクラ一寸出來る譯ではないソコで伊達家の使をば丁重に犒ひ内匠頭に於ては早速に近侍の者を召し重役に申付けて之れより宿坊二百八十疊の表替へと云ふ事を仰せ出された重役始め一同の者も之れには驚いた「マア何んと云ふ火急な事になつて來たらう併し何しても御疊換へが出來なかつたことなら主君の落度にも相成りお家の瑕瑾と相成ること……君辱かしめられば臣死すとかや御馬前に討死すると思へばナニ御疊換位ひ必ず今宵の内に成行いたさせん」と言合されど孰れも胸中に決心いたしたること故其場を立つて一同は直ぐに之れより御出入の疊屋をお召しになつて役「金は幾ら程懸つても決して兎や角く申さぬに依り之れから三時か三時の間に是非共二百八十疊新規に表替へいたすやうに力を盡して貰ひたひが何うぢや」疊屋も驚いた之れから賂酒でも飲んで寢やうと云ふところへ御出入の淺野樣より御使で御座います

故取敢ず伺つて見ると火急なる御申付けで御座い升ので幾ら手に持つた職だと云つても之れは直ぐに御返答は申上げ兼る殊に自分の弟子ばかりで出來る事では無し仲間の者を群めて遣る仕事ですからモジ〳〵躊躇いたして居る役人は氣が氣ちやア無い役「何うだ疊屋日頃主君の御高恩を項き御出入申付けられて居て見れば斯ういふ時にお役に立つのが御奉公の一ツたぞ……何だ少々御受けが致し兼ると……怪しからんことを申すな如何に町人風情とは申せ其方は親方とも云はれるものでは無いかシテ見れば少許は義俠心もあらう人情も義理も辨へて居るだらう、サア何うあつても御受けが致されぬのか然らば決して容赦は致さんぞ武士が此通り事を分けて頼むのにグヅ〳〵致して居るやうなら眞二ツにいたして呉れん」と刀を引寄せ鯉口を切つてイザと云はゞ切つて捨てん勢……疊屋は益々驚いた「コリヤア飛んでもない處へ來たもんだ何道グヅ〳〵仕て居れば殺されるし疊屋の方なら手に職のあることだもの仲間の者

に相談したら二百疊だらうが三百疊だらうが明日の朝までに出來上られい事もあるめい夫れに日頃御世話になつてる御出入先きであつて見れば斯ういふ時に御用を勤めるのが御役に立つと云ふものだ」と有繋は職人でも親分は違つたもの早速御受けをいたしましたから役人衆も大に喜こび斯んなときに金に糸目を付けてはと思ひました故役「何うだ疊屋金は入用だけ持つて行くが往い……ナンダ跡勘定で宜つて开んな間度呂こしい事をして居て何うする前金で宜いから持つて往くが宜い……コレサ是非持つて往けと云ふのに……金を見せなくて何うして今夜大勢の仲間を集める事が出來るか」と返つて役人の方が金を遣らう入用だけ持つて往けと申渡される疊屋の方では今持つて往つては相濟まぬ譯斷て辭退をするので役人衆も困つた、ケレども入らないと云ふのに無理に持たして遣る譯にも參りませんに依つて疊屋は其儘退出する跡で役人達は相談を始めた ×「何うで御座らう中山氏アヽして前金では貰ぬ

と云つて歸つたが滿足に仲間へ交渉が届き明朝までに二百八十疊の表替が出來ませうや心配のことでは御座らぬか △「如何さまアヽは申して往つたものゝ一時脱れに口先きで胡麻化し命を捨てゝも詰らぬと思つて那んな口を利いて參つたとしか思はれんが……○「イヤ〳〵中山氏酒井氏御兩所決して御案じ召さるな彼れは職人に似合はぬ義俠心のある男で一旦ウンと受合へば必ず命懸けでも遣らうと云ふ精神の男だ今に萬端用意して取懸るで御座らう支度さへ出來れば二百疊や三百疊は忽ちの間だ」と云つて濟し切つて居る者もある衆議紛々たる處へ再び以前の疊屋が參り疊「お役人樣へ申上げます那れから直ぐに弟子を仲間中へ走らして俺の家へ呼びあつめ扨今晩は之れ〳〵云々と話しをするとお前さんが受込むものなら何うか出來る丈の事をしやうと受込んで呉れましたから何うにかお間に合せませう 役「左樣か夫れは奈ない何うか何分頼む……之れから同役一同出張するにより職人は一人も餘計に連れて

來れ吳れ」と畳屋が受合つて吳れたので役人方もホッと一息吐き之れより宿坊へ詰切りで畳替へをいたしましたが ナニシロ口でこそ二百八十畳と云ひますが現物を見たらウンザリ仕て仕舞う、ケレども役人方の盡力と畳職人の勉強で僅か三時斗りの間に悉く出來上り夜の白々明に一同引揚げました扨十二日は御佛參も滞りなく相濟み勅使のかたゞくは傳奏屋敷の宿坊にて御休息に相成り此日も事なく式を終へられましたが内匠頭は御退出の砌り上野介に面談いたし 内匠「扨今日御佛參の儀も滞りなく相濟み御同様大慶に存じます殊に又宿坊掃除の儀萬端御指南に預かり有難き仕合せに御座います」と夫れとはなしに前日の疎漏なる差圖を咎めました上野介は圖々しいのですから此位の事を云はれたつて一向感じがない内匠頭は何と挨拶をするかと思つて居ると空嘯いて其儘行き過ぎんといたします故 内匠「上野殿實は某しの聞誤りかも存ぜんが宿坊畳換の儀は別段苦しからずとの御咄しなり

しに左京殿より御注意下され昨夜九ツより差懸り今朝卯の刻までに仕揚げて漸くお間に合つたやうな仕儀之れにては誠に迷惑をいたします」と一本突込んだが大抵の者なら斯んな疎忽千萬な差圖をして如何にも氣の毒だと思ふのが人情です然るに上野介は進物もなく土産物も持つて來ずに古禮典式を聞かう抔と云ふ虫の宜い内匠頭には是非落度を見出し失敗して遣りたいと云ふ卑劣な根生ですから歴々の前をも憚からず態と大聲を揚げ 上野「何と云ひ召さる畳換を致さぬは貴殿の落度では御座らぬ宿坊掃除と云へば畳換は當り前のことと帶をもつて座を掃ふなどの事は田舍大名のすること少しは堂上方の心得も嗜まつしやい……殊に斯樣なる大禮に金銀を惜しみては何事もお間に欲けるは知れたこと御役大切と思ふなら餘り吝々いたさぬが宜らう」と云つて悪々しげに冷笑いたし其儘行き過ぎました内匠頭は心中頗る怒りを含み已れ上野何の遺恨あつての事かは知らんが容赦相成らぬと思へども此場に於て差

違へては上へ對し恐れ多き次第と我慢になつて御歸館に相成りましたが實に胸中安からず御歸館に相成つても御居間にならせられ御不興の體にてありました然るに爰に内匠頭無二の御親友にあらせられる豫州大洲の城主加藤遠江守は今日御退出の砌り内匠頭が事の行違ひより上野介の爲めに辱かしめを受けたる事を御存じ故若しや思ひ詰めたる一徹に間違ひでもあつては相成らぬと其夜直に淺野の邸を尋れ夜中乍ら御意得たき旨を申通じました内匠頭も今宵は何となく胸の晴れぬ事とて外の方なら御目通りになるのでは御座いませんが御親密の間柄なる遠江守の事で御座います故早速奥の間へ御通しに相成りました所ういふ時には氣の合たものと胸中を明しあつて咄しでもすると大に鬱を散ずるもの夫れ故内匠頭も樣々の御物語りに御氣分も直りましたる御樣子……遠江守も折が良つたら夫となしと短慮を出さぬ樣充分意見いたさうと云ふ御考へでありますから今此體を見るより切出す

には良き機會なりと思ひ遠江「時に内匠殿今晩夜更けて態々伺つたのも外では御座らぬ實に疾くにも御心付け申可きであつたが公用萬端いそがはしき故遂々今日は及んだので……内匠「ハヽア何事か存ぜんが御親切なる御言葉内匠有難く存ずる遠江「イヤ〳〵其御言葉では恐れ入るが外でも御座らぬ吉良上野介は人も知つたる强慾非道己れは源家の末葉であり且つは少將の高官にも陞り居り乍ら下人にも劣つた志、就ては此度の御大禮によれば又も例の持病が起り貴殿に對し如何樣なる無禮をいたし惡口雜言申すやも圖り知れざる事去り乍ら下郎と思し召し必ず相手にいたすなどの事は御無用になすつて宜しう御座らう」内匠頭は頭を垂れて無言でお居でなさるから遠江守は再び語をつぎ遠江「イヤナニ内匠殿近い例が斯うで御座る貴殿犬の性質を御存じで御座らう成程主人の恩は忘れぬとか一旦發ほれゝば三年は覺えて居ると申すなれど夫れは犬の尤も美性をいふことであります……武士にあるまじ

き行ひをする者を犬侍と申すが犬には隨分惡い性質のあるもので肉の一片も與へれば知らぬ者にも尾を掉つて人なつこくする若しも其肉を與へなければ吠へ付いて嚙み付かうと云ふ實に始末の惡い畜生であるが夫れも犬と思へばこそ嚙み付かれても容赦して置く……人と云へども其通り人の皮着た犬畜生所謂人面獸心のものには決して御取あひなさらぬが專一、よしや惡口雜言を働く上野如き奴でも彼は犬だ人面獸心の奴だと思へば腹も立たぬ趣義此儀を篤と御勘考に預りたいので御座る」と眞實面に顯はれ犬の譬へを引いて夫れとはなしに内匠頭が若しや短慮の振舞でもいたしはせぬかと余所ながら異見をいたします此時内匠頭は太き息を吐き内匠「遠州殿の厚き御言葉平生の御親交あればこそ内匠の身を思ふての御意見忝なく存ずる……何を隱さう勅使下向の折柄より何の遺恨か知らざれど上野の無禮過言加のみならず萬事手筈が取違はせ禮法に缺けるやうにのみ仕向け落度のあれかしと願うのは言はず既に存じて居る夫れ故滿座の中で恥しめられ既に差違へんと思ひし事も無き次第にも之れなけれど日頃短慮と言はれたる内匠が又例の持病で殿中御場所柄をもわきまへず狼藉を働いたかと云はれるも殘念、夫れ故忍ぶべからざる恥辱を忍び治まらぬ胸を漸くに摩つて居るやうな次第遠州殿某の無念御推察下さい」と涙を流し眞情を打明けましたから遠江守も共に涙に暮れ遠江「如何なれば上野介同じ武士にありながら斯く迄に卑しき心にや嘆はしき次第である」と慰め乘て居りました其内に内匠頭の御心付けの立派な御料理をもつて饗應する「遠江之れは誠に恐入る次第夜中推參いたしたるさへあるに御丁重なる御待遇では……内匠「イヤ〳〵今宵は何となく心も鬱々して居るし痞もたかぶつて獨り苦しんで居る折柄酒に氣を取直さんと申付けて置いた有合せィザ一獻傾けられい」と之れから打ち寛ぎ綏々物語りをいたしながら酒を飲んで居る併し遠江守は如何にも内匠頭のことが念頭に懸り氣にな

つてなりませんから飲干したる盞を差し重れて申すには 遠江「最前も申す通り必ずく御勘忍専一と存じますぞ鷄を判くには牛刀を用ゆるに及ばず下郎を相手に刀を汚すも大人氣なきこと此處の道理をよく〳〵御勘辨あられるやうに……内匠「如何さま身に染みて御異見の程忘却いたしますまい必ず御安心下さるやうに……」遠江「其御言葉で某も安堵いたした……夜も更ける斗り之れにてお暇いたさう 内匠「マア〳〵今一獻お過し召され……今一獻……」と頻りに名殘りを惜んで居る 遠江 守も遂袖をひかれるものですから盃の數を重れ夜の白む頃に淺野の邸を辭してお歸館になつたが思ひ合すれば之れぞ名殘りの酒宴にて越えて十四日の勅答賀日に當り終に殿中双傷に及ぶの件り席を重れて言上いたします

○第五席

内匠頭深く臣下を愛し臣亦君を慕ふ

毀〻たる酒宴後に思へば別離の宴、

前席にも申述べました通り上野介は内匠頭に對し頗る悪意をもつて冷遇するので日頃短慮の内匠頭は如何に胸中鬱憤に忍びざる事であります夫れ故若しも此上罵詈雑言いたすに於ては決して容赦は致すまいと云ふ御決心でありました處へ日頃御親密なる加藤遠江守が御出でに相成り夫れとはなしに短慮の振舞なきやう御意見申したので漸く憤りも晴れ其夜は別條なく御休息に相成りました翌十二日は殿中に於ても滞りなく御式も濟み内匠頭は今日ばかりは恙なく一日を過したと御歸館になつても御機嫌斜ならずありました茲に殿の御近侍に神崎與五郎に申す忠義の武士があります……後に義士の一人に加はり殿の御無念を晴した忠臣でありましたが内匠頭が勅使御饗應の役目を仰せ付かつて以來何うも御顏色が勝れず怏々として樂まずと云ふ御氣色故心中に大に苦しんで居るのです 與五「何うも此頃の御樣子を伺う處唯事で無い殊には噂にも聞く通り殿中に於て上野介に度々の無禮を仕懸けられ剩へ

禮式に外れ落度のあるやうにと態々間違つた事を云つて後で田舍大名は禮法を知らぬ抔と滿座の中で御恥辱を與へるさうだが必ず夫れに就て御無念忘れられず御氣色も勝れないのであらう何うか事なく御役儀を濟ませられるやうにいたしたいものだ」と類りに心を惱まして居る、スルト十二日の夜に至り加藤遠江守殿が御出でになつて樣々例ばなしの御意見をいたされたから扨は殿には心中余程御無念に思し召して居るに違ひ無いと云ふ事を確かめました故翌十三日御登城の砌りも何うか御無事に御歸館遊ばされる樣にと弓矢八幡に祈誓を懸けた程でありますスルと夕景頃に御式も滯なく御歸りに相成りましたから

與五「先づ此れで今日は無事なる御尊顏を拜することが出來て何より目出度い此の鹽梅で此處四五日も經たなら先づ御役濟にも相成るだらうから……」と人知れず胸を痛め平穩無事を祈つて居りました其夜內匠頭には御機嫌も麗はしく御氣に入りの與五郎を御召しに相成り四方山の御咄しをいたされます與五郎は

此時こそ兼て思ふ所存を申上げんと存じました故與五「エ、我君へ申上げます

內匠「何ぢや與五郎改まつて申すでは無いか、與五「ハヽア實は某が一心を申上げんと既に兩三日前より思ひ立つて居りまするなれど其折を得ませず致して居る故其儘に打過ごしましたが……內匠「ウム遠慮なく申せば宜いに、與五「イエ夫も今晩に至つて益々決心を確かめましたので御座います內匠「左樣か何事かは知らぬが申して見い與五「實は昨日遠州殿御出でに相成り種々御物語りの事陰ながら伺ひまして御座います內匠「アハヽ、聞いて居つたか去り乍ら別段と心配にもならぬ事與五「イヤ〳〵此度の御役儀に就てば何時になく御顏色も御勝れ遊ばさられず之れには何か事あるならんと百方苦心いたす處承はれば高家筆頭吉良上野介我君に對し無禮雜言いたす由定めし御胸の內御無念に入らせられる事と恐察たてまつりますが其れに就て聊か與五郎の決心も御座います內匠「ウム其心配は嬉しく思うぞ去り乍ら昨夜遠州殿にも

申した通り犬と思へば事も濟む決して短慮はいたさんぞよ　與五「ハヽ有難き思召し其御言葉を承つては臣下一統の喜び此上も御座いますまいが御無念の餘り若しや殿中にて刃傷などの御沙汰でもあつたなら夫れこそ一家の人々支離滅裂如何に歎きに暮るゝ物もあらうかと存じます依つて萬一上野介に於て罵詈暴言を吐くやうなことでも御座いますれば臣として君の御恥辱を見過すに忍びませぬ事殊に彼は官位こそ四位の少將たりとも僅か四千五百石の小身者相手にするには足らぬ奴、殿御自身の御手を下すまでもなく某に御暇を賜はり御情をもつて御差料を賜はらば必ず上野介に近寄り例令先方に幾人の護りあるとも必ず本意を達し御無念の程を散ずるで御座いませう此儀何卒御聞下し置かれたう存じます」と赤心面に顯はれて殿の御言葉の下るのを俟つて居ります内匠頭も其忠心を感ぜられ頼もしき若者よと思召され暫し與五郎の顏を見詰めて居られましたが内匠「アヽ宜い〳〵其方の志は充分に解つた、

デは得心の參るやうに予が胸中を言つて聞さう　與五「有難き仕合に存じます憚りもなき言上いたし御咎もなく却つて思召しの程を伺ひ奉るとは與五郎身に取つて如何ばかりか悅ばしう存じます　内匠「何を隱さん其方の推量に違はず此度勅使御接待の役目仰せ出されてより以來上野介何の遺恨あつてか予に對し不禮過言の事のみ申し殊に同役伊達家には正しき禮典を相談いたすに予には毎例ながら疎相いたすやうな間違つた事を指嚇いたし果は衆人の中にて恥辱を與へるやうな仕義彼れ等如き者に恥を與へられ内匠頭とも云はれる者が默つて居るのかと云はれては第一此淺野家の瑕瑾ばかりか先祖へ對しても相濟まぬ事夫れ故一刀の下に斬つて捨てんとは思へども夫れでは又上へ對し恐れ多い事と胸を擦つて堪忍いたし居つたが最早我慢の臍も切れ愈々彼を討果さんと決心いたしたる處へ親切なる遠州殿の御心添え承つて見れば御尤の事でもある故例令後では何れに致さうとも此場合丈は無事に勤め終したいと覺悟いた

し居るのぢや夫れ故其方も予が心を察し先づ御大禮の相濟む迄勘忍いたして宜らう」と悉く胸を分つて御物語りになりました興五郎は涙を流して殿の御胸中を御推察申上げ 興五「御言葉を承りまして、一しほ恐れ入り奉ります嘸や御無念の御事に御座いませうが萬一君に於かせられて許し難き上野介と御決心でもあつたなら跡に殘りし一家の面々愁傷致す斗か如何なる騷動に相成るやも斗り知れざる事夫れ故某し如き者一命を抛つて上野介を討ち取らば五萬三千石の御家に疵も付かず安泰に御座らうと存じ夫れ故過言とは存じましたなれど言上いたしたる趣義に御座います 内匠「良く相分つた……ゲレども予一人の量見次第にて今其方に暇を遣はし上野奴を付け覘はずも事が收まれば宜しいであらう必ず共に心配いたさぬが宜い」と兼て臣下の者を御いつくしみに相成りますこと故大に興五郎の志を褒め重き御言葉を下されました故暫し涙に暮れて顔も揚げ得ぬ程で御座いましたが 興五「重なる御鬱憤を

思召し止まり遊ばされなば御家の幸福主君の萬歳此上の目出たき事は御座いません 内匠「イヤ〳〵予も其方如き忠臣が家中にあると思へば此樣氣強い事は無いのだ……アヽ何となく胸も納り今宵の如き面白い晩は此頃にない事である酒を命じて酒宴を催さん興五郎相手をいたせ 興五「恐れ入り奉ります……」之れから御臺所へ御申付けに相成り御酒宴の準備をいたされましたが内匠「興五郎盞を遣はさん……予が酌致して取らせるぞと之れから内匠頭に於ても御機嫌よく興五郎を相手に四方山の咄しをいたし居る所へ大高源吾武林唯七など御氣に入りの御近侍二三名罷出でましたに依り猶々御滿足に思し召され此夜は更け迄御酒宴を遊ばされましたが明くれば元祿十四年三月十四日勅答の賀日で御座いまするに就てば内匠頭には未明より御登城に相成りましたる處事の行違ひより上野介に過言を吐かれ怒氣滿面にあふれて禁ずる能はず終に殿中刃傷に及ぶの件り……少し短かくは御座いましたけれ

ど次席に充分御埋合せをいたすで御座いませう

上野介益々内匠頭を侮辱す

○第六席

内匠頭遂に堪ず松の廊下に於て刃傷す

彌々元祿十四年三月十四日と相成りました當日は勅答の賀日で御座いますから在府の諸侯は悉く御登城に相成る夫れが爲め大手下馬先きは非常なる混雜で御座います内匠頭に於きましては未だ薄暗き時分から御登城遊ばし諸事萬端の御支度で御在いますクレども茲に差當り胸に落ちない事が出來ました折しも伊達左京亮は座に居合はさず致したから内匠「之は困つた事になつたわい勅使御出迎への節石階の下まで奉迎すべきにや又は夫れにも及ぶまじきにや……今更那の上野介に尋ねると云ふにも面白からぬこと」と類りに御勘考に相成つたけれど知らぬ事は聞くより外はない内匠「詮方が無い殘念ながら聞くとしやう何うか例の惡口だけば云はんで呉れゝば云ひと胸を傷めながら上野介の

側へ參つた内匠「上野殿……

……チト御尋ね申したい儀が御座るか上野「何用か

……儀式典禮の事であらうな内匠「左樣に御座います……實は昨日にも御伺ひいたし置くべきで御座つたが用事に取紛れ失念いたしたら次第上野「アハツハヽヽ左樣で御座つたか併し何事かお咄し召されい内匠「余の儀には御座らぬが今日勅使奉迎いたすには石階の下まで御出迎へ申して然るべきや又は石階の上にて宜しきにや其儀をお尋ね申したいので御座る上野「ナニ勅使奉迎の儀とな……之は仕たり内匠殿本日は如何なる御日柄と思召さるゝ余りと申せば粗忽なる事を申さるゝものかな幸に上野此席に居つたればこそ宜しきやうなものゝ萬一居らなかつた節は如何いたすべきぞ殊に今日の事は昨日差圖を受けて然るべきでは御座らぬか斯く間際に及んで相尋られ若し御儀式に背いたなら第一恐れ多くも將軍家の御恥辱で御座らう粗忽者の骨頂とは貴殿の如きを指して申す事ならん夫れでも赤穂の城主で候と臣下の者を引き廻し

て大きな面を召さるゝのか……ハア、、呆れて物が言へぬとは斯の如き事を申すのでムらうか大切なる御役儀を勤むるに不調法な者もあつた者だ」と云つて尋ねる事は教へやうとは仕ず類りに内匠頭を辱めて居る内匠頭も昨日と云ひ一昨日と云ひ忍ぶ可からざる恥辱を受けたれど親交ある遠州侯の御意見殊には近侍の者が寢食を忘れて心配する情を察しては必ず短慮な事は致すまいと思つて居た故昵と我慢をして居たがナニを申すにも左右には御番衆の旗本も居られる譯ゆゑ斯くまで惡口雜言をばされては最早忍ぶべからずグツと胸にせき込んで參つた側に居た旗本の面々も甲「實に上野と云ふ老爺は意地の惡い奴だ那んなに我味〳〵申さんでも宜しからうに……夫れでも赤穂の城主かと迄コキ下すとは言語同斷だ能く内匠殿は默つて入らつしやる日頃の氣象であり乍ら……乙「婦人女子と雖も那の位暴言を吐かれたことなら必ず口惜しがつて武者振り付くには定つて居る況して内匠頭と云つては日頃短慮な方だから今に

何とか御立腹になるだらう夫れとも御役儀に對し我慢して居られるか知らん」と孰れも顔を見合はして心中氣の毒に思はぬ者は無い内匠頭は頭を垂れ差うつ向いて入られるとき上野介は突と立起り上野「斯樣な粗忽者と咄して居つては御役の間が缺ける……夫れ程尋れたい物ならナゼ昨日相尋れぬのか全體田舍大名は物事吝嗇だから此な時の御用が勤まらぬのだと……」云ひさま松の御廊下の方へ參られます内匠頭は堪へに堪へて入られましたが別段差圖もなく其上恥辱を與へて彼方へ行かれて見れば實に取付く島も無い譯だ相役の左京亮に聞くもそら恥かしき譯如何いたさんと殆んど進退谷つたが内匠「思へば惡き上野よな……此内匠頭に何の遺恨があつて斯くまで意地惡く滿座の中にて恥辱を與ふるか最早勘辨相成らず差違へて武士の意氣地を知らせん」と滿面朱を濺いだる事にて兩眼血走り宛ら阿修羅王の暴れたる如く上野介を追懸け内匠「上野待てつ……と云ひさま小さ刀大原貞守の名劔を

抜き放ち切り付けんとする途端に上野介は振り向いたから丁度眉間へ當つた上野介は驚くまいことか正逆に幾ら殿中で罵つたところで腰の物に手を懸けるやうな事もあるまいと思ふから胸に思ふ存分悪口を吐いたが今や内匠頭命を捨て家を捨てゝも上野介と差違へんとする權幕を見ては實に身の毛もよだつ程に驚き上野「内匠殿御勘辨下さい……之と申すも拙者の過失御勘辨を願う」と云ひながら御廊下を走つて醫師の間の杉戸を明け其處へ遁げ込んだ内匠頭も最う斯うなつた以上は相手を殺さなくてはと跡追懸けるを折節此騒動を聞き及んだる梶川與惣兵衛は物をも言はず内匠頭の後ろより抱き付き與惣「狼籍者……出逢ひ候へ狼籍者……」と呼ばりました内匠頭は打ち洩したる殘念さに内匠「與惣兵衛武士の情ちや見遁して吳れ」と二聲仰せられたが與惣兵衛何と思つてか放さばこそ聢と抱留めて居ります故内匠頭は益々憤り抱止められた儘引摺つて上野介の跡を追すがり又もや一刀腰の

あたりを突れましたなれど裝束の帶に當つて別段疵も負はせられなかつた其内に彼方此方から大勢の者が走せ付け折重つて内匠頭を取つて押へ上野介は介抱いたされましたが殿中の騒動は大方ならず殊に下馬先きに扣へたる御家の役廻りは孰れも主君の御身の上を案じてワーワー大噪ぎだ……併し勅答の御當日であつて見れば殿中血をもつて染られし上は如何いたすべきかと御老中方御協議に相成りましたが兎も角も將軍家へ本日の始末を言上いたし一應勅使の思召を伺つたら如何であらうと云ふ事に決したので稲葉丹後守より此事を言上に及びました將軍家は殊の外御立腹で御座いますが何を申すにも勅使御登城の後で御座いますれば大に胸を傷められ丹後守をして早速勅使方の御意見を伺はせました丹後「誠に不時の珍事出體いたし御黒書院は不淨の血汐に汚され何共老中一同の手落ち恐れ入り奉りました只此上は如何いたし然るべくや勅答御延引然るべくか伺ひ奉りますで御座いませう」

勅使方も之れには閉口いたした正逆に勅使として關東へ下向して見れば血汐に汚されたる殿中にては儀式に列するも如何なものかと孰れも御勘考に相成りました此時柳原大納言……此お方は頗る果敏なる御氣象にあらせられまするに依り柳原「イヤ〳〵例令殿中血汐に汚れても苦しう無い強ちお黒書院に限つたこともあるまいから……丹後「然らば御白書院に移し勅答相濟ませられる樣願ひ奉りますと」之れより俄かに御書院の飾物を御白書院に移し勅使御着座に相成る將軍家には緋の御裝束にて儀式萬端相整ひ勅答滯なく濟ませられました殿中に於ては双傷の爲め異狀も御座いませんが扨大手先きの騒動と云つたらナカ〳〵靜まる處では御座いません其内に諸家の老臣用人など駈け付けまして我れ勝に先きへ樣子を聞かうと云ふんですが御門はビたりと鎖閉つて仕舞つた故×「チーイ開けろ〳〵……開けれいか」何と云つたつて開ける譯はない其中に馬上で乘込んで來る者もある甲「ソラ馬た

〳〵……退け〳〵」馬位に驚く者は一人も無い孰れも御家を思はぬ者は御座いません故ッツ〳〵宛然戰場の如くであります内には馬の蹄に懸けられるものあれば人に踏倒されて疵を蒙るものもある血氣の者は擲り合ひの喧嘩か始まる此儘にいたして置いたなら今にも兩刀に訴へ飛んだ騒動を釀さんも知れずと御徒頭の鈴木源五右衞門殿御門際に顯はれ源五「靜まれ〳〵……」ナカ〳〵一度に氣が立つた人が靜まれ位で靜まる譯のものではない……今ならば鈴を鳴らすとか喇叭を吹くとか致したでせうが昔しですから开な器用なものはない……源五右衞門も容易に鎭靜いましません故又も大音を揚げたる事にて源五「方々靜まり侯へ申渡すべき仔細あり……」と云ひますと甲「チイ〳〵靜かに仕れいか」申渡しがあるとよ乙「ヤイ靜かにしろつて云ふに御申渡しがあるぢやアれいか」却つてお互に靜かにしろ〳〵と云ひ合つて又噪がしくなつた實に始末に困る源五右衞門も口で云つた位では駄目だと思ひましたに

依り扇を上げて源五「チーイ静まり候へ方々申聞くべき仔細あり」孰れも扇を開いて静かにしろと云つたから今度は静まつた何んでもガヤ〳〵噪々しい時には口で云つても静まるものでは無い其内に大小名の供廻りも今は静粛に相成りました故源五右衛門は又も大音を振絞り 源五「唯今殿中松の御廊下に於て双傷いたしたるは浅野内匠頭吉良上野介の両人なり去りながら梶川與惣兵衛後ろより内匠頭を抱き止めたれば上野介には左したる怪我もなく双方共存命いたし居る次第去れば両家の供廻りは大手下馬先きを退出いたし其他の者は立噪ぐことなく此場に罷在て苦しからず此段相達し申すものなり」之れを聞いて一同ホット息を吐いた △「アヽ之れで漸く胸が落付いた先づ〳〵己れの主人は無事で宜かつたが氣の毒なのは浅野様だ ×「眞實に我身を抓つて人の痛さを知れだ此身に引きくらべて見たら斯うして毎日顔を見合せて居る供廻りの衆だもの何んと云ふ氣の毒なことであらう」と一同我君の安泰なる

に付け益々氣の毒に思ふ浅野家の供廻り始め双傷云々の騒動を聞いて走せ參じたる片岡源五右衛門並に磯貝十郎右衛門の両人は分けても力を落し頭を垂れ面目なげに引返す有様と云ふものは他の見る目も哀れに見られました扨浅野家に於きましては直に門を閉ち謹慎いたして居りましたが之れより殿中御評定と相成り將軍家一方ならぬ御怒りなるを考中方は内匠頭の眞情を憐れみ浅野家に疵の付かぬ様取斗らはんといたしたるを内匠頭は既に覺悟の事として老中方の御體折りも空しく終に切腹仰せ付けられ御家改易の御咄しより在國赤穂城に於て大石内藏之助が智謀を廻らし城渡しも無事に相濟むの一條席を改めて言上いたします……

○第七席

老中等内匠頭に同情して助けんとし
内匠頭武士道を守つて亂心の説を郤く

エヽ引續いて言上いたします……松の御廊下に於て浅野内匠頭吉良上野

介を刄傷に及びましたる噪きに勅答の御式も如何あらんと存じたるに柳原大納言の御取斗らひで恙なく相濟されたれば之れより内匠頭上野介兩人に對する處分に付き御老中方は將軍家の御面前に御評定に相成りました去り乍ら何を申すにも將軍殊の外御立腹にて第一私の遺恨心もつて刄傷に及ぶなどは天位を輕んじ第二は御場所柄をも辨へざる事稀代の狼藉なりとあつて切腹申し渡すべしとの事で御座いましたケレども酬もへつて内匠頭の心中を洞察して見れば不憫なもので上野介と云つては强慾非道なる犬侍だと云ふ事を御老中方にも御承知で御座いますから何れも顔を見合して何とも申上げる者が無い將軍家に於かせられては將軍「内匠頭の刄傷に引かへ上野は流石堂上方の御相手をする丈善く場所柄を知り拔合せて勝負いたす抔の事もなく神妙にいたしたるは感心な奴ぢや……夫れに梶川與惣兵衛も早速組留めたる働きは命を抛つての覺悟之れ又天晴れなものである」との上意であつた居並

んだる老中方も此御言葉には恐れ入つた……成程表面上から見たら上野介も拔合せずに殿中御場所柄を辨へたらしく聞へるけれど其實は憶病未練なる致し方にて勝負する抔の勇氣がないのだ其上ならず梶川與惣兵衛如きは武士の情を知らぬ者と實は誰一人褒める處が爪はじきをいたして居るのに夫れを愛い奴との御褒の詞だから之れでは全然お咄しになつたものでは無い兎角世間を知らない者には斯んな事は有勝の事で御座います況して民情に通ぜざる上樣の事であつて見れば是非なきことで御座い升が併し將軍家より此通り仰出されになつたからと云つて何でも上意に基くと云ふ譯では御座いません故孰れも御評議の上兎も角も上野介は負傷いたし居る事であれば御典藥栗崎道意と申す者に療養仰せ渡されサマ〳〵御介抱に成たが役「少しでも心靜まらば勝手次第に退出いたされて宜らう上野「有難き仕合せに存じます役「且ツ本復の上は相變らず役義相勤めて差支はない上意の趣き斯くの次第謹んで御受

いたせ 上野「ハ、少重れ〳〵の御高恩決して忘却はいたしません御前體幾重にも宜しき樣願ひ奉ります。之れから上野介は平川口の方より退出いたす夫れに引き換へ内匠頭に於てはナニシロ御怒りの烈しきことゝて速に切腹申付くべしとの事ではありますが此儘切腹に相成れば御家改易は勿論の事で御座います此時稻葉丹後守は少しく席を進められ丹後「恐れながら言上いたします 將軍「ウム丹後何か意見があつての事か 丹後「實は之れは丹後一人の所存には御座いまするが内匠頭は聊か亂心いたして居ろかと存じます 將軍「ナニ亂心いたして居ろとな丹後「左樣に御座います……今朝登城の砌り玄關先にて内匠に出會いたしました節如何にも眼中の樣子惡しく血走つて居りますす故大切な御役儀を勤めて居り乍ら萬一心得違ひでもあつてはと存づ相尋ねましたが別段左樣の事もないと申されたなれど唯今に於て推察いたすに必ず亂心いたし居つた事と存じます左もなき時は御場所柄をも辨へず刃傷などに及ぶ

べき所以が御座るまいと存じます」と言上いたす側に控えて居た小笠原佐渡守、阿部豐後守、土屋相模守なども「之れは丹後殿は旨い處へ氣が注かれた如何にもして助け遣はしたいとは思ふなれど申譯すべき理由がなければ必ず將軍家にもお許しがなからうと百方苦心して居たところだが之れは何とか口添えをいたさなくてはなるまい」と土居相模守が 相模「如何さま丹後殿が申さるゝ處尤も心得まする相摸も登城の砌御廊下にて出會いたしました處如何さま眠中の樣子赤筋が張つて居り平生に異つて居られた故心中頗る案じられて居りましたなれど正逆に斯樣なる椿事出體に及ぶまいと其儘に相尋ねもいたさゞりしが今に至つて思ひ合せます次第に御座いまする必ず亂心に相違御座るまい」將軍家に於ても亂心と聞ては大に内匠の心中を不憫に思召されたと見え將軍「丹後のみならず相摸までも其樣子を見たとあつては或は夫れに相違ないかも知れぬ不憫の至りぢや」御老中方は旨く相槌を打つたので何も丹後守

が玄關先きで出會いたした譯でもなく相摸守が廊下で逢つた譯でもないが上野介の強慾非道を惡むと共に內匠頭の淸廉高潔なる誠の武士の心懸けを惡み言はず語らず助命致し命乞ひを致し遣はさんとの思召で御座い升將軍家に於ては將軍「丹後亂心とあつては內匠の樣子も見屆ければならぬが唯今如何いたし居るか見分いたして參るやうに……丹後「仰の趣き相心得ましたゝれより直に見分いたし參るで御座いませう」と一先評定の席をお立ちになる御老中方も之れでホッと一息ついて安心いたした丹後守は內匠頭を押籠めたる一室へ通かれると番士が嚴重に警護いたして居ります丹後「上意によつて丹後守內匠頭に對面いたす」番士も上意となつて見れば更に異存を云ふ筈はないソコで內匠頭の押籠められたる一間の內へ入り丹後「內匠頭上意であるぞ……內匠頭は頭を擡げて見ると御家老稻葉丹後守殿で御座います故ハッと云つて再び首を下げました丹後守は上意とは云ひ乍ら何うか助けて遣りたいと云ふ一心で御座いまする故諭すやうに御咄しになる丹後「何うぢや內匠今日勅答の賀日でありながら殿中をも辨へず吉良上野介を刃傷に及び斷言語同斷の至りなるぞ……去り乍ら某熟々其方の容貌を見るに亂心いたし居ること〳〵思ふ眼中の樣子如何にも當ならず……內匠夫れに相違あるまいがな……イヤサ確と左樣であらうな」之れでは實に爾う云へと云はん斗りで御座います此時內匠頭は丹後守の御厚情を空うせざらん事でありつたなら如何にも夫れに相違御座らぬとか又は狂氣心亂の體を粧うので御座いませうが先より覺悟して刃傷に及んだる事……武士が恥辱を受けて暗々と其儘にいたし置くは後日武士道の衰頽る基ひ强慾非道なる上野介如きは生命を斷つて衆人の見せしめに致して遣はす方が宜いと云ふお考へで御座いますれば內匠頭は恐れ入りましたとも何とも申上げない丹後守は愈々亂心と云ふ事に言上いたさんと思召し丹後「夫れに相違なからうな……亂心いたし

たに相違ないな其旨言上いたすぞよ」と情の余る御一言に今は内匠頭も何とか御挨拶申上げなくてはならぬが己れの本心を申上るの外は御座いません に依つて姿勢を正し禮を盡して 内匠「アイヤ丹後殿御老中方の御評定且つは將軍家の御上意をもつて内匠頭亂心との御決定……ハヽア其厚情身に取つては如何ばかりか嬉しく候はゝ左り乍ら内匠頭御場所をも憚らず慢りに双を振ひましたは全く心あつて致したること事の一伍一什を申上げれば相分らぬ次第で御座る 丹後「ナニ狂氣亂心にはあらずして心あつての双傷とな……

……夫れ其一言が最早亂心いたして居るのぢや正根の据つた者が何で左樣なことをいたすと思ふか全く其方は亂心に相違ない 内匠「暫らく御待ち下さい丹後殿仔細を御咄し申さずば貴殿御分りも御度いますまい……ナニ致せ斯樣なる狼藉をいたし天位を輕んずるの所業に及びしと實言ふに言はれず語るら語られぬ鬱憤のこれある事既に勅使御到着以來禮典萬端上野介に御相談に及べ

と云ふ御老中方の御内意もあり旁いたすに依り古式に通ぜざる内匠の事として百事指南を受けんと尋ねても一として正しき事を告げず孰れも手違ひと相成るやうにのみ差圖いたされ殆んど迷惑に存ずるなれど之れも亦已むを得ぬ事と胸を擦つて居りまする併し忍ぶに忍ばれぬは其都度申す悪口雑言殊に滿座の中に於て田舍大名よ疎忽者と呼ばれますれど之れ迚は我慢に我慢いたして參つた趣義……然るに今日に及んでは言ふに言はれぬ罵詈暴言日頃短慮と噂さるゝ内匠の事とて又た短慮の擧動と人に後指を指さるゝも殘念故必ず腰の物に手は懸けんと思へど兩刀を帶する武士の意氣地殊に祖先に對しても相濟まぬと堪忍の緒を引切り遂に斯る始末に相成り今更面白次第もなき事に御座い升唯恨めしきは本意を達せず夫れが如何にも殘念至極……」と熱き涙をハラ〳〵と飜しました 内匠「丹後殿御推察下さい御厚情は幾重にも忝く候へ共亂心者と云はれては内匠一生の恨み、切腹は兼て覺悟の事に御座れば其旨

御前體御披露下さいますやう」と悪びれもせず申上る丹後守も理の當然武士の意氣地是非なき事と思召し共に涙に暮れましたが番士の手前最早内匠頭から屹乎と云はれて見れば仕方がない此れか顔の見納めと其儘一間を御退出に相成りました待ちに待ちつたる御老中方も丹後守の御挨拶如何相成るやと片唾を呑んで控へて居ると丹後申上ます 將軍「何うぢや内匠は全く亂心に相違ないか 丹後「左樣に存じます眼中の樣子と申し如何にも亂心者らしく見受けられますれど内匠は決して亂心はいたさぬと申す次第に御座る」と據どころなく有りの儘を言上に及びますと將軍家は再び御氣色を損じ將軍「私憤を以て大禮の妨げをいたす抔とは悪きいたし方である今日中に切腹申付け内匠頭居屋敷明渡す樣申付くべしと仰せられ奥へ入らせられたが老中方も詮方なく早速其趣を申渡しに相成りました

○第八席

内匠頭田村邸に切腹を遂ぐ
家臣邸を拂つて泉岳寺に弔る

御老中方の御盡力も全く空しく内匠頭は切腹御家は改易となるも淺野の運命極まつたので御座いませう……デ十四日の午の刻即唯今で申す十二時で御座います田村右京太夫を殿中へ御召出しに相成り老中「今日内匠頭儀殿中をも辨へず天位を恐れず私の恨をもつて上野介を刃傷に及びたるは以つての外の事爲に將軍家にも殊の外御立腹に相成り田村右京太夫に預けいとの御上意であるぞ」右京太夫は頭を下げ右京「確と御受け申上げるで御座いませう」と御受けを致すと重れて老中の御言葉として老中「然らば早速人數を差越し充分嚴重に警衛いたし召連れられたが宜らう」之より右京太夫は一人先づ歸邸いたし夫れ〳〵差圍して御家來數百人を率き連れ内匠頭を受取て平川口より御邸へ歸られました右京殿は早速一間に於て御對面に及び右京「定

めし當日の御無念御推察申上げますで御座います就ては右京身に叶ひましたる義に御座れば何なりと御申付けに相成りたい及ぶ限りの事は取圖らひますで御座いませう」内匠頭は恭しく禮を返し「内匠身に取つて如何ばかりか嬉しう存じます、如何さま先祖彈正大弼長政は勇士の大名を博し淺野家は今日まで連綿として居るに堪へ難き恥辱の爲め心焦急ぎ遺恨重なる上野を討もらしたは如何にも殘念に存じます今に必ず切腹仰せらるゝで御座いませうなれど地下に於て祖先に面を合すのが恥かしう存じます」と無念拳を握りましたなれど切めては最期丈は潔よく致さんと心に覺悟し少しも取亂す處なく内匠「何から何までの御志忝なく存じます今にも切腹仰せ付られべきに貴殿御綿を汚すは如何にも御氣の毒千萬……唯御厚志を酬ゆる時もなく夫れのみ本意なく存じまする」と御挨拶をいたす……ナカ〳〵確かな御答辨で亂心どころでは無い……尤も全く亂心致したのでは御座いませんから……

其内に御料理も出るし非常に御丁重なる御馳走をいたされましたが内匠頭は更にお箸さへも取らず最早知死期を待つばかり……暫らくあつて御上使として庄田下總守並に御目付け多門傳八郎御徒目付け磯田武太夫の三名を田村の邸へ差向けられた右京太夫は御玄關まで御出迎ひ申上げ夫れより一間にて御面談に相成りましたが程なく内匠頭に上意の次第を申渡されました

内匠頭儀本日勅使賀答の大切なる式日なりと知りながら吉良上野介に對し私憤を果さんと殿中御場所柄を憚らず双傷に及びたる段言語同斷と云ふべし依つて切腹申付け當居屋敷は勿論赤穂城地を召上げられ候段相心得べきものなり

元祿十四年三月十四日

内匠頭は上意の次第を承り謹んで御受け申上げたに依り之れより早速御支度に懸られました……デ此切腹と云ふ事には色々法式の御座います事です

が夫れ等の事か言上いたすと誠にソダ〳〵しく斗り相成り肝心な銘々傳を申上る事が出來ませんに依り略して言上いたします……扨て内匠頭は御行水も相濟み右京太夫よりして切腹の御場合等を申上げますと内匠「何れにても苦しう御座らんが御申聞けの通り庭上に於て宜しからん」之れより衣服を御召換へに相成りました白小袖淺黄無紋の上下、之れを召して御着座に成りましたときは御上使を始め誰一人顔を背けて涙を呑まぬものは御座いません……

……其筈で御座いませう誰れの考へでも内匠頭の憤るのは尤な次第、上野介と云つたら毎々辛い目にあつた者が澤山で評判の惡い事は實に驚くばかり然るに其上野介が助けられて双傷に及んだとは云へ内匠頭は切腹の上御家改易仰せ出されて見れば實に御氣の毒な次第……此時内匠頭は上使庄田下總守に向ひ内匠「誠に恐入る次第には存じまするなれど某一ツの御願が御座います下總「何事か出來得る丈は聞屆け遣はさん遠慮なく申し

て宜らう内匠「今際に及んで一ツのお願ひと申すは餘の儀でも御座らぬ願はくば介錯の義は之れなる差添えをもつて願ひたく存ずる下總「イト易き事なり……磯田殿御異存は御座るまいな」御徒目付けの磯田武太夫が介錯をいたされるんであるから其儀お尋れになつた去り乍ら別に異存あるべき筈はなく武「委細承知いたして御座る……」内匠頭にも大層御喜びに相成り居並んだる一同の旁に向ひ内匠「扨今生の御暇乞を申上げます各々方にも御安泰に御勤め遊ばされるやう……就ては苦しからずば御硯を拜借仰せ付られたく存じます」之れ又上使に於て御許しに相成り料紙を添えて側へ差出されると何か暫らく御沈吟にならせられましたが頃しも彌生の花盛りにて庭前なる櫻は滿開で御座います夫れを御覽ぜらるゝ折しも夕風の花を散らしハラ〳〵と花瓣の舞ひ落ちますに不圖御目が留り墨を摺り流し筆を持つてサラ〳〵と御認めになりました

辭世

風さそう木々の梢の花よりも
春のわかれはいかにとかせむ

實に一讀して御根の程を察せられ升其れをば上使下總守へ御差出しに相成ると一度び吟じて再吟いたすものはなく愁然として涙を流すばかり……イザ之れより切腹いたさんと肌押し寛け 内匠「イヤ何磯田殿 某し聲を相懸けたなら其時御介錯下さるゝ樣夫れ迄は待ち給へ」と云ふや否や刀を取つて左の脇腹へグザと突立てましたが夫れより右の脇腹へ引廻し返す刀に十文字に掻列る時「ヤツ……と云ふ御聲を懸けらるゝと待ち設けたる武太夫は矢聲と共に二尺四寸の一刀閃くよと見る間に御首は前に落ちました御上使始め右京太夫殿に於かせられても此淺間しき有樣を御覽ぜられ涙に暮れて居られましたが扨あるべきにあらざれば下總守殿御目付け御徒目付の方々も御退出に相成りまし

た然る處へ裏門より淺野の家來共 罷出でまして ×「某は内匠頭の家來片岡源右五衛門と申す者……今日殿の御切腹と承り之れ又是非なき事に存じまするが臣下の身として切めては御亡骸なりとも葬らはん爲め申請たく罷越しました御座います」役人衆は此事を右京太夫殿へ申上げますと 右京「夫れは決して苦しうない嘸淺野家の臣下の身になつたら如何に愁傷いたし居ることだらう氣の毒な事である手厚くして遣はせよ」と御申付けに相成りましたので役人方も委細心得で大廣蓋へ乘せた儘玄關より御差出しに相成りますと兼て用意いたしたる乘物に移し、片岡源吾五右衛門、堀部安兵衛、磯貝十郎左衛門、大野郡右衛門、田中貞四郎の諸士護衛して別にお邸へ御連れ參らすことは出來ませんによつて忍びやかに御菩提所高輪の泉岳寺へ御葬送申し上げました昨日に變る今日の有樣家臣の重なる面々は泉岳寺の門前に待ち設け夫れ〳〵燒香をいたし御屍數は既に御召上げに相成りましたに依り思ひ〳〵に引

取りました實に享年三十有七歳涼光院殿小府朝散太夫玄利大居士と御法號を奉りました又江戸御屋敷御引拂ひに就ては其混雜一方では御座いません殊には何んな異論を生じて噪動を惹起すやも圖られずと請取役仰せ渡されたる水野大監物殿は同勢數百人召連れ夫れとはなしに取詰めたり又御本家松平安藝守殿よりも人數を差向けて此場合萬一の事でもあつては相成らぬと夫々御注意になりました家中の面々は夫々退出致されまして後片岡源吾右衛門は主君の亡骸を御葬送申上げ夫れより一先づ屋敷へ立歸り重なる諸道具は船積みにいたし御國表へと積送りになりましたが扨之れよりは御國勝手赤穂城に於ての騒動……城代大石内藏之助智略を振つて無事に御城渡しを濟ませ四十有七士復讐の美談を留るに至るのお咄し追々佳境に進みます……

○第九席

江戸邸の武士家を拂て他に移る

大變の早馬飛ぶが如くに赤穂に向ふ

エヽ内匠頭刃傷の赴き忽ち傳奏屋敷へ傳はりたれば淺野家の混雜は一方ならず兎も角も主君の一大事お家の大變で御座いますれば國表へも此旨通知致して置かなければ正逆の時に萬事打合せの付かぬ事と原惣右衛門茅野三平の兩人は直ちに銘々の小屋へ歸り馬の支度をいたされて千里を一時と乘出しましたケレども道程百七十里もあります處であつ見ればナカ〳〵一日や二日で往く事は出來ない夫れを考へて見ると實に唯今は便利な世の中で北海道でも九州でも二日か三日で往く事が出來る……原、茅野の兩人は馬術の名人で御座いますれば轡を揃へて道を急ぎました大抵十里位で馬を取換へなければ乘つぶして仕舞う去り乍ら一生懸命の場合と云ひ殊に金と糸目は附けず道中急ぎに急いで十八日の夕刻播州赤穂の御城下へ乘込んだ兩人が江戸表より、早馬で注

進に參つたとあつては實に唯事でない城代大石内藏之助には兼て主君内匠頭が勅使御接待の役目を蒙つたる事も存じて居ります故何うか悉なく御勤め終せに相成るやうと弓矢八幡に祈誓を凝して居りましたる處江戸表より注進であるから心中大に驚た内藏「扨は何か殿の御身の一大事と見える殊に上野介と云ふ暴慾な者に指南を受け禮式古典を御相談いたさねばならぬとあつては若しや夫れ等の事にて目頃の御氣象己むなく討果しなどの事でもありは仕舞いかゝ」とツおいつ胸中の心配は一通りで御座いませんケレども大智大勇の内藏之助なれば斯る場合には斯う仕やうと云ふ未漸を察したる御意見は御座いました其中に家老職大野九郎兵衛を始めとして吉田忠左衛門、奥野封監、大石瀬左衛門、岡野三十郎玉虫伊左衛門等家中重立つる面々は御本丸へ駈せ集まり何事ならんと注進の次第を氣遣ひ一座シーンと致して居る原惣右衛門、茅野三平の兩人は勞れたる樣子もなく席を進め兩人「余の儀にも御座いませんが此度

主君勅使御接待の御役儀を仰せ付られ典式古禮の御相談は吉良上野介に相頼まれました尤も之れは御老中方より御内意で御座いまするし堂上方の事は高家に差圖を受けるが之れ迄の慣例であります夫れ故勅使御到着以前にも吉良の邸へ赴き御相談を願つても別段差圖いたさうと云ふ樣子もなく式日の前に一寸御心付け申せば夫れで分る位の事であつたが愈々當日となると上野介には如何なる思召にや孰れも手違ひに相成るやうな差圖のみいたされ搗て加へて惡口雜言滿座の中で恥辱を與へられし事も幾度か去れ共主君にも安からぬ胸を擦り萬一の事にてもあつては臣下一統の嘆きの程も思ひ遣れて十三日迄は差なく御勤めにならせられました處十四日は勅答の賀日にて大切なる御日柄なれば御三家始め國主城主威儀を正して扣へられ主君にも未明より御登城にならせられたが勅使御登城に先だち吉良上野介を松の廊下にて斬付け賜ひ初太刀は烏帽子に當り二の太刀は御裝束の帶に當り爲めに相手僅かの

あさきづえおもてしゅつぱつ淺葱江戸表出發の時までは御兩所とも恙なかりしが此の山を承るや否や直に傳奏屋敷より馬を煽り御注進申す次第に御座る」と兩人迭身代りに述べまして故一座の驚き大方ならず互に顔を見合せ誰一人言葉を出すものも御座いません御城代大石藏之助に於ては暫し無言にあらせられたが今此大事に臨み立噪いだ事ならば夫れこそ家中の噪動とも相成らんとソコは流石に重きを置かれたる内藏之助……一靜良く百動を制すと古人も申されましたが此時既に胸中成算を立てられ内藏「驚き入つたる一大事去りながら天下の諸侯たる者が殿中に於て刃傷に及ぶと云へば必ず云ふ可からざる御無念の事があつてよく〳〵思ひ詰られし事と推察奉る然るに思ふ通り相手を討果さず上野介は無事存生とあつては其御鬱憤は如何ばかり……併し古より喧嘩兩成敗と申す事も御座れば兩家は御切腹にて相濟む事であらう又上に於て特別の御寛典もあり吉良家が建てば當家も亦恙なき事であれば兎も角も第二の注進を相

待つといたさうと大石は泰然自若落付き拂つて述べられました一座の面々も×「成程夫れは御城代の仰せ通り喧嘩兩成敗は武將頼朝公の時代より相定まる事なれば必ず公平なる御沙汰のある事で御座らう……夫に付ても上野介の罵詈暴言目先に見えるやうにて殿の御殘念左こそと恐察たてまつる 〈「如何さま打洩したる殘念さ切めて又一太刀なりとも御鬱憤を晴されしなれば御本意を遂げられやも斗られざりしに……」此時原惣右衛門は俄に思ひ出せる如く惣右「茅野殿未だ一つ御無念の次第を御披露申さゞりしぞ 三平「如何さま梶川與惣兵衛の爲めに取押へられし仔細を申上げざりし……」と兩人して語るところを近藤源四郎と云ふ家中屈指の勇士て御座いますが此咄をチラリと耳に挾み 源四「御兩所何をコソ〳〵御咄し召さる其時の有樣は隱すところなく御披露いたすが宜しいでないか梶川與惣兵衛が如何なされし……」と肘を張り拳を固めて詰寄つた惣右衛門三平の兩人は何も隱し立てをいたして居る譯では

御座いません故惣、三「イヤ〳〵決して御隠し申た次第には之れ無く氣の轉動いたして居る爲め考へ殘したる儀で……源四「イヤ其考へ殘しと云ふのが第一氣に喰はぬ貴殿は江戸表にて主君御身の上は御承知なるも國表の家臣は御兩所の御咄しを使にいたし居るでは無いか早く申さんと容赦はいたさんぞ」隨分氣の早い人もあつたもので折角汗馬に鞭うち御注進に及んだる兩人に取詰めましたが之れも偏に忠義の餘りで御座いませう……

此有樣を内藏之助は篤と御覽に相成り「又近藤が血氣に逸つて斯樣なことを申すか注進の役目に立つた兩人とも疲勞いたして居る事だし主君の一大事に氣も潰れて居れば大略肝要なところを咄せば細密な處は考へて咄すであらうのに那云はれては甲斐なき樣にも聞へ氣の毒な事である」と思召されたから内藏「扣へよ近藤……唯今御披露申さうと云はれて居るではないか」實に鴉の一聲近藤源四郎も默止て仕舞つたソコで兩人は惣、三「イヤ申遲れたと

云つては誠に相濟ざる次第ながら概略は唯今申上げた通り唯此處に主君の御本意を達せんとき妨げをいたした者が御座つたので」源四郎は思はず乘出した源四「ナ……ナ……何と仰せられる殿の御本意を達せんとする處を……

……サ……妨げいたした者が御座ると、夫は何者で御座るかサ速に申されい惣、三「早まり給ふな近藤殿松の御廊下にて上野介に一太刀恨みたるとき後より梶川與惣兵衛なる者日頃より大力自慢の由なるがムツと組付き放たればこそ夫れ故思ふ樣の御働きも出來ず爲めに二の太刀は打ち損じたる次第……之れにて申殘した言は御座らぬ」と聞くや否や何思ひけん近藤源四郎顏色を變へて突然立上り傍にあつた一刀を腰に手挾むが早いか駈出さんとする餘りの事に一座の者は留めやうとする者もない内藏之助は源四郎の胸中は既に充分汲み分けて居られます事なれど打捨てゝ置けば如何なる椿事を出體いたすやも圖られずと内藏「待て近藤……コラ待てと申すに……源四「ハヽツ

……内藏「孰れへ參る歟まだ殿の御安否も相判らざるに何事だ狼狽して一大事の時にお役に立つと思ふ歟」餘り内藏之助は小言など申したことのない方でありますが今日は源四郎二度ながらお叱りを蒙つたが始めてポッと息を吐き源四「如何さま恐れ入り奉りました餘りの無念さに飛んだ疎忽を仕り何とも恐入りました」内藏之助は人が例令行末を案じ悶々として居る際でも既に胸算のある事故更に噪ぐところがない夫れが爲め一座の面々も先づ安心の體で互に暇を告げ本丸を退きました内藏之助は跡に殘つた原惣右衛門、茅野三平の兩人に向ひ内藏「御兩所の忠心内藏之助感するの外はなく殊に馬術の名譽百七十餘里の處を僅か四日半にて乘附け給ふことはナカ〳〵凡人の及ぶべきところでは御座らぬ先づ緩々御休息いたす樣に惣右、三平「之れは〳〵御賞美に預つて赤面の至りに御座います」と挨拶も濟み夫れから兩人も引取りまして御座いましたが越えて三月十九日朝又も赤穂城に馬を打て乘込む者があつた

之れぞ第二の注進で即ち片岡源五衛門で御座いますナニシロ跡々の始末を取かたづけ十五日の朝江戸表を出發いたしたる事故馬上衣服は寸斷々々に切れ馬は汗に洗はれたる如く實に唯事とは見えませんに依り家中の面々早速に登城いたし茲に源五右衛門より第二回の注進に及び更に城中評定に及ぶの件り次席のお樂しみ……

○第十席

籠城か切腹か評議容易に纏らず
嘆願の使者先づ江戸に向ふ

汗馬に鞭て赤穂城へ乘込んだる片岡源五右衛門の注進を聞かんと大石内藏之助纘いて大野九郎兵衛以下の面々殿中所せまき迄居並びました第一の注進なる原惣右衛門、茅野三平の兩人も此席に列なり其後の樣子如何相成つたかと頗る心配の體……此時源五右衛門は席を進め源五「扨主君殿中刃傷の儀は原茅野御兩所の注進にて既に御存じの事ならんが夫れより殿中の御評定

にて即日切腹仰せ出される事に相成り田村右京太夫の邸にて庄田下總守が御檢視いたされ猶城地召上げられるとの事に御座る孰れ近々城受取りの役人も御出張に相成るで厶いませう……思へば時の不運唯悪むべき相手の上野介は存生いたし剰さへ領地は勿論其身は悉なき事實は兩成敗の掟に背く片手落ち夫れが如何にも殘念に存じます定めて泉下の主君も此事を御無念に思召さるゝ事で御座いませう」と涙を飜して詳細の義を物語りました座中の面々も驚いた主君は御切腹遊ばされた上に領地を召上げられるのですから唯呆然として爲す處を知らず互に顔を見合はして居る斗り然るに此時近藤源四郎は奥野將監小山源五右衞門の兩人を顧みて源四「御兩所片岡殿のお咄しを御聞きに相成つたか將、源「如何にも無念なる此度の仕義吾々三人は御家中にて三勇士と云はれた人物であれば此儘默つて居つては日頃の名前にも傷の附くこと如何いたしたものだろう源四「夫れは知れ切つたことでは御座らぬ

か既に領地沒收近々城受取りの役人が出張いたすとあつて見れはムザムザ渡す事も出來まい其時こそ充分矢尻を磨き例令將軍の命令であらうが天子の御勅命であらうが开んなことは構はない唯亡君の亡跡にチメ〳〵と生きて居れん故此世の見納に一働きいたさうでは御座らんか相成るべくは正門の一手は吾々三人にて引受け押し寄せ來る奴原を切つて〳〵切捲らん其儀は如何に御座る」將監も源五右衞門も小躍り致して早速其儀に贊成仕り將、源「如何さま夫れは面白し必ず三人進退を共にして働き敵の睡りをさまして吳れん」と牙を嚙み腕を扼して口惜涙に暮れました、滿座の者も三人の忠志に感動し大石瀨左衞門、茅野三平、川村傳兵衞、伊藤七郎右衞門など孰れも之れに贊成し ×「如何にも主君御切腹の後は何をたのしみに生きながらへん孰れ捨つべき命にしあれば目醒しき働きをいたし泉下にて亡君に御目通りいたした節手柄咄しでもいたしたう御座る之れより外に望はない……城受取りが參つたなら必

ず命のあらん限り矢種の盡きる迄は籠城いたさん孰れもの思召如何に御座る」と大音に呼はるにぞ誰一人不賛成の者はない △其儀は素より願う處去りながら銘々各自に思ひ〳〵の處を防いだところで仕方がない願はくば御城代の采配を戴き充分立働かうでは御座らんか」と誰一人異儀を唱ふる者もなく籠城に就ての相談ばかりで明日にも戰爭が始まるかの如くで御座います内藏之助は默つて衆議のあるところを聞いて居りましたが誰れしも籠城を拒むものはなく殊に血氣に逸る壯者などは準備に取懸る相談のみで更に善後策を講じ樣と云ふ者がない之れには内藏之助も弱つた内藏「斯う一時に人の氣が立つたるやうなものゝ必ず其通りに參れば賴母しいが之れは一時の感情で決して永持ちのいたす筈はない……家へ歸り妻子の愛着に惹されて見ると又考へかゝはるもの心鐵石の武士と云ふ者は何人あるものか」と流石は用心深き吉良家の隙を窺ひ主君の御無念を晴した程の人物ですから左樣いふ處はチヤン

と見透して居る夫れ故斯く立噪ぐ一同に向つて始めて口を開き 内藏「御一同の思召し泉下の主君が御聞及びに相成つたら如何に嬉しく思召される事であらう併し忠義を盡すは啻に生命をなげうつ斗りではなく未だ外に幾らも其手段方法も御座るまいか兎も角も生は難く死は易し死ぬる命をながらへて御家の安泰を計るやうな御考へは御座らぬか」と座中を見渡しましたけれどナニシロ斯ういふ時には籠城説のほうが風向きが宜い ○ナニ何うせ領地没收とあつて見れば吾々は二君に仕へる念は更になく那れが赤穂の浪人かと後指を差さるゝも之れ又殘念至極な譯……寧そ思ふ存分戰つて討死いたした方が宜しくは御座るまいか 内藏「イヤ〳〵然らば内藏之助が思ふ所存をお咄し申さん成程老中方の御評定にて一旦御家は滅亡と相成らんもソコは押して御憐愍を願ひ且ツは祖先の功勞にも面じ何うか淺野家の立ち行くやう……尤も主君の御嫡子と申すは御座らねども尚弟大學君のあるあれば或は跡式御相續の

御許しがないとも限らない左すればお家も安泰に治り家中御一統の方々も安堵いたす次第には御座るまいか籠城討死よりも此の方が遙かに優ると思へど併し内蔵之助一存にも參らぬ筈と御相談を申す次第故必ず御腹藏なく御意見を御咄し下さるやうに」と述べますと近藤源四郎は第一番に不賛成だッカ／＼と席を進めて源四「エ、御城代さまへ遠慮のない處を申上げます成程夫れは御尤の樣にも相聞えまするが必ず夫れが出來るか出來ないかと云ふ事は未漸の事に御座いませうソンな哀訴などをいたして居る内に最早城取りの役人が參つたなら如何いたす其時になつてグヅ／＼致し居つてはムザ／＼城を渡さなくては相成らんでは御座いませんか實に左樣なマドロッコイ事をいたして居つては折角の決心も水泡に歸す譯夫れは城を枕に討死いたせと斯樣に御命令を下さいまするば必ず一人として遁げ隱れるやうな者は御座いますまい萬一左樣な憶病未練な奴があるならば此源四郎が軍陣の血祭りに一刀の下に切つて捨てるで御

座らう」と肩を怒らし唯今で申せば口角泡を飛ばす……と云ふ有樣で内藏之助に詰め寄りましたケレども胸中大謀を蓄へたる内藏之助何條此の位の事にて決心を翻へさんや内藏「成程近藤の申す處は大に一理ある事でグズ／＼江戸表へ哀訴して居て萬一城受取りの參るやうなことがあつては折角の志も水泡に歸すと云ふが夫れは一を知つて二を知らぬもの……素々籠城討死が目的ではない亡君の御無念を晴すことが出來ずば生き永らうも甲斐なき事故共に冥途の御供いたさうと云ふ次第ではないか一時の血氣に任せて大事を誤つては宜しくない筈と今一應考へるが宜らう」御城代に斯う仰せられて見れば源四郎も返す言葉がなくスゴ／＼と引退り源四「チイ／＼小山、奥野迚も此分では吾々の腕前を顯はすことは出來まいよ御城代からして那んな弱い音を吹いて居るんだもの將、源「左樣々々迚も駄目だ……ア、腕が鳴るわい殘念だなア籠城さへ叶へば必ず敵に一泡吹して吳れるものを」と何れもブツ／＼言つ

て居る併し御家中は何れも血氣壯年の者ばかりでは御座いませんに依り考へのある老輩方は甲「誠に大石殿の仰せ通り如何にも江戸表へ哀訴の義が然るべく存じまする 幸に御老中方の御取做しをもつて弟大學君が御相續相成るやうになつたなら即ちお家の萬歳臣下の幸福之れに增したる事はない何卒左樣御取斗らひを願ひたい者でムる 乙「米も夫れが穩便の上策と考へます強ち籠城討死ばかりが主君に盡す忠義では御座るまいお家を泰山の安きに置き跡目正しく祭祠が絶えずあつたなら必ず其方が御本意かとも存ぜられます御城代さまの御意見通り早速御取斗ひ願はしう存じます」何うしても老人は老人丈先きの考へが深い左り乍ら夫れでは實際壯年血氣の者に氣に入らない ×「チイ〳〵木村那れだから困るなア那れでは士氣が振はんではないか那んな因循なことを云つて居て夫れだから老人はイザと云ふ時の相談相手にはならんナ

○「左樣〳〵折角籠城と決り懸つたものをトウ〳〵打こわしになつて仕舞つた大方之れぢやア江戸表へ哀願が勝を締るだらうよ」と滿座の中が二派に分れ言はゞ保守黨と急進黨とでも云ひさうな有樣で御座います併し大石殿は何うすれば宜いと云ふ事の見込みが立つて居る故幾ら壯年輩が噪いだつて已れの說に贊成の者さへあれば直ちに實行しやうと思召し 内藏「江戸表へ使を立てるのであるが誰か首尾克く勤め了せんと云ふ志のものはないか實に斯の如き役柄ば忠義無双の者であらうサア誰か望んで參らうと云ふ者はあるまいか」と未だ言葉も畢らざるに ×△「米し其御役目を相勤めんと存じます」と異口同音に呼はりました一同之れを見るに御持筒頭を勤めて居られる月岡治右衞門多門九左衞門の兩人であります内藏之助は大に喜こび 内藏「月岡に多門の兩所感心いたす 志然らば何分相賴むであらう……尤も其儀に就き内藏之助申聞すべき事もある故イザ此方へ參られよ」と之れより本丸金の間に於て江戸表へ參りての取斗らい方萬端を差圖いたし兩人赤穂出發の伴り一寸一吸

して言上仕ります

○第十一席

使者内藏之助の命を守らずして失敗し

赤穂城内評議漸く盛なり

月岡、多門の兩人は内藏之助の跡につゞき本丸金の間へ通りますと此處には兼て片岡源五右衛門より持參いたしたる亡君の御靈牌冷光院殿小府朝散太夫芝利大居士と昔しに變る今の面影御燈明をかゝげてお祭り申してあります兩人は今更らに昔を思ひ出で涙に暮るゝ斗り席を下つて平伏いたし居ります此時内藏之助は御靈牌の前に跪き宛然亡君居ますが如く内藏「我君へ言上仕ります扨此度不慮の御災難にて御家の危きことは風前の燈の如く夫れに依つて一度び關東へ哀願いたし大學君御相續相叶うやうに力を盡したく存じます尤も其使の役儀を相勤むるは月岡治右衛門、多門九左衛門の兩人に御座います家中の面々より拔んでゝ御奉公出精いたさんといたす

段感心の者に存じます定めし御靈屋にも左樣思召され御滿足のことゝ存じます」と言上いたしました夫れより御祐筆を召して願書を認めましたが改めて兩人に向ひ内藏「扨此度の役儀は其方等の上申によつて如何樣にも取極ることなれば必ずゝ謹んで疎忽の振舞なきやうにいたされば相成らん殊に願書を御老中方へ差出すに就ては一度で御採納下さると云ふ事は必ず六ヶ敷い事で却下になるは知れたこと併し一度お叱を蒙つて却下となつても二度三度差出すが宜い、クレども既に城受取りの上使が御發向になつた後ならば願つたところで無益のこと早々引歸すが宜らう……夫に注意いたし置くことは戸田采女正殿へ立寄ることは確く無用にいたすが宜いよ、モトゝ御從弟の事であれば藤井又左衛門安井彦右衛門の兩人は引取られて居るか面會いたす事は必ず禁ずるぞよ　月岡、多門「委細承知いたして御座る必ず首尾よく整ひますやう相勤めますで御座いませう」と之れから旅の仕度をいたし千里

を一里と馬を飛ばして江戸表を指し出發いたしました丁度品川まで乗付けたのが三月の廿三日で御座いましたソコで城受取の役人が出張いたしたか何うだかと噂を聞いて見ると撮早御進發に相成つたと云ふ事で御座います 九左「月岡殿如何いたしたもので御座らう既に御發程になつたとあつては大石殿の御差圖通り此儘立歸ることにいたさうか 治右「左樣さ……如何にも殘念の至りであるが何うも外に旨い工夫もあるまい 九左「無いには相違ないケレども只此儘に立歸つては折角奮發して來た甲斐がないと申す者……今一日早かつたなら此樣な事にも成らなかつたらうに惜しいことをいたした」と兩人は品川の宿へ這入つたは宜いが江戸表まで乗込まうと云ふ氣がなくなつて唯茫然と控へて居ります此時月岡は尙も言葉を次ぎ 治左「多門殿斯うして居つたところで決して旨い智惡の出べき筈はないのだが此處に一ツ相談があるのだ 九左「何ういふ事だかマア考へがあるなら咄して見るが宜い拙者は最う考へも何もありや

ア仕ない」ヨク〳〵落膽したと見えます 治右「イヤ〳〵爾う力を落したところで仕方がない實は外ではないが戸田采女正殿のお上屋敷には藤井又左衛門、安井彦右衛門の兩人が居る故彼れに面會して此度出府いたした譯を咄し相談したなら又宜い策も出やうぢやないか 九左「成程爾う云はれて見れば何だか此處まで來たもんだから寄つて見たいやうな氣もするなア……併し待たれよ那れ程大石殿から止られて見れば何か故障のある譯ではあるまいか返つて失策を釀すやうでは仕方がないから……」とイロ〳〵評議いたしましても更に決着いたさん 治右「夫れは斯ういたさう彼是申して居ても時刻が經過ばかり一刻の時間も惜しい場合であるから尋ねて往くと仕やうじやないか 九左「然らば左樣いたさう……」と止せば宜いのにトツ〳〵藤井、安井の兩人を戸田の屋敷へたづねました兩人共早速對面に及ばれ藤、安「能く參られた……夫れに付けても氣の毒な次第で御座る」と實に挨拶も氣の毒で出來兼まする此

時月岡、多門の兩人は口を揃へて　治、九「就ては今日御面會申し上げまするも余の儀では御座いません實は御國表にても衆議紛々として決せず兎も角も御城代大石殿の御取斗らひに依り主君の弟君大學殿を跡目相續の義を御願ひ申さんと吾々兩人態々出張いたしたる次第……夫れに就き何とか能き方便もなきもので御座いませうか、實御相談に何つたる譯に御座いますが」藤井、安井の兩人は元來大の臆病者で此樣相談と云ふと慄へ上る程だから大に驚き　又左、彦右「之れは迚も吾々一丁簡には取斗らう譯にはゆかぬ事密そ采女正殿の御家老戸田權左衛門殿に御願ひ申して見たら旨い工夫もあらうが左樣して見たら如何であろう」月岡、多門の兩人は何で內藏之助が戸田殿の邸へ立寄つては相成らぬと云つたが其譯を知らうやうもありませんから何分宜しく御願ひ申すと挨拶をして仕舞つた、之れが抑不覺な譯で此樣な事を言はなかつたなら赤穗へ立歸つて後大石殿のお叱りを受けるやうな事もないのでしたけれど唯此一言の爲めに終に戸田の家老戸田權左衛門の耳に這入り權左衛門よりして采女正殿に言上に相成つたから之れ又大に驚き　采女「ナニに致しても夫れは以ての外の事だナゼと申すに喧嘩兩成敗は昔より聞いては居れど內匠頭が切腹仰せ付られしのみか城地沒收いたすと云ふのも上意であれば是非なき事決して彼是申し上られる譯ではないから何んとか穩便の處置にいたしたならよからう」と早速多門、月岡の兩人を召しに相成り御目見え仰せ付られ　采女「扨承れば亡主內匠頭の志を繼ぎ例令城受取りの上使が參らうとも決して矢種の盡きる迄は渡さぬと申すよーなれども夫れこそ誠に穩かならぬ次第籠城いたしたところで詰り幕府へ弓を彎くので相手の吉良家に痛痒を感じる譯ではない夫れでは至つて詰らん事であらうと懇ろにお諭しに相成り且つは今更訴に迨んだところで上使出發の後であつて見れば如何んとも致すことは出來ない夫れよりは一刻も早く本國へ立

歸り其趣きを大石殿に報知いたしたむ宜らう」と采女正は悉皆兩人の者を九めこんで早く歸れとお諭しで御座います……處が多門に月岡の兩人は性質剛直ですから何うも人の了簡を圖るなどゝ云ふ事は出來ない直きに手に乘せられて仕舞う然るに今采女正殿に說き付けられて見ると夫れも全く一理あることゝ存じました故 九左、治右「然らば早速立歸るで御座いませう」と正直な丈にソート決定たら咄しは早い又も乘り出して赤穂表へ立歸りました御家中の者は孰れも首を伸して待て居たから 甲「唯今城内へ乘付けたのは月岡、多門の兩人ではあるまいか 乙「拙者も左樣思つたがナニシロ日暮れの事故確とは分らぬが何とか廻狀でもまわつて來るだろう」月岡、多門の兩人は休息もせず早速大石殿に對面いたしました 内藏「之れは御兩所太儀であつた……扨して江戸表の樣子は如何であるか」九左、治右「殘念なことには城受取りの役人出發の後に御座いましたので如何とも致し方が御座いませんでした

内藏「夫れは殘念至極然らば其儘立歸つた事であろうな 治右、九左「左樣仕らんとは存じましたなれど折角江戸表まで參つて其儘立歸ると云ふも誠に本意なく心得ましたに依り戸田殿に御對面申して御座います 内藏「ナニ戸田殿に對面申したと……那れ程申付けたに……」と仰せられたが扨斯う成り行いて見れば仕方がない今更咎めたところで取つて返しも付くまいと存じましたから 内藏「然らば何か采女正殿より仰せがあつたろうな」治右、九左「左樣に御座います別して心得違ひをいたさぬやう……夫れに之れなる御書付を御城代樣に差上よとの事で御座います」と云つて一通の書面を出した、内藏之助は讀まんでも大概中の事は分つて居る 内藏「左樣か……兎も角も休息いたしたが宜らう太儀であつた」と仰せられて之れより廻狀をもつて明早朝登城いたすやうにと家中一同へ布令をまわしましたが彌々城中大評定の件り……

○第十二節

第一の評議忠勇の士籠城を説く
家老大野九郎兵衛血判を拒む

エ、月岡多門の兩人は江戸表へ罷越しましたが殘念なる哉失敗に終りたり……尤も茲に淺野家吉凶を示したる不思議な御咄しが御座いますから一寸相のくさびに伺ひませう時は三月十四日の事で御座います赤穂城の東門梁の下に大きな蜂の巣が出來た……ナニモ蜂の巣位が出來たからと云つてお家の吉凶禍福に罹はると申す筈も御座いませんけれども一夜の中に此大きなる蜂の巣を作つたと云ふのは卽お咄しの種になるので御座います元來赤穂城は要害も良しく殊に御城代大石内藏之助は山鹿流軍法の奥儀に達して居られます故城門などは最も嚴しく御申渡しになつて塵一ッもない程になつて居ります城門と云ふものは人でいへば首で御座います……顏へ墨が附いて居るとか煤だらけになつて居つたなら夫れこそ人にも笑はれませう夫れと同じことで

正門の汚れて居るとか修繕の屆いて居らぬと云ふのは諸侯の恥辱であります殊には要害上一朝事あるときには敵に向つて不要心極まる夫れで御座いますから内藏之助は常に番士に命じて掃除を佳く行屆いて居る然るに十四日の朝になつて急に番士等が大きな蜂の巣を見付けました甲「何うだい同役不思議なこともあるもんではないか昨日夕方まで那んなものはなかつたのに今朝見れば驚くやうな大きな蜂の巣が出來たぜ」乙「成程不審なア手は屆かないし取ると云つたつて容易に取ることは出來ないが如何したものだろう」丙「左樣さ此樣なものが出來たなどゝいえ事でも御城代のお耳へ這入つたことなら夫れこそ又お目玉だ寧そ今の内に早く取つて仕舞はうと頻りに立噪いで居りました然るに不思議なることには番士等咄しをいたして居るところへ一匹の大きな熊蜂が飛んで來た甲「ヤア大きな蜂だ……其處い等にマゴ〳〵して居て刺されなさんな」乙「如何に大きな蜂だと云つても那んなのは珍らしいれい何うだい捉

まへやうじやないか开して博物館へでも納めよう」正逆に此頃博物館も御座いませんでしたが物見高いのは今も昔も變ることは御座いません聞き傳への大勢ソコへ群つて參つた其の内に件の熊蜂は蜂の巣を目懸けて飛込まんとするを爾うはさせじと蜂の面々劔を磨ぎすまして内守外攻チヤンと手配りは定つて居ると見えて勇み進んで鬪ひました×「ヤア大變だ蜂が戰さを始めたぞ……烏の戰爭蛙の戰爭などゝ云ふ事は隨分あるが蜂の戰爭は珍らしいなア

△「此奴は面白いや向ふは頭數も多いけれど地蜂だから如何しても弱い……

……強いなア熊蜂は……ソラ地蜂の死骸が落ちて來たぞ可愛想に之れも矢張り自分の命を捨てゝ巣を守らうと云ふ了簡なんだらう感心なものだ先づ人ならば武士だなア……可愛想にトウ〳〵小蜂は負けて仕舞うぜ巣へ引揚げて仕舞ふ何うだらう其處等に長竿はないか知らん長竿を持つて來な已れが那の熊蜂を打き落して遣るから」ケレども生憎長竿もないから其内に熊蜂は勝つた勢に乘

じてトウ〳〵巣へ向つて參りました地蜂も今は必死の場合死物狂ひに戰ひましたが如何せん群羊に虎を放つが如き次第でありました故終に地蜂も惣敗軍と相成り殘念ならんが敵に後を見せて遁出しました×「吉生奴トウ〳〵熊蜂が勝つて仕舞つた惡い奴だ殺して仕舞へ……」と孰れも立噪いで居る弱きをたすけ強きを挫くと云ふのは之れは日本人の美德でありますから隨つて蜂位の事でも弱きもの丶方へは加勢する其内に何處を何う盛り返したのか以前の三倍も小蜂が陣列整々と押し寄せて來た、熊蜂は最早戰ひに勝つたものですから幾らか油斷が出て來て休息して居るソコを目懸けて多數の小蜂は前後左右より一度にブーンと鬪を作つて攻め立てたから堪らない幾ら熊蜂が強いと云つたつて油斷をして居る處へ短兵急に攻め立てられました故脆くも負けて逃げ出すところを附うはさせぬと跡を追懸け又もやお濠の上で死物狂ひに大戰爭となつた

甲「石をぶつけて遣れ惡い熊蜂だ」と却つて見物の方がワイ〳〵大噪ぎに噪い

で居る其内に熊蜂も力盡き勢極つて重傷を受けしと相見へ正逆さまに濠の中へ落ちました乙「ソラ遂々負けた様態を見ろッ〳〵……」と囃し立てたのは全然蜂の戰爭とは思はず孰れも吾身の上のやうに思へて贔負いたして居ります小蜂等は其儘巣へ立歸ること〻思ひきや二三度凱歌を揚げて其儘何處となく飛去りました斯る不思儀の有様に門外は宛然人の山を築くばかり大石内藏之助は今や登城いたさんとするところへ此有様故群集にまきれて見物いたして居りましたが内藏「世に吉凶を示すときには必ず天變地異のあるものと聞けど斯様なる不思儀な兆候を顯はすと云ふのは何か事がなければ良い……殊に今は主君内匠頭殿勅使御接待の御役目を蒙つて居るなれば萬一疎相でもあつたことなら御家に關はる一大事と安き心もなく其儘御登城遊ばされました見物人も蜂が飛去つたものですから見物「ヤア最う詰らない那の熊蜂か牡か牝か知らないけれど屹度連れがあつて最う一戰さ始まるだらうと思つたのに小

蜂が見えなくなつたから那れで宜いんだらう、敵を取つたと云ふ譯なんだらうシテ見ろと那の熊蜂は兄弟もなければ一人身だと見えるな」漫言ことを云つて一同引き取りましたが果せる哉此日は内匠頭が殿中に於て刃傷いたしたる當日で御座いましたから即ち凶兆を示したことゝ存じます

御咄しが余事に渡つて恐入りますが明くれば彌々二十九日……昨夕月岡、多門の両人が江戸表より立歸つたので明早朝登城いたせとの布令を廻されました故一同先きを爭ひ登城致されました大石内藏之助、同主税、大野九郎兵衛、同群右衛門、奥野將監、近藤源四郎、川村傳兵衛、岡野金右衛門、富森助右衛門原惣右衛門、片岡源五右衛門、岡島八十右衛門、赤垣源藏、前原伊助、等大小の侍悉く登城に及び處狹きまで居並んだり此時金の間の襖を開けば例の如く涼光院殿小府朝散太夫玄利大居士の御法號ばアリ〳〵と在すが如く家臣の面々平伏いたされます此時内藏之助は一同の者に向ひ　内藏「扨各々兼て評

定一決せし通り月岡、多門の兩所江戸表へ出發いたしたる所既に城受取りの上使發行の後にて百事意の如くならず殘念ながら立歸りたるが今や斯く相成つて見れば外に然る可き手段もなく即ち籠城して敵を引受け城を枕に討死いたすより外は御座らぬ……殊に某しは主君より當城は預り居るもの例令將軍家の命令と云へど殿より明渡しの仰せ渡されの無き内は射向ふ者は悉く敵……陪臣の身としては重きは主君内匠頭殿の御申付のみオメ〳〵城を渡す事は決して罷り成ならん侍は名を惜むこそ本意と存ずる名を汚して余命を繋ぐとも人の物笑ひとなりて何もせん、人生五十、七十は古來稀なり城中に踏止まつて内藏之助と生死を俱にせんと欲する者は殘るし夫は不贊成だと思ふ者は遠慮なく退散いたして貰はう更に恨とは思はざれば腹藏のなき處を打明けて貰ひたい」と姿を正し屹と申出でられた之れを聞いたる近藤源四郎、奥野將監、小山源五右衛門……三人の者は躍り揚つて喜んだ中にも源四郎は眞先きに席

を進め、源四「御城代樣へ申上げます既に先日の御評定にて某は籠城の議を贊成いたしたる通りにて今更ら多辯を要する迄も御座いませぬが速に連判狀を作りて籠城の支度に取懸り矢玉のつゞく限り戰ひといたし弓折れ力盡きた上は一死以つて君恩に報ひ泉下に赴いて亡君に御目通りをいたしたく御座る……ナニ一萬二萬の木葉軍勢が押寄せたりとて吾々二三勇士打揃ふて向ひなば更に驚くところは御座らぬ」と大言を吐て贊成いたす、クレども之れは壯年血氣の暴論故内藏之助は敢て之れ等を相手とはいたさぬ此時岡野八十右衛門、赤垣源藏、富森助右衛門等席を進め「如何さま御城代の仰せ通り主君の亡き跡にてムザ〳〵城を渡したと云はれては天下後世の物笑とならん既に近世福島家の改易の如きは家臣の者善く武法を守り美談をとゞめて居りまする何卒吾々ば御城代の御來酬に從ひ粉骨碎身して一方を引受け申すで御座らう「内藏之助はハラリ落つる涙を押へ　内藏「誠に各々方の仰せ内藏之助感服いたす……定

めし主君に於かせられても如何ばかりか御喜びの御事と存ぜられる然らば之れより連判をいたさん」と主税を呼んで先づ初筆に大石内蔵之助と血判し之れを老臣大野九郎兵衛に渡しますと九郎兵衛は暫らく連判帳を眺めて居た　内蔵「大野御血判を……」　九郎「大石殿血判の義暫らく御見合せを伺ひたい」　内蔵「夫れは又如何なる次第事の仔細によつては再評定も仕るで御座らう」　九郎「別に之れと申す仔細も御座らぬと詰り血判いたす所以は其人物に疑を挾みての事と存ずる夫れを確めんには血判いたすが古法なれど血判いたしたとて萬一反謀心のあるあらば途中にて變心いたす者なしとも限られず夫れ故血判いたさずとも己れの心さへ忠義に凝つて居つたなら強ち血判にも及ぶまいかと存ずる」　隨分妙な理屈をかつぎ出したものだ内蔵之助は余り手前が勝手なことを申すので呆れて仕舞つたが去りとて此樣なことで顔の色を變へるやうな小さな了簡では御座いません故　内蔵「然らば如何いたして宜しう御座らう」　九郎「去

らば……別段忠臣の面々丈は血判に及ぶまいと存ずる」と只管拒む卑怯な擧動堪り兼ねたる奥野將監二尺五寸の大刀を横たへ九郎兵衛の側に進んだる縡の顚末は如何相成るや例の次席に讓る

○第十三節

奥野將監大に大野を責む

家老職と云へば國家樞要の老臣であります一國一城殿の代理を勤めて臣下の安寧をはかり治政の正しきを得ざる可からざる役柄でありますればイザと云ふ場合には矢張り衆人に先んじて夫れ〳〵下々の者を導かなくてはならぬ、然るに大野九郎兵衛は平生殿の御愛顧を受けて居り乍ら今や國家の急危存亡の場に臨んで兎角尻込みばかりいたし城を枕に討死するなどの考へはないと見えまして血判誓詞をいたしません、尤も口先きでは實に忠臣ぶつて居る……忠義の志さへあれば決して血判には及ぶまいなどゝ……併し夫れでは幾ら家

老だからと云つたつて下々で承知しない奥野將監は九郎兵衛が血判を拒むのを見るや二尺五寸の大刀を提げツカ〳〵と九郎兵衛の側へ進みました、之れが平常であつたならば御家老の側なんへ大刀を横たへ出るなどの事は出來ませんが此場合では忠義の志あるものが一番派振りが良い　將監「アイヤ御家老！……イヤサ大野殿貴殿の御一言は實に心得難く存ずる忠義の志があつて血判をいたさぬと云ふのは古來未だ聞かぬ咄し城を枕に討死いたさうと云ふ決心の者であれば何條血判を厭はん察するに平生憶病末練な御氣象なれば血判した以上は必ず一方を引受けて敵に當り弓折れ矢種盡きたる曉には討死いたさなければならぬ夫れがつらくて拒むので御座らう……サア御返答なさい……御挨拶によつては軍陣の血祭り容赦はいたさんぞと大刀のそりを打たしていツタと睨み付けました

九郎兵衛は大剛の將監が白眼ました事で御座いますれば驚くまいことか……

……之れが太平の世で主君御存生の折からならば「控へろ將監老臣に對して不禮であらう位の事を申すのであらうが此場に於ては爾んなことは申されないナニシテも無法者の將監であれば返答次第によつては斬り付けんとも限りませんによつてハヤ色も青褪めがタ〳〵慄へだした　九郎「マア〳〵待つて呉れ奥野爾う貴殿のやうに云はれて仕舞つては一も二もないが拙者とても家老職でも勤めて居れば血判に外れやうなどゝ云ふ卑劣な精神は御座らぬ……

將監「ナニと申す……卑怯な精神は無いと……卑怯な精神も無くば何故血判をいたさぬ御城代樣は那の通り筆頭に御血判に相成つたではない歟席順と申し祿高と申し次ぎは貴殿の番では御座らぬか夫れを拒むからには卑劣な根生があるからだ……今は不忠者の九郎兵衛老臣などゝは申させんぞ」

とハヤ鯉口を寛げました此等の樣子を内藏之助はじめ其他重役の方々も御覽になつては居られたか余り平生威張り散らし人を眼下に見下す九郎兵衛なれば斯

ういふときにチツと油を絞られる方が宜らうと誰一人止めて吳れる者も無い九郎兵衛は實に弱つて仕舞つた 九郎「マア〳〵爾う云はずに奥野殿少々お待ち下され……成程貴殿の云ふ處實に尤も至極併し事の次第を申されば彼是思ふも無理ならず……何を隠さん某の初孫奴が今朝より發熱往來して居る故夫れに藥を與へんこと家人に申付けて參るを忘れて來たから唯々夫れが氣になつてならぬ、デあるから一寸見て參りたいと思ふけれどヤレ討死だ籠城だと其の儀も篤と決らぬに退場いたす譯には往かず押えて居つたところだ……幸ひ評義も一決したやうだから孫を見舞つて來て夫れから血判いたすことに仕やう」と理窟のない處へ強て理屈を附けました

此樣な理窟が屆いたら不思議だケレども奥野將監だつてソンな事で胡麻化されては居りませんカラ〳〵と打笑ひ 將監「何か御家老の事であるから明案でもあるかと思ひの外夫れは何事だ百姓町人ならば知らんこと、苟も恥を知り禮

節を辨へて居るものが宜く开んな理窟を申されたものだ……コレ良く承はれ今や籠城いたさんとか討死いたさうとか孰れも命を抛つて懸る評定では無いかシテ見れば家族の者と雖も夫れ〴〵死するは覺悟の前だらうと思ふお家の一大事を跡に見て孫の病氣が氣になるどはサテ〳〵呆れて物が言へぬ……去り乍ら幾ら畜生同樣な貴殿でも家中の見せしめに許しては置かれん此將監が手に懸けて不忠者の爲めに誡しめといたさせ吳れん」とアハヤ九郎兵衛眞二つといたさんとするとき正座に扣へたる大石内藏之助 内藏「控へろ奥野……不禮なるぞ將監……苟も大野氏はお家の老職では無いか其方に對して双を向けろ抔とは不屆た奴だ退れ〴〵……將監「夫れは爾うでも……内藏「イヤサ將監退れと申せば退らぬか」幾ら將監でも内藏之助段には返す言葉がないシホシホと跡へ引退る此時内藏之助は詞を改め九郎兵衛の方に膝を押向け 内藏「仰の赴き一〻承知いたす成程孫は子より可愛いと云へば左樣思

召すは尤のこと然らば血判は明日の事として今日は御退席になりまして宜しう御座らう御都合次第御引取り下さい」と内藏之助は體よく九郎兵衛に退場をすゝめましたと云ふものは此樣不忠者が居ては返つて評定の妨となる斗りか又如何なる血氣に逸るものがあつて椿事を引起さんも圖られず左樣なことがあつて同士打ちでもいたすやうでは他家へ聞へも宜しくない淺野の家來は主を失つて孰れも血迷ひたりと云はれゝば第一御家の恥辱且つは亡君の御名前にかゝはること……と早くも思案いたしたに依り此樣に申したので御座います九郎兵衛は开んなことゝは思はない唯々卑劣な根生で血判などするのは馬鹿々々しい死れば命は無いものを何處へ往つたつて余命を送るなどの事の出來ぬことはあるまいと實は既に離反心があつた間がよかつたら遁亡も仕かねまじきので御座います……實に御家老が此樣譯では進んで籠城しやうと云ふものは無からうと云つても差支へないけれど忠不忠は決して身分に關する譯のものでな

い、九郎兵衛は命びろひを致したやうな氣がして九郎「いづれも御免一足お先きへ……」と云つて退場いたす、心ある者は誰そ呆れざる者がありませうか目送して其圖宇々々しきに驚く斗りで御座います斯くの如き噪ぎの爲め血判の事も余程暇を取りまして日も暮れ〳〵に相成つたが内藏「如何に孰れも詰らぬ事に時を費したれば血判の事は明朝に讓つて再評議いたさうでは御座らぬか」×「成程夫れも宜しからん併し飛んだ厄介者の爲めに評議もまとまらず殘念至極で御座る……」△「左樣々々世には彼の如き似非武士があるので困る何うか明日は早く決定て一働きいたし太平の睡りを攪して呉れん」など唯一人討死の覺悟をいたさぬものはないケレども前席にも申上げた通り兎角滿座の中では其の積りに決心しても命を捨ると云ふものは喜ぶべきでも御座いませんにより妻子の顏でも見ると ツイ恥を忍んでも生きながらへて居たくなる之れは普通人間の心だ……ソして見れば余程の忠臣でなければ命を捨てるなどの事

の出來べき筈がない夫れを見込んだる内藏之助孰れにして亡君の御無念を晴さんかと種々苦心の末遂にすぐりにすぐつたる四十七士の復讐を企てる事に相成りましたが次席に於て詳しく辨じます

○第十四席　籠城か殉死か評議益す紛糾す　華岳寺墓前果して義士の血を染むるか否か

人面獸心なる大野九郎兵衛は孫の病氣だ抔と愚にも付かぬ事を云ひ立てにして評定の席を立去りましたにより籠城血判の義は當日は中止と相成り四月一日惣登城と云ふ事になりました、内藏之助に於ては定めし今日の會議には人數も減少て居る事だろうと思つたけれど亦んな心は顏に顯はさず未明より本丸に出仕いたして居る其内に登城いたすものも御座いましたなれど全く前日の勢は無くホンのボツ〳〵でありますが殊に大野九郎兵衛の親族並に一統と云ふ者は一人も出席いたさない内藏之助慨然として心中嘆息いたして居られますと

ソコへ小山源五右衛門が參られた　源五「御城代樣怪しからん事が御座いまする内藏「何んだ怪しからんとは……源五「外では御座いません今日席上を見渡すところ昨日の半分よりも人數が滅つて居る斗りか、大野父子を初めとし彼れが一家一門悉く登城いたさぬでは御座いませぬか實に不忠不義なる致し方で御座います」と奮然として一刀の柄も握りつぶれん斗りに憤つて居る内藏之助とて内心では立腹して居るに相違ないが決して輕卒な事はいたしませんに依つて　内藏「成程大野一家は誰一人參會いたさぬが九郎兵衛殿は今に見えるであろう……マアノ〳〵爾う立腹いたさんで今少し待つて見るが宜い　源五「イヤ〳〵夫れは無駄で御座います既に昨日も那んな卑劣なことを申して連判を辭すやうな臆病者、必ず今日は參りません事は鏡に懸けて見るより確かで御座い升夫れよりは拙者之れより大野の屋敷へ參り如何なる存じ寄りか相尋ねて參りませう又先方の模樣によつては一刀兩斷にいたし首を提げて席上に示し

不忠義を働く者の見せしめといたしませう此儀御許に相成りますやう願ひたく存じます」と飽まで九郎兵衛を取つて押えん幣幕で御座います、内藏之助篤と聞き終り内藏「如何にも其方の申すところは尤に聞えるケレども一ツ考へなくては相成らん事がある 源五「何事で御座いますか 内藏「イヤ外ではない其方と九郎兵衛とは身分が違う……成程夫れは忠不忠を論ずる段になつたなら格段の相違があるうとも上席の者に對しなば矢張夫れ丈の禮を盡されば相成らぬ殊には先君御寵臣のことでもあるし猶々不禮があつては宜しくない、夫れよりは去る者は追はず來るものは拒まず孰れも心を一致にしなければ事の成らぬもの表裏反覆常なき者が幾人あろうとも夫れこそ邪魔になるとも味方の助となるまい克く〳〵此處の道理を考へて無法の事は致さぬが宜い……既に昨日も奥野に申聞けたが萬一九郎兵衛殿に對して刃を向けるやうなことでもあらば赤穂の家中では主君が亡き後は孰れも血迷つて同士打いたした抔と笑はれるやう

なことでもあつては亡君の面目にも係はると決して左樣なことは思はぬが宜い」と懇に説き諭された故源五右衛門も如何にも理の當然に返す辭もなく其儘にいたしました其の内に追々時間も經ちましたなれど最早誰一人登城しない來る者は早く來るが來ないものなら何時まで待つたつて來る道理はない 内藏「最う此の位で來會者は無いだろう……コレ主税一寸御出席者の御姓名と人員をお調べ申せ 主税「ハイ……と云つて一々改めますと僅に九十二名、主税「九十三名に御座います姓名は之れなる控帳に記して……」内藏之助は之れを見て一同に向ひ内藏「實に思へば情なき次第で御座る籠城討死と聞いては過半以上は出席も致さず之れでは實に頼少なき次第……亡君御盛の時であつたら正逆に此樣こともあるまいものう浮世とは言ひながら圖り難きは人の心である」と頼み難き人の身を嘆じて御咄しになりましたが余りと云へば淺ましき次第と孰れも悲嘆に搖き暮れて暫し返答いたすものもありま

せん

此時内藏之助は再び語を次ぎ 内藏「扨各々方御覽の通り小人數と相成りましては籠城の義も覺束なからんと存ずるが如何で御座らう内藏之助の意見を申し上るまでに一應皆樣の意中を伺ひたい」と云ひ畢るか畢らぬ内に近藤源四郎はツカ〳〵と席を進めた……内藏之助に於ては又近藤が力味出すなと思ひましたけれど 内藏「近藤何か意見があるか 源四「御座いますとも……充分意見か御座います申すまでもなく既に籠城の義は決定いたし居ることで御座れは今更決して御變更御無用に存じます例へ十人か五人に成るまでも城を枕に討死いたすに何ぞ敵を恐るゝ事之あらん速に籠城の義仰出さるゝ樣に願ひます」奥野將監も源四郎の説に贊成すれば小山源五右衞門も贊成だ 將監ノウ近藤吾々三人か揃つて籠城すれば一人一ケ處宛の堅めを守つても宜いでは無いか不忠未練な奴原は決して味方と賴むに足りないぞ」と此の三人は飽ま

でも主戰論者で御座います去り乍ら老成の人々は頗る思案に暮れました

×「大方御城代が那々云はれるからには何か計略のあることであらう寧そ之りやア銘々の策などゴテ〳〵咄し出したところで仕方がない評定か纏まらなくなつて却つて其内に人心離反するばかり何とか早く相談一決して貰ひたいものだと頻りに氣を揉んで居る……併し近藤等か突飛な意見を述べてからは誰一人已れの意見を述べやうと云ふ者もなく互に顔を見合して居りましたゆゑ

内藏「如何に各々何とか御意見も御座らうに遠慮なく御發言下さらずば内藏之助も胸中をも申上げ御相談いたし悪いでは御座らぬか」と又も内藏之助より發言を促された此時富森助右衞門は膝を進め助右「御城代樣の仰せ尤の至りに御座れども各々方とても御發言のなき處を見ては萬事のお指圖を仰ぎ生死を共にいたして立働かん存念かと存じます夫れ故小人數でも籠城いたさんとの仰せなれば籠城いたし粉骨碎身刀折れ矢盡きて後屠よく切

腹仕るまでの事……又別に良き御分別も御座れば此儀に御賛成もいたします故何卒評定の御指圖は宜しく御命令を願ひたいので御座います」一同も助右衛門の申す通り素より御城代の指揮を仰いで事を致さんと云ふ考へで御座います内藏「然らば某しより發言いたさん別段では御座らぬが景早百名未滿の人數では迚も籠城いたしても無益の事夫れよりは同じ命を捨るなら御菩提所花岳寺に於て一同切腹いたしたる方遙に武士の法にも相叶はんと存ずる此儀如何で御座らう」此時席の右手に列なつたる小野寺十内と申すもの進み出で十内「夫れは良い處へ御心付きになつた同じ死ぬなら武士らしく命を捨てたいと思つて居たが夫れならば決して死後人に後指を差される樣なことも御座るまい十内第一に御賛成申しまする」近藤、小山、奥野の三人は籠城主張者であつたが御菩提所で切腹と云ふことを聞いて源五「何うだい近藤切腹だつて籠城したつて何の道捨る命だ同じことなら御城代樣の御指圖通りに從は

うでは無いか源四「成程之りや却つて面白い若し切腹するんなら三人はチツト勇ましい風變りの死方をしやうじやないか 將監「夫れも宜いが幾ら風變りだつて切腹するには幾通り仕方があるものかツブリとやつてグーツと引けば夫れで宜いのだ十文字に切るやつを十一文字と云ふ譯にも往まいぢやないか 源四「夫れは爾うだけれど拙者の思ふところは彼の村上彦四郎が櫓の上へ乘つて切腹するとき臓腑を攫み出して壁へたゝき付けたと云ふが何か开んな勇ましい切腹の手本を殘したいと思ふんだ 源五「夫れでは三人別々に切らうじやないか誰れが一番勇ましい切り方だか」悠氣なものもあつたもので此方の三人は切腹の仕方の相談をいたして居ります内藏之助は切腹に付て異存も御座いませんに依つて 内藏「夫れでは之れより連判いたし亡君の御靈牌に備えんと思ふけれど今日は余り參集の仕方が遲いのでツイ待ぼうけを喰はされ夫れ故會議も遲くなりハヤ點燭の頃にも相成つたに依り明朝登城の上血判誓詞いたさん殊

に城受取の御上使御到着までには數日の間もあれば夫れ迄に充分仕度いたして亡き跡に差支なきやういたさん」と之れで此日は一同退散いたし翌二日又も登城をいたされましたが愈々内藏之助本心を打明し義士復讐を企つるの一條次席に於て詳しく辨じます

○第十五席

僅に淘汰し來る六十餘名の義士血判誓詞君の仇を復することを約す

エ、前席に引續き言上いたします明くれば四月二日の未明より徘徊と城中差して詰寄せます故大石内藏之助は心中不思議に思つた内藏「今日は昨日と違つて孰れも未明より大勢登城いたすやうだが切腹と聞いたなら必ず不參勝のものが多からうと思ふのに」とソコは恐く先見が明るいのだから斯ういへば何うと云ふことは判つて居る其内に來る丈は登城濟に相成つたと見えて誰一人參らない殊には昨日よりも亦一層頭數が減つて居る内藏「察する通りであつ

たなシテ見ると味爽より詰めかけたのは忠義鐵石のものであつたのだらう今日こそ充分計略を咄すことが出來る」と内藏之助は尚謀のあることゝて篩ひ上げたる忠義の武士の殘つたのを喜こんで居ります軈て例刻にも相成つた故内藏之助は上席に着座いたし内藏「扨各々今日は必ず昨日通りの集合であらうと思つたに又々減少して今や六十有余人……實に何と云ふ不忠不義の者ばかりで御座らう甲「イヤ〳〵して決して斯んなこともあるまいかと思ふから念の爲め一應見せに遣つては如何で御座らうか夫れでも參らん譯なら據どころ御座らんが……如何にも不思議と云はうか口惜しいと云はうか何と云ふ腰拔ばかり揃つて居るので御座らう乙「成程中村氏の云はれる通り昨日會合した者の處だけへ使を出したが宜しう御座らう其の上血判誓詞をいたした方が宜しからうと存じます」内藏之助も其儀一應尤もなりと之から使を出して來會を促すと ×「今日は是非共出會いたす筈であつたが俄かに腹痛いた

して此通り寢ふせつて居る始末……」と孰れも化病をつかつて斷りを云ふ內藏之助も最早此等の人は頼むに足らんと思ひ 內藏「御一同使を出して會合を促しでさへ那の通り出席いたす者も御座られば唯今集會いたされた者のみにて誓詞をしたゝめん去り乍ら猶茲に一つの御相談がある △「イヤ又御相談で御座るか最早大概評義も一決いたしたことなれば誓詞血判いたして宜しからうと存ずる 內藏「イヤ待たれよ誓詞血判をいたすに就き今兩三年延引いたしたいと思ふ……御相談と申すは此儀で御座る」と云はれたので中にも甚だ不審に思ふ者もある ×「夫れぢやア御城代の思召が解らぬと申すものだ二三年も誓詞血判を延して仕舞へば人心の離反いたすは必定……其の位の事を存せぬ御城代でもあるまいに、併し夫れとも別に御名案でもあつての事か兎も角も其仔細を承りたいものだ」と口にこそ云はぬが心中には內藏之助の胸中を推察するに苦しんで居る、然るに近藤源四郎、小山源五右衞門、奥野將監の

三人は血判を兩三年延すと聞いて申合したやうに烈火の如く憤りヅカ〳〵と內藏之助の前へ進み大刀の柄へ手を懸けて詰寄せました 源四「如何に御城代承はれば血判を兩三年……の……延すとの由既に最初籠城と決定いたさん乍ら又も花岳寺切腹との變更なれど御菩提所にて潔よく一同切腹いたすなら武士の體面に疵も付けず仔細はなからうと存じ其義御賛成申上げしに今又其切腹さへも兩三年延引いたすと申しては察するに大野九郎兵衞の臆病風にかぶれ生命が惜しく相成つたと見える御返事によつては此場を御立せ申さんぞ」將監「も同じく言葉をつぎ 將監「之れまで御城代の仰とあれば一も二もなく相守り殊には一家中のもの誰れ一人敬び尊ばぬものもなきに今に及び生命を惜むに於ては御城代と云はされん家中の見せしめ一刀兩斷になし返す刀に某も自殺いたすん御返事承はらう」とハツタと白眼む、源吾右衞門も決して默言つては居ない 源吾「此間より決議しながら幾度も變更すれど夫

れも此れも亡君の爲めと一々御指圖に從はんと存ぜしに今やいよ〳〵切腹の間際に相成り血判いたす場合になつて言を左右に托し逃れんとするは何事なるぞ嘸や亡君泉下にて此由を御耳に入つたなら腑甲斐ない大石殿と必ずお恨みがあるで御座らう、御城代樣此處は主君御靈牌の前で御座るぞ、左すれば即ち君の御前も同じこと武士は武士らしく死すべき時に死してこそ譽を百歳の後にも殘すと申すもの人倫に外れたる行をして惜しからぬ命を永らへアレ見よ那れが赤穗の遺臣御國家老の大石殿であると云はれては第一殿の御名前に傷が付くでは御座らぬか御家の大事に莅み左樣な御心底では亡君の御位牌に對し何と申譯をいたさるゝサア此場に於て直ちに悔悟いたし誓詞血判をいたさばよし左もなきに於ては寧ろ某の刄に懸け共に切腹いたすで御座らう」と左右より詰め懸けられたが内藏之助は唯莞爾として別に周章狼狽樣子もない、此時小野寺十内は今や三人の者が必死の談判にて樣子に依ちば刀を汚さぬとも限らない

により見過すに忍びず十内「待たれよ三名の方々……未だ大石殿の御所存も承はらず唯誓詞血判を兩三年延すと仰せられしとて何も左樣に憤るにも及ぶまい能く〳〵御所存の程を承はり又此方よりも意見のあるところを申し上げ御相談に及んでも飽まで非義の仰せなれば某も共に御助力申す覺悟……マア〳〵早まつて大事を誤つてはならぬ胸を定めて評定いたされよ」と制されましたので三人も成程夫れも尤と思つたから漸く後へ引退りました内藏之助は一座を見渡し内藏「主税……其方は次の間にあつて外の者の姿が見えたなら此鈴を振つて相圖をいたすが宜い主税「畏こまりまして御座います！」と立つて次の間へ往く内藏「扨御一同の旁此れ迄某の申したる籠城の義も切腹の義も實は悉く佯りで御座る何を隱さん忠義の士を撰んで謀を共に致したいとは存ずれど其道に苦しみ或は籠城と云ひ又は切腹と申し孰れも生命を捨るの御相談夫れ故誓詞血判の段に及ばゞ事に托して延引し今日に及びた

れど内藏之助は他に存じよりが御座るのである夫れは別義にゝなけれど籠城や切腹などの事にて臣下の面々忠義の志を顯はすとも御本家始め御家門の旁は如何に御迎惑いたさるゝか知れない然る時には亡君の御意には叶うとも御褒めの御言葉を賜はる事は萬々御座るまい夫れ故茲二三年の間切腹の時機を延し時と場合を見合せ其時こそ潔よく命を捨てゝ貰いたい之れ内藏之助畢生の計略にムる」と詩と一座を見渡したときには誰一人其心體に感服いたさぬ者はない甲「デは必ず三三年經てば思召があつて其儀の叫うやうになると見えるナニ二年や三年經つのは夢の間だ夫れ迄切腹は見合しても宜い、人が何んと云はうが御城代の御相圖なら恥を忍んで居らう」と云ひ合はされど其覺悟……此の時吉田忠左衞門は進み出で忠左驚き入つたる御大望の次第善く相分りました全く吾々の遠く及ばざる事で御座る且ツ某唯今の御言葉を御推察申すに亡君御生害の砌恨を呑んで泉下にまし〳〵事故何うか二三

年の間に其の御恨を返し其の上にて天晴武士らしく美事切腹いたさんとの御存念に御座らうと存じます此義如何に御座るか」と愁然として尋れられた一座の面々も此時までは是非籠城するとか切腹しやうと云ふ意氣組であつたから何方かと云ば上へ對し恨みを含んで居つた喧嘩兩成敗と云ふのに吉良家は滿足に立ち乍ら此方は主君御生害の上情なくも御家斷絶となる次第であれば飽までも上へ當付けで此義斗り無念に存じて居つたが今亡君の御恨みは上野介にあると云はれて見れば嘸や御無念に座ろう上を恨どころではない先づ當の敵を討取らなければ腹が癒えんと云ふ決心は忽ち一座の面々心中に決定いたされた内藏之助はハラリ落る涙を押へ内藏「如何にも吉田氏の仰せ通り内藏之助の心底は亡君の御恨を晴し奉り然る上泉下に於て御側に仕へ忠義を盡さん所存に御座る各々方にも御異存もなからうと存ずる」と始めて奚で深慮の程を打明けました故近藤、小山、奥野の三人は堪り兼てワツと泣き出したか

三人「エー御城代様へ申上げます……誠に申譯が御座いません左樣な御志とは露聯かも存ぜず飛んだ御無禮を仕り今更面目次第も御座いません……最早一同の方に面を合す事の出來ぬ始末何ぞ此場で御暇を願ひたう御座る」と悄然として左しも鬼を欺くが如き三人が首を垂れ面目なげに見えました、内藏之助は素より三人の忠志を認めて居るが只血氣に逸つて屢々事を敗らんといたした故此場で少し誡めて遣らうと思召され 内藏「何うぢや三名の者餘り其方等は前後の考へもなく暴言を吐く故夫れで此樣不始末を來すのだ今も其方達の申せし如く此處は亡君の御前ではないか城代に對して能く左樣なことが申されたものだ若し主君の御前であつたらヨモヤ彼樣なる言葉も出ないであつたらうに場所柄を心得ぬ其方等屹度叱り置くぞ 三人「ハヽア恐れ入り奉ります、此上は速に此場御暇を賜はり歸宅の上切腹いたし詫を申し上げろで御座いませう誠に面目なき次第に存じます 内藏「彌々以つて不屈至極の事を申す一同殿

のお恨みを晴さんとする内に其方等三人切腹いたす抔とは之れ犬死とも申すもの……犬死いたすが武士の本意か サア何故武士らしく御位牌に對して罪の御詫びを申し向後決して左樣な不心得は仕りませぬと申上ぬのだ」と充分たしなめられて三人は唯恐れ入る外はない内藏之助は篤と此有樣を見て 内藏「去り乍ら其方の心底は忠義の爲めに命を捨てんと思ふ外一點の曇りなき事は内藏之助能く存じて居るぞよ、決して此場を退き切腹にも及ぶまじ」と之れより冷光院殿の御靈牌の前で以來決して暴言はいたさぬ旨を誓ひ之より六十餘人一味徒黨血判誓詞の上決して二心なき旨を御尊靈の前に誓ひ且つ親兄弟妻子たりとも一味の者にあらざれば決して他言いたすまじく其謀計の如きは大石内藏之助采配を取つて指圖いたすに付萬事其命に背かぬ樣手筈を違へぬ樣にと評義もきまり一同退出いたしましたが之れより愈々御金配當の一條次席に讓つて言上いたします

○第十六席

内蔵之助の深謀お金配當をなす
領内大石の德を慕て歡聲に滿つ

内蔵之助も胸中の秘計を打明けまして亡君の御恨みを晴すには死すべき命をながらへるに若かず今茲にて切腹したとて唯臣たるの義を果すのみにて更に亡君の御褒めはあるまいと云ふので奚に初めて復讐の決議が成立ちました、ケレども之れは一大秘密の事で御座いますれば此日の評定も同じくグッ〳〵に畢つて仕舞つた……花岳寺の切腹も遂に議案が成り立たぬと云ふことに家中の者へは云ひ觸らしました之を聞いて竊かに喜んだのは大野九郎兵衛だ九郎「夫れだから某が最初から言はんことでは無い幾ら大石殿はじめ忠臣顔をする者があつたつてイザと云ふ場合に臨んで生命の惜くない者は決して無いシテ見れば此評議の纏まらぬと云ふ事も知れきつたもだ其處に目の付かぬ大石殿未だ〳〵利巧なやうでも若い〳〵……」と已れの強慾に引きくらべて復讐

の大望を相談したとは知らずに獨り影辨慶を極めて居る、此方は忠臣の面々に於きましては最早切腹の義を延ばすとなつて見れば何時迄無駄に日を過しても仕方がない其内には御上使も到着するから豫て亡君の御存生中御丹精に相成つたる御貯藏金を臣下一統へ分配いたし御恩澤の程を知らしめ且つは夫れと同時に手足纏ひになる不忠の奴原を追拂つて仕舞つたら宜らうと云ふ決議に相成つた……ソコデ其夜の中に廻狀を觸れ明早朝より登城いたす可く亡君御貯藏金配當いたす可きものなり……との文章を認めてありました彌々明くれば四月三日未明よりして大石内蔵之助は出仕いたしますと次いて大郎九郎兵衛も出仕いたした 九郎「之れは御城代お早い御登城に御座る」内藏之助も圖宇々〳〵しい老爺だと思ひましたがソンな氣振は顔に顯はさず 内藏「今日は御貯藏金配當の御評定に決したい故廻狀を以て申上げましたが早朝よりの御登城御苦勞千萬に存じます」と四方山の咄しなどいたして居る内

に今日に限りて家中一統ゾロ〳〵惣登城だ……正直なもので命を捨ると云ふ評定の席へは病氣だと言ひ立て〻出席する者も一人減り二人減り終に僅に六十名しか無いのに今日お金配當と云へば大廣間が處狹きまでにギツシリ詰り込んだ内藏之助は心中大に嘆息いたし内藏「如何に世は澆季に赴いたからとは云へ何事であらう斯くまで慾には耽り易いものか……これまで妻子眷族を安穩に過したのは誰のお蔭か夫れを思つたら正逆の一大事には粉骨碎身して亡君のお恨を晴さんと願ひさうなものであるに賴み難きは人心である……」と胸は涙溢れる斗で御座います

此時内藏之助は惣出仕の人數の改めさせまするとまこと眞に病氣の者兩三名を除いては悉く登城いたされました内藏「御一同に申す此程中より種々申談じたる籠城の義並の花岳寺切腹の相談も遂に纏まらず致し方も無き事故御上使着の上速に城を明渡し申すべく依つて各々には何國なりとも心任せに

立退かれるやうに……就ては亡君永年御丹精に相成り萬一の御用意遊ばされたる御貯藏金今更有つても無用のもの御城渡しの節は沒收されるもので御座れば今日御一同へ配當いたさんと存ずる夫れ故御集會を願つたやうな譯……

……又城下に通用したる銀札は悉く引換へ遣はし町人共に迷惑の懸らんやういたし遣はしたく存ずる尤も此等の義は何れも御出仕なき爲め重立つたる人々の間に議決いたしたもので御座れば御意見のある方は腹藏なく仰しやつて貰ひたい」と一座を見渡すとき進み出でたは大野九郎兵衛で御座います忠臣の面々は實に苦々しい事に思はれたが近藤奥野小山等の勇士三名も今日は默つて居る九郎兵衛は一座を見渡し九郎「御城代の仰せ如何にも尤至極殊に連日の御骨折り感服の外は御座らぬ去り乍ら町人共の銀札引換は如何なもので御座らう歟御家さへも滅亡に傾く今日であれば百姓町人たりとて多少の損失はいたし方がない夫れよりは成る可く家中の者に御配當金をいたしたら一

同の爲にも相成るで御座らう此儀は九郎兵衛不賛成に御座る」と憶面もなく強慾なことを述べました内藏之助も呆れて暫し答へもなく顔を見詰めて居りましたが去りとて立腹いたすやうな人物では御座いません 内藏「大野氏成程家中一般の者に多く配當いたし遣はしたいとの御志如何にも御尤に相聞ゑるが夫れは一を知つて其二を知らぬもの人の風上に立つ侍でさへイザと云ふ場合には、、、、こゝろ、、、、サモシキ心の起り易きもの況して町人風情にて利慾にのみ走るものが御家滅亡と聞いたなら散らばつた銀札は此後役にも相立たず非常な迷惑を受けると云ふ事を心配いたさぬ者はなからうと存ずる……お家が榮えて居ればこそ通用するものゝ左もなくて何で御領分内に通用いたさうか夫れも此れも皆殿の御威勢シテ見れば今や御家が危頽に沈まんとする場合散布せし銀札を其儘にいたし置いては第一亡君のお名前にも係はることと御家の爲め亡君の爲め是非に之れは引換遣はすで御座らう」と内藏之助は理を説いてキツパリ挨拶をいたし

ました

九郎兵衛も幾ら強慾だつて道理に勝つことは出來ない 九郎「成極御尤もの御言葉……然らば御金配當の義は如何樣なる方法にいたさるゝにや其儀一應承りたい」内藏「去れば御金配當の儀は祿高の多きものには少なく配當いたし祿高少なきものには多く配當いたし遣はす所存……夫れと申すも平生祿高多きものは夫れ相應の器量あらん去すれば例令浪人いたし孰れへ奉公いたすとも正邪に足輕にも住込むことは御座るまい夫れに引き換へ祿の少なき者は仕官いたすにも容易く口もなし殊に今日までの暮向き萬端等も如何かと存ずる儀も御座れば左樣取極めたく存ずる」之を聞いたる九郎兵衛烈火の如く憤つた 九郎「之れは御城代にも肖合はしからぬ事を申さるゝものかな夫れでは全然某しとは反對の意見で御座る……第一祿高の多きものは夫れ丈の入費のかゝるもの之れ迄下人等も多く召使つて居れば一々夫れ等に暇を遣はすに

も手當も遣られずば涙人いたし仕官奉公するとても貴殿の云はるゝ如く足輕にも住込まれずシテ見れば二三年は居喰いたしても差支へなき覺悟はいたし置かなければならぬ夫れを小祿の者が多分の配當を頂き大祿の者少なき御配當ではナカ〳〵以つて引拂ひも出來ぬやうな次第依つて某一ツの意見を申述べるで御座らう 内藏「兎も角も御意見を述べられよ某とても決して我を張らん己れの意見をのみ徹さんとの所存には御座らぬから……」と内藏之助は寛仁大度充分人の意見をも聞かうと云ふ思召であります 九郎「先づ某の意見と申すは斯うで御座る……唯今も云ふ通り大祿の者は大祿丈の入費が懸ります故祿高に依つて配當するのが正當と存ずる之れなら誰に聞せたつて決して不公平とは云はぬ考へ……」と九郎兵衛祿高に應じて配當の說を提出いたした……ソレと云ふものは自分が大祿であります故祿高ならば已れは多分に貰へると又も强慾なる意見を持出したので座中の者は俄かに噪ぎ出した

……成程小祿小身の者は籠城會議の時も切腹評定のときも出仕いたしませんけれど扨お金配當となつて見れば流石に誰しも慾しい殊に城代大石内藏之助よりは小祿者に多分の配當と極められたのを九郎兵衛が反對に出懸けたものだから孰れも噪ぎ出すのは無理はない 甲「御家老も何もあるものか夫れは主君御存生中の事御家改易となるに御家老風を吹かせやがつて擲つて仕舞へ 乙「イヤ擲る位では間に合ない殺して仕舞へ殺せ……殺せ……」と云ふ譯で座中殆んど總立の噪ぎであります内藏之助は大音を揚げ 内藏「何事なるぞ……一同鎭まらつしやい爰は亡君御靈牌の前なるぞ」と云はれて一同全く鳴を鎭めシーンとした……實に鵜の一聲て御座います……ソコで内藏之助は家老職大野九郎兵衛よりも配當の意見を述られましたゆゑ强ち已れの意見を通すばかりには參らない即ち臣下一統平等に分配し例令女子共なりとも人頭があれば一人に付何程と公平に分ることにいたした之れには一同贊

成したがプツ〳〵言つて居るのは九郎兵衛並に大野派の味方ばかりだけれどナニシロ多數決であるから其儀に決を取りました

夫れから其處へ御貯藏金を持運ばせましたが先づ亡君の祠堂金永代の廻向料次に奥方のお賄料を充分見積つて別にいたし置き城下の町人共の銀札引換への金高をも見積り他へ別にいたし夫れより殘額を臣下一同へ分配いたす

内藏之助は再び九郎兵衛に向ひ内藏「大野氏貴殿も茉も當家上席に列して見れば御配當金を受けるも心苦しき次第此度は辭退いたし足輕共には多少なりとも余分の配當があるやういたし遣はさうでは御座らぬか九郎兵衛は相談に乘らぬとは承知して居るが兎も角も申出でたスルと按の定九郎兵衛に於ては九郎「成程大石殿は平生御手許豐かなれどナカ〳〵茉如きは必迫の場合實はお家も改易に相成つて見れば向後暮し向きを如何いたさんかと存じ居る次第……夫れ故祿高の儀も申上げたやうな譯……配當を辭するなと

は茉は迚も御仝意は致し兼ます夫れは貴殿一人御勝手に御辭退召れい」と實にソツケない挨拶……列座の面々も九郎兵衛の强慾には呆れて仕舞つたが心ある者は今更グツ〳〵云ひ出したところで仕方がないと思つて居るから默つて居る其時に御金奉行岡島八十右衛門から夫れ〳〵頭數に應じて配當いたすと九郎兵衛は四十兩受取る事になつた九郎「斯ふ云ふ時には娘を嫁けなければ良かつた一人割で貰へたつけものう、おまけに娘には孫まで出來て居るアレでも一人割だ馬鹿〳〵しい事をした」とブツ〳〵言ひ乍ら配當の金を勘定して居ると中にいかゞはしい金が二三枚あつた故九郎「アヽイヤ岡島氏之れは通用も覺束ないから御引換へを願ひたい八十「左樣か……然らば御引換申さう」と云つて引換へて遣る、スルと九郎兵衛引換て貰つて又段々と改めて參ると中から又五枚ばかり通用の出來ぬのを見出した九郎「岡島氏貴殿は御金奉行では御座らぬか斯樣なマヤカシ物を勘定の中へ讀み込で渡す

などゝは以つての外の事……察する處若し引換へをする者がなければ夫れを已れの利分にいたす心で御座らうナ」と已れの卑劣心に引比べて八十右衛門をたしなめました元來岡島八十右衛門と云つては家中の正直物と云はれる代りには至つて短氣な男で其上に非常な勇力であります故今此言葉を聞くや否や火の樣に赤くなつて大刀の鯉口を切り九郎兵衛の前へ居合腰になつて詰寄り八十「默れ乞食侍……已れの卑劣なるに引比べ眞の武士なる八十右衛門に克くも左樣なことを申したな今一度申して見ろ首はないぞ」九郎兵衛慄へ上つた九郎「此りやア飛んでも無い事を言つて仕舞つたワイ元の家老の積りで惡口を云つたが那の無法者が怒つては殺されないとも限らない」と齒の根も合はずガタ〳〵慄へて居る八十右衛門は此有樣を見て怒つては見たものゝ心中可笑しくなつて仕舞つたが態と大音を發して八十「ヤイ九郎兵衛……其方は元老職の身でもあり且つは四十兩も配當を受けて見れば例令如何はしい金があつても僅か斗りの事を彼是申さんでも宜しいではないか卑怯未練な根生に引比べ此八十右衛門が懷中を肥すなどゝ恥辱を與へるとは無禮な奴だ立て九郎兵衛尋常に勝負いたさん」と尙も召し升のて九郎兵衛生きたる空もなく唯其場に平身低頭して居る內藏之助は見るに見兼れ八十右衛門をなだめ九郎兵衛を小屋へ送り返しましたが此日は無事に御金配當も濟翌日は町人共に銀札引換の布令をまわし悉く之れも引換が濟ました故此上は御上使の到着を待つの外なしと內藏之助は充分心構へをいたして居りました……

○第十七席

古今の忠臣城を渡して出づ

住馴し城を顧みて怨み幾何ぞ

御上使到着の御待受けとして內藏之助は城の內外を掃除いたし萬事殘ることなく指揮いたしましたが彌々四月十八日御上使として荒木十左衛門、榊原采女正、御代官石原新右衛門御到着に相成ました又城受け取りとして脇

坂淡路守、木下肥後守は人數凡そ七八千人を引き運れて乘込まれた……
で御上使到着の知らせが城内へありましたに付き内藏之助は早々に出迎へま
したが之れは即ち城の上掖分で御座いました夫れ故別段御上使の御取扱ひ
ではない荒木「内藏之助……流石淺野家は政事向も行屆き殊に内匠頭の亡き
後は其方の心づかいにて道路の掃除までも善く行き屆き城内の隅々申分は
なく感心いたした内藏「ハヽア厚き御言葉にて恐入り奉ります……」と此
日は之れにて御上使は旅宿へ御歸りに相成つた内藏之助は城下の者に下知い
たし火の元を注意いたさせ夜に入つてより近藤、小山、奥野、吉田、片岡等七
人を召連れ御見舞ひとして參候いたされました……スルと御上使に於ても早
速御目見え仰せ付けられたるにより内藏之助は謹んで平伏いたし内藏「扨此
度内匠頭殿中をも憚からず上野介殿を刄傷に及びしに就ては切腹仰せ
付られ城地御召上げの義別に異配は申上げませぬ去りながら事突然の珍事家中

の難義何卒御推量下さいますやう願はしう存じます去りながら何事もなく
城地御返納申上げる事聊も相違之れなきに付此段は御安神下さるやう願ひ
上げ奉ります……御遠路の御下向御辛勞の程恐察たてまつります右の赴
き言上いたしたく慇々伺候いたしたる次第に御座います」と懇懃に申述べま
した故御上使荒木十右衛門殿並に榊原采女正殿にも厚き御挨拶があり
十右、采女「實に内匠頭に於ても不慮の御災難家中一般の當惑推察いたす……
殊に今日下見分の節何一ツ手落ちなく行屆いたる事は感ずるに余りある何う
か首尾よく御城渡しも相濟んだなら孰れゆる〳〵面會いたすであろう」と御
丁重なる御言葉があつて内藏之助は退出いたしました……ナニシロ明日
は城渡しの大切なる日で御座いますれば其晩は脇坂、木下の人數は要所々々を
堅めて戰陣の用意少しも怠りなく篝を焚き金鼓を鳴らし陣鐘螺貝の音は頗る
物すごく整々堂々と控へましたは實にスハと云はゞ打つて出でん斗りであり

ます

内藏之助に於ては其夜は眠りも遣らず城内城外を馬上にて見廻り第一火元の用心を嚴重に申渡しましたが夜更けて後大手の角櫓へ上り四方の樣子を見渡すところ脇坂、木下の兩陣ともに實に隊伍を亂さず陣の布き方など目冷しくありました此時近松勘六、小山源右衛門、奥野將監、中村勘助、近藤源四郎等を左右に從へられて居りました故内藏「如何に方々、克く陣營の配置を見るが宜い兩大將とも未だ戰陣の場も踏ます若年とは申しながら武道の心懸けは感心なものであるが今少し物足らぬ處が御座れは之れは心得の爲め申置であろう第一明日は城請取りの事であれば兩將共申合せて其當日に人數を寄せられ直に城へ乘込んで宜しからうと思ふ然るに今宵は夜陣を張つて敵の萬一に備へろなどのことは徒らに士卒を勞らすのみのことで左したる戰功の無いもので御座る況して城内には如何なる計略があろや夫れさへも計

り難きに城近く押詰めるなどゝは甚だ謂れなき事であらう攻城の古法に名將は十双倍愚將は二十双倍

と申すことがある、シテ見れば宜しく小高き丘に陣を取り先城内の樣子を見澄して押寄せ充分一戰いたすなれば勝利も得らるゝ事であろう夫れに何ぞや大將軍の旗を押立て大提灯などを立てるとは全く敵に目印を與へるやうなもの……彼の提灯を目當に大砲でも打ち放したなら彼れの軍勢は忽ち足並がくづれる事だろう」と打笑はれましたナニシロ内藏之助は山鹿素行先生より軍學兵法の直傳を受けましたる事であれば脇坂や木下の軍勢例へ何萬人あろうとも更に怖れる事はない討ち破つて見せると云ふ胸に計略が定まつて居つたので御座います……此時内藏之助は一同を顧みて内藏「當櫓に於て斯く大軍を見渡すも今宵極りの事であれば一ツ敵を驚かして吳れん御覽あれ」と云ひさま腰にさしたる馬乘の提灯を高くかゝげ二三度左右に振りますと忽ち以前の提

灯を引き卸し篝火は消えて眞の闇と相成り人馬の前後左右に馳せ違ふ有樣は恰かも對戰の用意いたす如くで御座いました内藏之助も感に入り 内藏「併し兩軍共ナカ〳〵軍略に老けたる者も居ると見えて陣中の心懸けは充分である」と猶も余念なく眺めて居りましたが其内に追々明方眞近く相成りました故一同樽より下り開門いたす其内に寄手の面々は整々堂々と隊伍を整へ城内指して繰込んとする此時ハヤ上使荒木十左衛門殿及榊原采女正殿、石原新左衛門殿登城に相成りますに依つて大石内藏之助を始めとし片岡源五右衛門、小野寺十内、吉田忠左衛門、小山源五右衛門、近藤源四郎等何れも麻上下熨斗目の衣服にて股立を高く取り出迎へまして軈て本丸へ入給ひし時内藏之助は謹んで平伏いたし 内藏「恐れ乍ら内藏之助申上げます……何卒内匠頭弟大學頭江戸表に罷り在りますれば彼れをもつて内匠頭跡目相續仰せ付られろやう偏に御慈悲を願ひ上奉ります」と再三再四押して願ひましたが御上使に於ては更に御返答がない之れは其筈で御座います幾ら願つたところで決して御上使の一存にいたし取扱はれる事の出來べきではない……尤も御上使と云へども内匠頭の心情も御推察に相成り且つは内藏之助の忠節をも御存じの事なれば出來る丈は便宜な處置に取計らひ遣はしたくは御座れと爾うもなりません故別に御挨拶はない其内に脇坂、木下兩家の人數は繰込んで參りました故之れで全く城渡しも無事に相濟んだ……先づ斯うなつて見ますと淺野の家來ば城内に留まることは出來ません併しソコは御上使の御憐愍で御座いまして爾う早急にいたさんでも夫れには便宜を與へて下すつた、内藏之助も萬端殘る方なく後々の用意をいたしたが孰れも恙なく渡し濟と相成りました故之れにて漸く安心いたし當時城中に留まりし七十余名と共に廿一日の朝城中を立出でましたが實に永年住慣れし赤穂城を後にして之れより何れの空にさまよふにや恰かも木から落ちたる猿同樣で御座いますれば豫て復讐の同盟に加はら

ん者は孰れも行末如何いたさんと途方に暮れました内藏之助も之れを見るに付け實に胸も潰れる思ひ　内藏「アヽ、如何に残念なことだらう斯うして命を全ふして御城門を出るさへ悲しきに況してや上野介を打損じ吉良家は滿足御自分は切腹仰せ付らるゝと云へば其時の御無念さは如何ばかりで御座つたらう悪むべきは上野介何時か恨を晴し亡君の御無念を晴さずに置くべきか」と胸は沸え立つ如くで御座いますケレども何時まで御門際に立つて名殘を惜んだところで仕方が御座いません故吉田忠左衛門、富森助右衛門、小野寺十内抔と共々に城下の山本屋と云ふ旅籠屋へ宿泊いたしました、ナニシテも之れまでは御城代様で飛ぶ鳥も落すべき勢であつたる大石内藏之助殊に慈悲の志深く百姓町人迄も善く眼を懸けて遣つて置きましたから今山本屋へ御宿泊になつて居りますと云ふ事を聞いて孰れも之れ迄恩澤を蒙つたものは暇乞に來る

×「山本屋さん何うか俺には特別に取次いで頂きたい御城代様に茲でお別れ

申したら何時お目に懸れるやら之れ迄御恩に預つた御禮をも述べたし御暇乞もいたしたいから何うか後生だ俺を先きへ取次いで下さい、ナンナラ裏の梯子を上らして呉れないか　山本屋「夫りやア大きに困りますよ御二階は人の立つ處もない程ギツシリ詰め懸けて御城代様に御目に懸りたいと云つて居るが爾う一人〳〵に御逢になつて居ては日が暮れて仕舞う夫れだから今小野寺様が御名代になつて御挨拶をして居る處だ　「仕様がれいナ……若し山本屋さん幾らでも座敷料は出しますよ何うか何番に御居でだか通して呉んれいよ世の中は金づくぢやアないか慾のれい旦那だなア……幾らでも逢はして呉れりやア出すと云ふのに……」と我勝に御面會を求めますが左様一々御逢ひになる譯にもなりませんに依つて殘念ながら其儘立歸つた者は何人あるか知れない……明くれば大石始め吉田、富森、小野寺等は京都を左して出發いたしましたが之れより愈々義黨の面々苦心のお咄しに移りますが討入り迄には暫らく時日も

御座い升故義士銘々傳を言上いたす事に致しませう

村松喜兵衛赤穂に向ふ

○第十八席

三太夫父を氣遣ふて跡を跟ふ

愈々御城渡しも相濟みましたに依り之れから義士銘々傳へ轉りませう尤も孰れも義黨の面々で御座いますれば誰れが忠義が重く誰れが輕いと云ふ筈はないが併し其内でも言行の内に面白き咄しのある人と咄しの無い人がある……スラリと何の苦もなく成長つた人には幼年の内からの咄でも平々凡々で愉快な事實はありません併し幼年の時から家が貧乏だとか父の仇でも討つたとか云ふやうな人には云ふに云はれぬ辛苦があつて實に意想外の事が隨分あります……

エヽ爰に言上いたしますのは村松三太夫が父を扶けて入城いたしたるお咄で厶います一體三太夫は兄弟二人で御座いまして三太夫は長男で次男は政右衛門と申されました父を喜兵衛と云ひナカ〳〵忠義一徹な人物で御座いまし

た然るに此度主君内匠頭殿中刃傷に及びお家改易と云ふ事を承知いたし喜兵衛實に惜ない事になつた嘸や御國表は一方ならぬ騒動であらうが何樣大石内藏之助殿と云ふ大智大勇の御方が御出なされば〳〵暗々と城を渡すやうな事もなからう某も百石の御知行を頂き今日まで何一ツ不足なく暮して往かれたのも孰れも殿の御影だ夫れを思へば萬一籠城でもいたすなら軍勢の中に走せ加はり一方の防矢でもいたさんと思ひ立つてはナカ〳〵猶豫いたしては居られませんに依り二人の悴を一間に呼び喜兵衛「三太夫……三太「ハイ……何御用で御座いますか唯今弟も參りますで御座いませう喜兵衛「左樣か併し何をグヅ〳〵致して居るか直ぐ參れと申して連れて參れ三太「ハイ……ダガ唯今母上の御用をいたして居ります故喜兵衛「ナニ母の用なと跡でも宜しい急々兩人に相談があるのだ」ソコデ三太夫は弟政右衛門を召連れて參りますと喜兵衛「呼んだのは外でも無い篤に兩人に申聞すことがある……今

度の大變に就ては定めし赤穂城に於て大石殿軍略を巡らし籠城の御用意あることゝ存ずる決してムザ〳〵土へ城渡しをいたす氣遣ひはない左すれば此父は之れより直に軍勢の中に走せ加はり濠の埋草とも相成るか又は矢玉鐵砲玉の的とも相成り主君萬分の一の御恩を報じたいと思ふ夫に付き其方一人は殘りて母を養ひ一人は敵上野介に忍び寄り一太刀なりとも恨みて殿の御無念を散ずるやういたせ今生の別れであれば之れより一同盞をいたさん用意に及べ」二人の兄弟も忠義の志は父に劣ることは御座いません故決して止めはしない直に別の盞を汲みましたが老年の喜兵衛は具足櫃と槍一筋を携へ喜兵「去らば之れにて暇申すぞ唯今申付けた一言必ず相守り忘却いたしては相成らんぞ」と云ふや否や勇ましく家出をいたしました跡に殘つた母親並に二人の兄弟は如何に氣丈とは云へ取る年で御座いますに依つて頻りに心配いたし三太「如何だい政右衛門アヽして父上は元氣よく御出立になつたけれど一

里や二里の處ではなし山河越えて參らねばならぬ處、何うも父上一人長途の旅は心元なく思ふ夫れ故二人の中一人は母親の許に仕へ一人は父上の御供を致さうでい無いか」母親は之れを聞いて母「お前達の云ふ處は此母を思つて一人當地に殘らうと云ふのであらうが夫れは必ず無用にいたすが宜い二人ながら父上のお供をいたし若し籠城の御評議で寄せ來る敵を拒ぐ場合であつたなら命は毫毛より輕くし充分に働いて天晴なる討死をいたして貰ひたい……サア二人とも直に父上の御跡を慕ひ御供申すが宜らう」と夫に連れ添ふ妻の志ナカ〳〵惑心な者である併し父上だから御先途を見屆ければならず母上だから何うでも宜いと云ふ譯は無い一人は父上のお供をいたし一人は母上のお傍に侍る夫れが一番上策で御座いますから色々母親を慰め三太「ナニしても一人は殘ることに致しませう萬一の時には再び赤穂城へ乘込むとも取敢ず二人の内で取閣をいたし當つたものは父上のお供をすると云ふことに致さん」とソコで兄

弟は一間の内へ這入りましたが軈て二人は閨取りも濟んだと見えて母の前へ出で三太「母上……斯ふいふことに定りました拙者は父上のお供を申し弟政右衛門が跡に殘つて母上を御奉養申すことになりまして御座います母「左樣か夫れでは爾う極めたが宜いでしやう」之れより三太夫は早速身支度に及び兼て正逆の時の用意いたしたる具足櫃並に鎗を取出し飛ぶが如くに父喜兵衛の後を慕ひました、丁度鈴々禁まで參りますと喜兵衛は波打際に休んで居る三太「お父上……若し御父上……」父「ヲ、悴か今頃何用あつて參つたアレ程申付けて置いたのに不屈者奴が……」突然頭ごなしだ、ケレども三太夫は平生父の氣象を克く存じて居ります事故三太「成程お父上の御叱りは御尤千萬に御座いまするが實は之れ〳〵斯く〳〵の次第であろ」と母親とも相談いたし弟政右衛門と閨取りで參つた事を詳しく物語りましたので父も初めて怒を納め父「左樣なれば早速供をいたせ」と云つて又も之より路を急ぎましたなれどナニシロ老體の事で御座いますゆえとかくあしはかどらず、故兎角足が捗々しく進まない三太夫は殊に父の爲め駕籠を雇ひなどいたし漸く赤穂へ着いたしましたから之より内藏之助の許へ案内して喜兵衛父子の志を述べますと内藏之助も深く老人の忠義を感じ又三太夫兄弟が忠孝の行ひを聞いていよ〳〵感激し暫し悲歎の涙に暮れましたけれどナニシテも籠城の議は撤回され城明渡しと云ふことになりましたので茲に内藏之助は彷かに義士の概略を物語り喜兵衛老人も大に之れを贊成いたしました後翌年十二月十四日吉良家討入りの折玄關のまいら戸を打破つて名乘りかけたのは即此村松三太夫で御座いました

○第十九席

忠臣中途に斃れて遺子を托す
右衛門七奮勵父を辰しめず

エ、内匠頭の御家臣で知行百石を頂戴いたしたる矢頭長助と云ふ忠臣が御座いましたが主君長矩の御無念に對しては是非一刀なりとも敵上野介を恨

まんとの念は忘るゝ暇なく同盟の中に加はりましたけれど如何んせん取る年波には爭はれず殊には元祿十四年の秋の頃よりして兎角病氣勝ちで御座います

長助「殘念なる哉今にもあれ大石殿より御通知があれば一番乘は北長助と思ひ居りしに言ひ甲斐なくも此病ひでは迚も御供は叶ひ難し」と心中頻りに嘆息をいたし居りましたが切めて今一度本腹の上同じ捨る命なら上野介に一大刀恨を返した上潔よく切腹いたさんものと藥養手當をいたし居りましても益々病は重る斗り……迚も本懐覺束なしと思ひたるにより一子右衞門七當年十六才に相成りますが病間へ呼び入れ父「其方之れより大石殿の處へ參り何共申兼ねたる次第には御座るが最早臨終も程近く今ばの際に是非一目お目にかゝりたき故御越し下さるやうにと御願ひ申して參れ……が若御出で下さらぬ恨りたき故御越し下さるやうにと御願ひ申して參れ……が若御出で下さらぬとあれば據どころなき事故歸りに駕籠を申付けて參るやうに」右衞「承知いたしましで御座います早速之れより參ります」と右衞門七は大石殿

の涙宅へ參り父の咄したる一伍一什を述べますと内藏「イヤ〳〵夫れは參る位は雜作もない事だ直ぐ之れより伺うことにしやう……マア宜いや其方は緩りいたして參れ悴主税も居る故遊んで居るが宜らう」右衞「ハイ有難う存じますが御出でを願へますれば手前お供をいたしますで御座いませう」内藏「左樣か夫れでは直樣同道いたさん」と之れから矢頭長助の宅へ參り病間へ通りますと右衞「お父上大石樣が御出で下されました」長助「ヲヽ左樣か之はく斯く見苦しき病床へ御通りを願つては何共恐入ました次第……殊に某よりお訪れ申すべきを態々〳〵御足勞を願ひましては妙理にも盡きた次第と存ずれど何分にも室内さへ歩行の出來兼る場合……飛んだ失禮をいたしました」内藏「ナンノ〳〵其お詞では却て恐縮いたす……併し御病氣は如何であるか必ず力を落さぬやうに藥用が專一で御座るぞ病は氣からとか申せば氣を確乎持てば決して病の起るものではないと迄申すもの日頃の元氣を出して弱い氣を

出さぬが宜い 長助「有難きお言葉には御座いますれど最早定まる命……就ては爰に一ツ一生の御願ひが御座います 夫れは外にも御座いませぬが乗て一味連判いたし亡君の御無念を晴さんと存ずれど 今申上る通り今日か明日かの命故迚も今生では怨を報ゆる事も出來ますまいと存じます然るときは折角の決心も水の泡之れが如何にも残念故願はくば悴右衞門七若年者にて却つて足手纏ひとは存じますれど某の名代に連判の内へ御加へ下され御子息主税殿の御供ともいたさせて下さらば此上の面目は御座いませぬ死後の本懐此事宜しく御取斗らひ下さるやう」と涙乍らに頼みます忠士の志し聞及んだる内藏之助暫し言葉もなく共に涙に暮れたるが 内藏「死後に我子を留めて亡君の御恨を晴さしめんとする御老人の胸中御察し申す……我子の爲めには死せよと願ふ者は誰一人も御座らぬ假令我身を殺しても我子には無事息才を祈るのが親の情然るに我身を留めて親の志を繼がせ死れよと敎ゆる御志内藏之

助感服の外は御座いませぬ……宜しう御座る確かに御引受申した討入りのときは悴主税と相比び陣頭一番に進ませるやう屹度取斗らうで御座いませう御氣遣ひあるな」と世にも頼母しき内藏之助の一言に長助は涙堰きあへず右衞門七の手を執り長助「コレ右衞門七大石殿の御言葉を承つたか厚き思召の程必ずく相忘れてはなりませんぞ亡君の御志をつぎ敵上野介奴を一太刀たりとも怨まねば子ではないぞ親では無い例令之れより幾年の間辛苦艱難いたすとも大石殿の御指圖を守り忠義の志を勵げむが宜らう縱令此父が無き後にても大石殿を父と頼み萬事御言葉に背いてはなりませんぞ」と悉く敎訓に及びます内藏之助は悉く長助をなぐさめ 内藏「御子息の事は某し御引受け申したれど御病氣とても全快いたさぬと云ふ事はない醫藥專一に保養いたしたら共に嬉しき討入もいたされるで御座らう夫れを樂しみと心靜かに御養生いたさるゝが宜い」と申して之れから内藏之助は立歸りましたが氣の

緩みにや遂に夫れより二日程經つて惜や黄泉の客と相成りました右衛門七の愁傷は眼も當てられぬ程でありますが之れは實に尤な次第……内藏之助も此知らせを聞いて葬儀萬端の差圖をいたし厚く野邊送りもいたしましたが右衛門七は幼年の事で御座いますれば別に浪宅を張る必要もなく内藏之助の許に引き取られましたナニシロ父長助が忠義一徹の志でありますれば右衛門七にも幼少の折より武術を仕込み劍術は若年に肖合はず一刀流の奥儀を極めて居るし軍學の道にも明るき故内藏之助も頼もしく思ひ何事も我子の如くにいたし遣はすので右衛門七も父とも思ひ主とも思つて内藏之助に仕へましたケレども内藏之助浪宅へは吉良並に上杉家の間者が多く入り込み樣子を探りに參りますので、悉く身元放埒にいたして居る主税と雖も其通り……然るに今血氣盛んの右衛門七を永く我家へ置くときは酒色の道を敎えるやうなもの去すれば忠義の志を次第に薄がせ放蕩者にならんとも限らない己れは心あつて仕ても萬一

右衛門七を开んな道樂者にして仕舞ひ同盟の士一同に迷惑を懸けては亡き長助に對しても相濟まぬと之より同盟の一人小野寺十内に事の仔細を語り 内藏「何うか本望を達する迄右衛門七を手許に置き充分敎訓いたし呉れるやうに」と頼みましたので十内は快よく承諾いたし 十内「決して御心配には及ばぬこと某御引受け申せしからは御安心下さるやうに」との挨拶で御座いますから早速右衛門七を一間に呼び 内藏「此處は敵の間者が目を付けて毎日の如く樣子を窺ひに參るゆゑ其方が此處に居ては又何かのさまたげと相成らんも斗られず」と之れより十内の許へ送りまして充分敎訓をいたしましたに依り討入りの時も天晴れなる働をいたし若年に似合はしからぬ手柄を顯はしました親は死んでも我子は父の遺志をつき後世に至るまで忠孝の名を顯はしましたは實に嘉すべきのことで御座います未だ〳〵義士の中にも非常なる辛苦を積んで亡君の御恨みを晴した者は數多く御座います故席を重ねて言上いたすとして一寸一

吸御免を蒙ります

○第二十席

烈婦一身を捨て我子を激勵す　唯七感憤益す義勇に勵む

義士四十七士の復讐を遂げます迄にはさまざまなる慘怛辛苦のあつたもので御座います中には一命を抛つて其子を誡める親もあれば妻を離別して愛惜の情を斷つたものもある……聞くも涙語るも涙の種で御座います……茲に義士の一人に武林唯七とて忠勇無双の侍がありましたが中には唯七は亂暴者で短氣だとか申す連中も御座いますけれど之れは大なる誤りで決して斯んな次第では無い併し事に臨んでは必ず成し遂げなければ已まぬと云ふ大丈夫の魂ありて後へは引かぬと云ふ氣象は行の上に顯はれました元來唯七は幼年の折から父を亡ひ母一人の手で養育せられましたが成長の後は江戸詰を仰付られ忠義を勵んで居る然るに元祿十四年三月十四日殿中に於て主君

内匠頭刃傷を遊ばされたに就て家中の騒動は一方ならずでありました唯七の母は之れを聞いて暫し惘然といたし「アヽ實に情ないことだ夫れに就けても嘸や主君に於せられては御無念の事で御座らう……ダガ斯く相成つては必ず御家に疵が付き如何なる次第に相成るやも圖り難けれど夫れに就て案じられるは悴唯七……何うか亡君の御爲ならば命を抛つて忠義を勵むやうにいたさせたいものだ」と暫し嘆息いたされて居たが「ヨシ〳〵死をもつて子を勵ますと云ふ者は昔から聞き及んだことだ必ず言甲斐なき者とならぬ樣に心魂をこめ死して悴の一身を謹つて遣らう」と流石心の堅固なる母親であり升から唯七を側近く呼び母「唯七一寸參れ……唯七「ハイ今日は大層お寒う御座いますが御見受け申せば御顏の色も悪し御氣分でも御悪う御座いますか母「イヤ〳〵別に氣分の悪いこともないが餘り夜寒が身にしむ故一献酒でも汲まうでは無いか唯七「ハイ夫れが宜しう御座いませう」と親孝行の唯七で

御座います故自身酒肴の仕度をして母の前へ運びました唯七「サア母上お一ツ召し上れ母「左樣かれ夫れではお先へ頂くとしやう」と猪口に二ツ三ツ重れましたが母「唯七返盃いたす」と唯七に差して母の酌にて同じく二ツ三ツ重れました母「ア、宜い心持になつたのう兎角鬱したときには酒に限るが……唯七酒は呑んでも宜い母が許す……ケレども必ず酒の爲めに魅入られてはならんぞよ……生氣を失つて正逆の時に不覺を取るなどゝ云ふ事が無いとは限らんが平んな事では武士の面に疵のつく事左樣なことをいたして成らんのう唯七「ハイ決して深くは嗜みません故決して前後正體のなくなる程頂戴はいたしません母「其心懸けさへあれば夫れが何よりだ……ア、今夜のやうに面白く頂いた晩はないドら床を取つて寢せらうか」と少し微醉になつて母親は臥床に入る唯七は母の餘念なくスヤ〳〵眠つたるを見て己れもつゝいて床に入りましたがハヤ鼾の聲も高くなりました此樣子を見だる母親は母「ア

、之れで此世に思ひ置ことはない惡いことを願うのではないが萬一お家改易とでも云ふ場合には怜が必ず思義を勵んで呉れゝば宜い夫れを那の世から祈るばかりだ」とホロ〳〵と涙をこぼし床の上に居直りましたが軈て料紙硯を傍へ引寄せ落つる涙を硯に受けて何かサラ〳〵……と認め其れをば堅く封じ上へ遺書の事と記しました母「何時まで嘆に暮るゝとも時移りては詮なき事イザ最後を急がんと用意の懐劍を取出すが早いか咽喉を目覓けてズブリ……と一刀突き徹しました

素より老年ながらも氣丈なる女の事とて體の亂れるやうな事は御座いませんけれどもキヤツ……と叫んだる物音に響の音にも目を覺ます勇士の覺悟ある怜唯七は目を醒し唯七「ア、恐ろしい夢を見たが今のはたしかに人のたまぎる聲何事ならん……と暫し枕を揚げて考へて居ると次の間にて頬りに苦氣なる聲がいたす、ハツと思つて襖開く間もあらばこそ轉げん斗りに這

入つて見ると朱に染みたる儘、母、親は打倒れて居る 唯七「ヤ、、、……コハ何事ぞ母上お氣を確かに持つて給はれ母上イノウ……母上……」と傷所を確と押へ介抱いたしますと孝子の志も通じましたか目を見開いたが如何にも老年の事ではあるし既に覺悟の前の事故ニコッと笑つた儘息は絶えました唯七は狂氣の如く悲しみましたが唯七「如何なれば斯る淺間しき姿に相成られたか主君を失ひ又母に別れ何の樂みあつて生ながらへん共に冥途の御供いたさんと既に自害致さんと思ひましたけれど唯七「イヤ〳〵此儘死れば犬死同前……兼て母上より忠義を勵めよ……君の御恩を忘れるなと常々仰せられたることもある嘆に暮れて心を取亂して却つて母上が冥途のさはりとも相成らん先づ〳〵心を靜め如何なる仔細か遺書を拜見いたさんと涙を拂ひ傍なる遺書を讀み下しました

一筆殘しし〳〵扨も今日殿樣御身の果て思ひも寄らぬ御事故途方を失ひ

驚き入り申候然らば力なき御事と諦め〳〵處如何に致しても馳せ玉ばぬ冥土の御旅御一人にて何程か便りなく死出の山路とやらんに迷はせ候はんと風と心付しより迚も老の身存在へんと詮無き事切てば冥土の御供して御咄の伽とも成り〳〵はんと思ひ詰め斯く成り申候獨りの御手前を捨し事には之なく只々殿樣御幼なき時より數年の春秋をば隨ひ奉りし處今更御別れの悲さ一ツには身を失ひ二ツには母も〆樣に成り候得ば御遺恨含せられし御方を定て君の仇とて何れも御覺悟有可き事なれど猶更御手前に限りては母の爲には仇なりと一向に力の入る可き事と推量致し無き事ながら唐土の王凌とか言ふ者の母双に伏して義を勸めし例に倣ひて旁々身を捨申候此所篤と御覺悟有て仇の事に於ては例令御手前獨り成りとも心を盡し申さる可く御殿樣の御本意母が本意を達し申され候はゞ草葉の陰より何程か悅び申候言ふに及ばぬ事ながら右吳々も申殘し〳〵

堀部安兵衛どの御内方より借り申候曾我物語三册紫の服紗に包み置申候早々御戻し御禮頼み入候小袖一ツ帶一筋はおりん方へ紀念迚送り玉はるべく候能勤め候ゆゑ不便の事と今更の樣に思ひ〻〻御屋敷引拂ひ候後は可く候源五右衛門方へ參られ此樣子篤と物語り有つて本意を達候まで朝夕の世話頼み〻〻樣に申さる可く候元より源五右衛門夫婦の衆を父共母共思ひ候て大切に仕へ候は專らの事に候必ず〻〻傍輩中何れも本意を達せんと覺悟の節は其下知に隨ひ假初にも差出て身の譽れを貪り人に疎まれ申さぬ樣にと覺悟有る可く候片岡源五右衛門方へ送る物も札付け包み置候得ば殘りも皆々源五右衛門方へ送り給る可し別に文とも思ひ依り候得共殊の外最後を急き申候故之だにも漸々認め申候萬事は推量給はる可く申殘し度事海山も盡し難く候得共右の通りの事故に茫々申殘し參らせ候其身本意を達し候迄堅固にて如何樣にも心を盡し申さる可く候先はあら〻〻め

で度と

武林唯七どの　母より

（遺書は義士銘々傳轉載）

とありました悲嘆の中にも唯七は此遺書を見るより大に奮發いたし唯七斯くまで心を込められたる母上の御遺言であらば何條之れを相忘れて濟むことか……ヨシ〻〻此上は敵上野介を討取つて亡君の御鬱憤を晴し奚れんと の意氣込にて心密に決し之れより近所の懇意なものにも母の死去せし旨を告げ遺骸は高輪の泉岳寺へ送りましたが之れより唯七「奮然として赤穂に向けて出發いたすと既に籠城の議は中止と相成り復讐の協議は密かに同志の間に成立ました故已れも速かに義黨の一人に加はりましたが討入りの時敵吉良上野介の首を揚げたのは此唯七で御座います

○第二十二席

源藏養家に來つて未だ幾何ならず

忠臣君寵を受くる長短を論ぜず

義士打入りの時に瓢へ酒を入れて腰に付け闘の間に之れを取出しては飲んだと云ふ赤垣源藏の傳を言上いたします……エヽ源藏は素播州龍野の城主脇坂侯の藩士で鹽山源藏と申して居りましたが縁あつて淺野家の家來赤垣三郎兵衛と申すものゝ養子と相なりました……處が御家は此度の大變で既に改易に相成るやうな始末でありますから不忠者であつたなら實家へ歸つて末は野となれ山となれで逃出すやうな始末で御座いませうけれど源藏に於てはソンな樣子は更に無い源藏「何しても縁あつて淺野家の家來となり赤垣家を名乘つて見れば今更ら志を變へるやうな事は出來ない殊には御目を懸けられたる内匠頭樣のことであつて見れば何とか御無念をついで御鬱憤を晴したいと云ふ心懸けで御座います夫れ故大石内藏之助等復讐の義黨と志を

合せ千古不變鐵石の心をもつて遂に本望を達しましたが涙々の身となりしより何れも江戸表へ出府いたし又は名を換へ姿を變じ上野介の樣子を窺つて居りましたなれど自分も實の兄なる鹽山伊左工門の許に厄介になつて居るスルと家中の者も乘て源藏の行ひは存じて居りますし殊に未だ年も若いことで御座いますれば諸方より縁談を申し込れる ×「何うか鹽山さん弟御さんにも御氣の毒な譯で御歸りなつて入らつしやるが手前は一人養子を捜して居ります處ですから成らうとならお貰ひ申せますまいか……左樣です娘は十八になりまして親の自慢では御座いませんがマア容色も十人並でありますし茶生花絲竹の道から歌俳偕までもいたします……隨分之れまで丹精して育てた積りで……ハイ何うか一ツ御相談をなすつて……御尤樣で御一存では決して御決定なさる譯に參りますまい」などと娘を持つ親々は嫁に遣りたい婿に貰ひたいのと頻りに鹽山家へ縁を求めます伊左衛門に於きましては弟源藏も既に御家

が那んな譯になつたし、實家へ歸つて來て居るやうな譯だから相當な緣があつたら嫁を貰はせて別戸させるとか又は養子に遣るとか孰れにかいたさん考へでありました故或日源藏を呼んで其趣きを咄しました源藏は驚いて何も斯うして厄介になつて居つたからと云つたつて再び養子に往かうの嫁を貰はうのと云ふ譯ではない……アヽ兄も拙者の了見は分るまいな困つたものだ……と云つて實はコレ〳〵云々で敵上野介を討ち取り御無念を晴す企があるのだと云ふ事は咄す譯には往かない困つたことが出來た」と思つて居たけれど養子に往く往かないは自分の勝手で御座います故之れは體よく辭退しやうと思ひ源藏「お兄上……折角のお咄しで御座いますけれど其緣談は切望御斷り下さいましモー養子は懲り〳〵いたしました伊佐「養子は懲々いたしたと……成程夫れは爾うかも知ぬ、デは別戸させやう別戸にして鹽山姓を名乘つたら宜らう丁度年頃の娘もあろし夫れに是非嫁に呉れたいといふ處だから……

……」之ちやア源藏も板挾みだ「困つた兄貴だ斯んな難題を持ち込で……」何も之れが斯く大望が御座いませんければ難題でも何んでもない年頃になつて嫁を貰うなり婿に往くなり孰れ身を固めるのは當り前な譯だ併し親兄弟にも洩さぬ密約のあることで今にもあれ敵を討つべき時節が到來すれば討取つて呉れん御鬱憤を晴して呉れんと云ふ精神がありますから緣談を聞いては身頸ひする程蒼蠅い依つて此場合は體よく斷り源藏「何れ又勘考いたした上で御返事を申上げませう」と云ふから幾ら兄だつて養子に往かなければ別戸しろと云ふ譯にも往かない伊左「然らば強ち急ぐ譯でも無いから能く勘考いたして置くが宜らう」と一旦此咄しは中止となつた、クレども源藏に於ては再び時を經れば咄しを持出されぬとも限らない故源藏「之れは今の内に何とか處置をいたさなくては相成らんが寧そ兄の家を駈出して何處か別に住宅を借るとしやうか……イヤ〳〵夫れでは廣いやうでも狹い江戸の中で萬一家中の者にでも出

逢つたときに姿を見られるも宜しくない寧そ之れは放蕩に身を用崩さうか去りとて吉原あたりへ通つては何んな小格子でも金が費つて堪らない何うしたら宜らう此工夫には困つて仕舞つたソコで或日の事、仲間の者に相談すると堀部安兵衛と云ふ勇士が側に居て 安兵「赤垣氏夫れは雑作も無い事だが併し御手前には氣の注くまい 源藏「如何にも其儀に當惑したが敎えて吳れまいか」と源藏は膝を乘出しました

安兵衛は此時酒臭き息をホッと吹きかけて 安兵「コレダ〳〵……源藏「之れとは何で御座るか 安兵「アハ、、、、困つたな貴殿酒は嫌ひかな 源藏「其の酒には困るので見ても胸がムカ付いて厭な氣持になるのだ 安兵「フム夫れは何んな氣持にならうとも少し宛飲み習へば決して飲めぬと云ふ譯のものでは無い試しに少し宛遣つて見るが宜い夫も之も亡君の御爲と思つたら宜らう 源藏「如何さま夫れは御尤だ……爾うして何うするんだ 安兵「爾うして酩酊してからにグデン〳〵になつて管でも捲けば大體の者は厭になつて仕舞うよ」源藏はポンと膝を打ち 源藏「有難い〳〵夫れで拙者も安心した之れから甘黛は已めて酒黛の仲間入を仕やうと試しに一杯呑んで見たが口の處まで持つて往くと厭な氣持になつて來る 源藏「迚も斯んな事では仕方がないと思つて藥でも呑氣でグツと飲みましたが最初の中には如何にも苦しいケレども安兵衛の言つた通り飲慣れて來れば自然と飲める者で御座います、段々と手が上つて參つて最早一合や二合は飲めるやうになつて來ました二月斗りの内に一升酒を呑んで更に驚かなくなつたから源藏之れより門前の酒店山形屋と云ふのへ往つては桝の角から立呑みを遣る酒屋の主人も驚いた今迄は御酒は召上らんお堅人であらしやつたが今では一升酒を召上るやうになつた夫れに時々横町の辻あたりへ酔倒れて赤犬に口のまはりを舐められたりして居たことがあるが切望程に召上つたら宜らうと思ふと酒商賣を仕ながら山形屋の主人は心配して居る